

石崎地区遺跡群

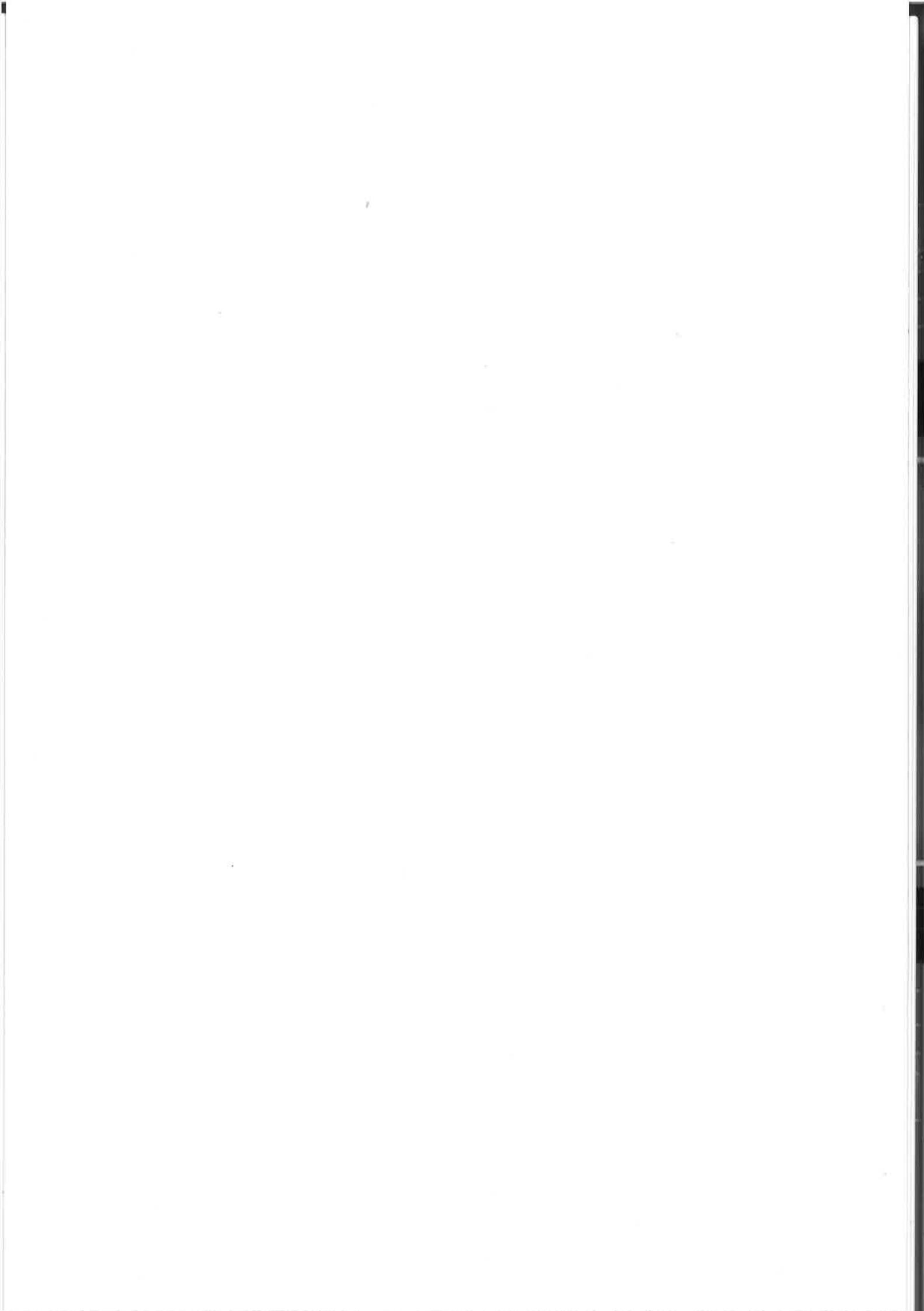
大坪遺跡Ⅱ

—福岡県糸島郡二丈町大字石崎所在の弥生水田遺跡の調査報告—

二丈町文化財調査報告書 第11集

1995

二丈町教育委員会





a. III区第2遺構面の水田



b. 3号溝状遺構



a. II区甕棺墓（上甕の彩文）



b. 同 彩文（拡大）

石崎地区遺跡群

大坪遺跡 II

—福岡県糸島郡二丈町大字石崎所在の弥生水田遺跡の調査報告—

二丈町文化財調査報告書 第11集

1995

二丈町教育委員会

序

二丈町は西側に脊振山系の山々が迫り、北側は玄海灘に面するという豊富な自然に囲まれた田園風景の広がる町です。しかし、福岡都市圏の西に隣接する町でもあり、また、近年の今宿バイパス、西九州自動車道等の開通によって、宅地開発の波が押し寄せ、徐々にではあるが、そのすばらしい自然が姿を消そうとしています。こうした中、町の基幹産業である農業用地の保護、整備の一環として実施されてきた県営ほ場整備事業が、平成3年度までに一貴山地区の面工事が終了、平成4年度の農業用貯水池の建設へと着実に農業基盤の整備が行われている状況と言えます。

今回発掘された大坪遺跡は貯水池建設地にあたり、周辺には、曲り田遺跡、矢風遺跡等の稲作開始期の遺跡が点在している地域であります。また、糸島地域では初めての弥生水田が検出され、多くの木製農工具が出土した事は、我が国の米作りの初源を探る上での貴重な発見となりました。

本報告書はこの調査記録を収録したものであり、本書が稲作開始の諸問題の解明のみならず、埋蔵文化財保護行政の思想育成に幅広く活用して頂ければ幸甚に存じます。

平成7年3月31日

二丈町教育委員会

教育長 吉村昌幸

例　　言

1. 本書は平成4年度に実施した福岡県糸島郡二丈町大字石崎字大坪70-1番地に所在する埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は国県補助を受けて、二丈町教育委員会が実施した。
3. 調査期間は平成4年10月7日～平成5年3月31日までである。
4. 本書に掲載した遺構実測は古川、村上が行い、製図は古川が行った。
5. 遺構の写真撮影は古川が行い、空中写真撮影は空中写真企画に委託した。
6. 出土遺物の実測、製図ならびに写真撮影は古川が行い、宮崎亮一君（別府大学）の協力を得た。
7. 付論として、本田光子氏（福岡市埋蔵文化財センター）に「彩文甕棺の赤色顔料」についての玉稿を頂いた。
8. 本書の執筆ならびに編集は古川が行った。

本文目次

I.	はじめに	1
1.調査に至る経過	1	
2.発掘調査の組織	1	
II.	遺跡の位置と環境	4
III.	調査の記録	8
1.概要	8	
2.遺構と遺物	8	
I区 1号、2号溝状遺構	8	
I区 3号溝状遺構	8	
I区 杭列	8	
II区 2号溝状遺構	22	
II区 2号溝状遺構堰状遺構	22	
II区 杭列、矢板列	24	
II区 甕棺墓	24	
III区 2号溝状遺構	32	
III区 上層の足跡	32	
III区 第2遺構面の水田	34	
IV.	まとめ	44
V.	付　　論	
	大坪遺跡出土甕棺の彩文に用いられた赤色顔料について　本田　光子	46
VI.	おわりに	48

挿図目次

- | | | |
|-----------|------------------|-----------|
| 卷頭カラー図版-1 | a. III区第2遺構面の水田 | b. 3号溝状遺構 |
| 卷頭カラー図版-2 | a. II区甕棺墓(上甕の彩文) | b. 同 彩文 |

第1図	遺跡位置図	2
第2図	石崎地区遺跡群遺跡分布図	3
第3図	調査指導風景	4
第4図	周辺地形図	5
第5図	土質柱状図	6
第6図	土層観察図	7
第7図	I区 1号・2号溝状遺構実測図 (S=1/50)	9
第8図	I区 3号溝状遺構実測図 (S=1/50)	11
第9図	I区 杭列A～E実測図 (S=1/50)	12
第10図	I区 杭列F実測図 (S=1/50)	13
第11図	I区 1号・2号溝状遺構・西側谷部出土遺物実測図 (S=1/3)	15
第12図	I区 3号溝状遺構出土遺物実測図-1 (S=1/3)	16
第13図	I区 3号溝状遺構出土遺物実測図-2 (S=1/3)	17
第14図	I区 3号溝状遺構出土遺物実測図-3 (S=1/3)	18
第15図	I区 3号溝状遺構出土遺物実測図-4 (S=1/3)	19
第16図	I区 出土石器実測図 (S=1/3)	20
第17図	I区 出土石器実測図-2 (S=1/2)	21
第18図	3号溝状遺構内堰実測図 (S=1/40)	22
第19図	II区 3号溝状遺構実測図 (S=1/50)	23
第20図	II区 矢板列 実測図 (S=1/50)	24
第21図	甕棺墓実測図 (S=1/10)	25
第22図	甕棺実測図 (S=1/6)	26
第23図	甕棺掘り方内出土縄文土器実測図 (S=1/2)	26
第24図	甕棺周辺トレンチ出土土器実測図 (S=1/3)	27
第25図	II区 3号溝状遺構出土遺物実測図-1 (S=1/3)	28
第26図	II区 3号溝状遺構出土遺物実測図-2 (S=1/3)	29
第27図	II区 出土石器実測図 (S=1/3)	29
第28図	II区 出土石器実測図-2 (S=1/2)	30
第29図	その他の遺物実測図 (S=1/3)	30
第30図	II区 出土木器実測図 (S=1/3)	31
第31図	III区 検出足跡実測図 (S=1/80)	32
第32図	III区 3号溝状遺構実測図 (S=1/60)	折り込み
第33図	III区 第2遺構面検出水田遺構実測図 (S=1/150)	33

第34図	Ⅲ区 3号溝状遺構出土遺物実測図-1 (S=1/3)	35
第35図	Ⅲ区 3号溝状遺構出土遺物実測図-2 (S=1/3)	36
第36図	Ⅲ区 3号溝状遺構出土遺物実測図-3 (S=1/3)	37
第37図	Ⅲ区 3号溝状遺構出土遺物実測図-4 (S=1/3)	38
第38図	Ⅲ区 3号溝状遺構出土遺物実測図-5 (S=1/3)	39
第39図	下層水田出土土器実測図 (S=1/3)	40
第40図	Ⅲ区 出土石器実測図 (S=1/3)	41
第41図	Ⅲ区 出土石器実測図-2 (S=1/2)	41
第42図	Ⅲ区 出土木器実測図 (S=1/3・1/6)	43
付 図	遺構配置図	

図版目次

図版-1 a	I区全景（東側より）	図版-13	II区出土遺物-1
b	1号・2号溝状遺構全景(南側より)	図版-14	II区出土遺物-2
図版-2 a	1号溝状遺構	図版-15	III区全景（石崎丘陵を望む）
b	2号溝状遺構	図版-16 a	水田検出状況
図版-3 a	西側杭列群	b	3号溝状遺構と足跡検出状況
b	中央杭列群	図版-17 a	3号溝状遺構（南側より）
図版-4 a	3号溝状遺構	b	同（北側より）
b	杭列F	図版-18 a	三つ又鍬出土状況
図版-5	I区出土遺物-1	b	用途不明木器出土状況
図版-6	I区出土遺物-2	図版-19	第2遺構面水田全景
図版-7	I区出土遺物-3	図版-20 a	水田検出状況
図版-8 a	五久地区を望む	b	水田検出状況
b	II区全景（真上より）	図版-21 a	畦断面
図版-9 a	3号溝状遺構	b	畦横板検出状況
b	同側面	図版-22 a	杭・矢板による畦補強状況
図版-10 a	平鍬出土状況	b	同（畦除却後）
b	舟形隆起出土状況	図版-23	III区出土遺物-1
図版-11 a	3号溝状遺構内壠	図版-24	III区出土遺物-2
b	甕棺墓	図版-25	III区出土遺物-3
図版-12 a	矢板列検出状況	図版-26	III区出土遺物-4
b	四つ又鍬出土状況		

I. はじめに

1. 調査に至る経過

昭和58年度より実施されてきた県営ほ場整備事業一貫地区の面工事は平成3年度までに完了し、平成3年度の早田地区に続き、石崎大字大坪地区にも貯水池の建設が始められた。元来、同地の埋蔵文化財確認調査は昭和63年度に県教委によって終了しており、遺構の所在が確認された事を受け、発掘調査の必要性は農林サイドへ提示されていた。しかしながら、平成3年度に予定地の変更がなされ、町教育委員会へ連絡後、変更地への試掘調査を実施、建設に際しての掘削面での遺構の存在は確認されず、立ち会い調査の必要性を提示するにとどまった。こうした中、平成4年度に入り、貯水池の建設が実施される運びとなつたが、工事着工後の平成4年9月の立ち会い調査時点で、昭和62年当初の建設地に変更がなされており、土器の散布が認められた。この結果、至急試掘調査を実施、遺構が確認された事を受けて、県農林事務所、町農政課、教育委員会との協議を持つに至った。この時点までには、計画予定地の変更がなされていた事を町教育委員会に通達されてなく、農林サイド、教育委員会サイドとの行き違いがあり、当初からの協議、連絡不足の感は歪めない。結果的には平成4年10月より緊急の本調査に入る運びとなつたものの、かなりの遺構が破壊されており、教育、農林双方の落ち度と今後の協議のあり方について考えなおさなければならない事を実感させられた。

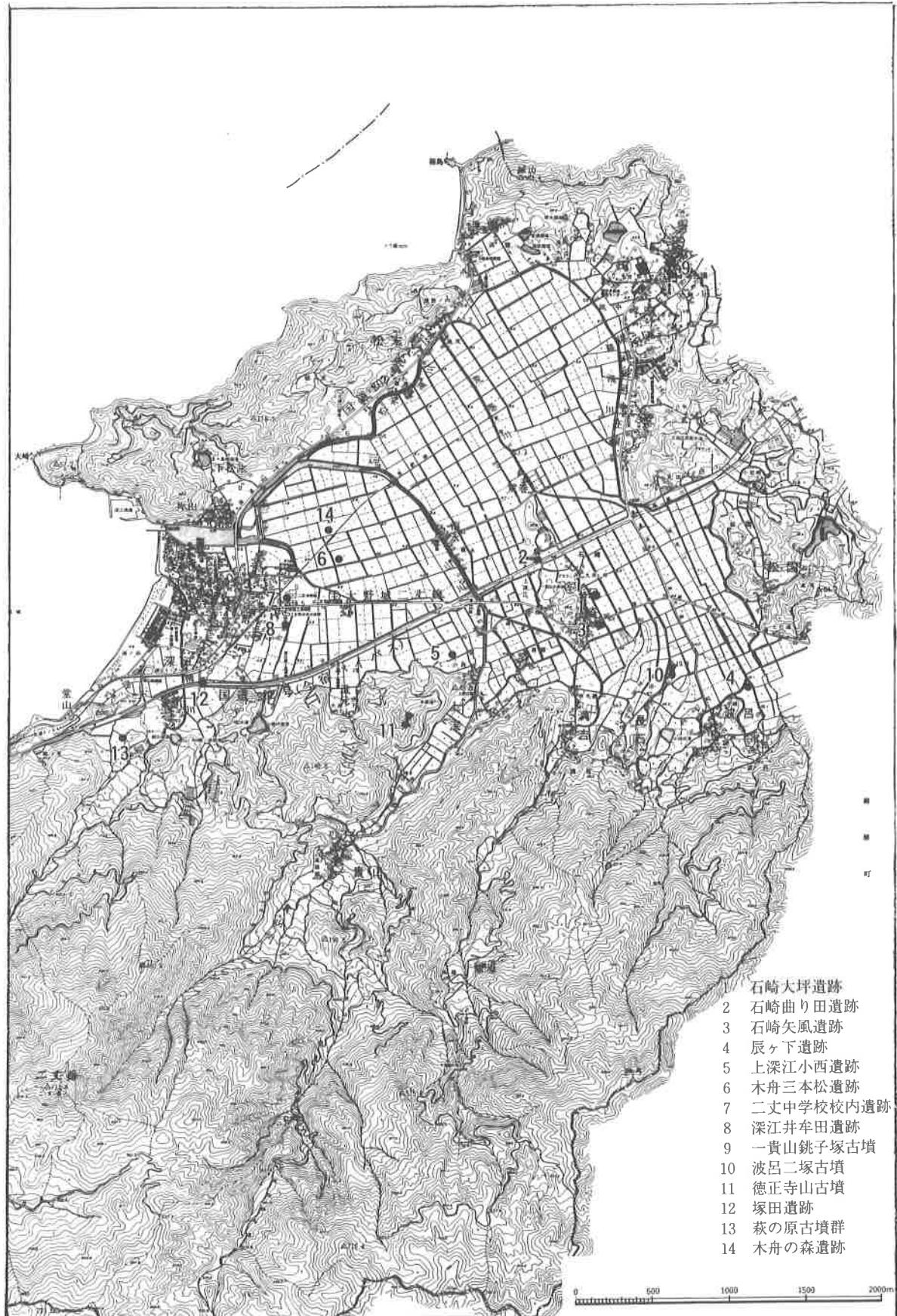
2. 調査組織

発掘調査ならびに報告書作成に従事した組織の構成は以下に記すとおりである。

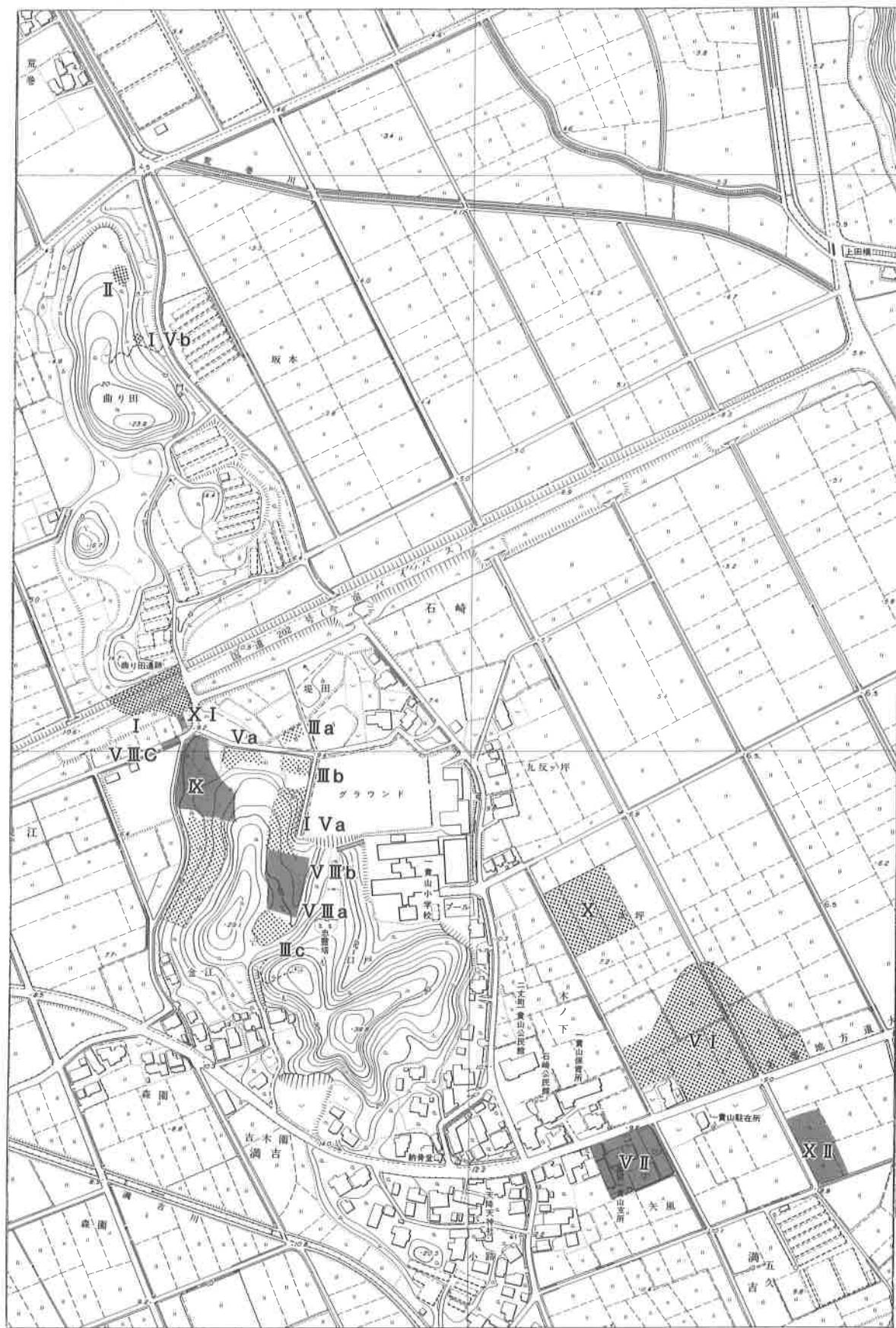
調査主体	二丈町教育委員会	
総 括	教 育 長	吉村 昌幸
	教 育 課 課 長	庄島 正
庶 務	教育課課長補佐	宮崎 昌之 (平成6年12月まで)
	同	清水 泰次 (平成7年1月より)
	社会教育係係長	瀬戸 利三
調 査	教 育 課 主 事	古川 秀幸 (調査担当)

調査指導 福岡県教育庁福岡県教育委員会 橋口 達也
福岡県教育庁 福岡教育事務所 中間 研志

調査・整理作業 田中栄一・田中和子・田中ミヨコ・田中靖子・古川智恵子・内田マツヨ・内田美智子・内田京子・松村マサ子・波多江光子・原口志津子・須古井節子・木下文子・古藤紀子



第1図 遺跡位置図



第2図 石崎地区遺跡群遺跡分布図 (S=1/5,000)

II. 位置と環境

石崎地区遺跡群は、脊振山系より派生する独立低丘陵（石崎丘陵）周辺に立地し、これまでに弥生早期の集落跡（曲り田遺跡）、支石墓を含む前期の甕棺墓群（大坪遺跡Ⅰ、矢風遺跡Ⅰ）等が調査されており、稻作開始の遺構が広がる事が確認されている。状況的には福岡市板付遺跡周辺にも共通し、水田遺構とその範囲の確認が急がれていた。今回の調査において、板付Ⅰ式期の水田、中期中頃の水路と丘陵東側に水田が広がる事が確認された意義は大きく、古代の地形等が把握されつつある。

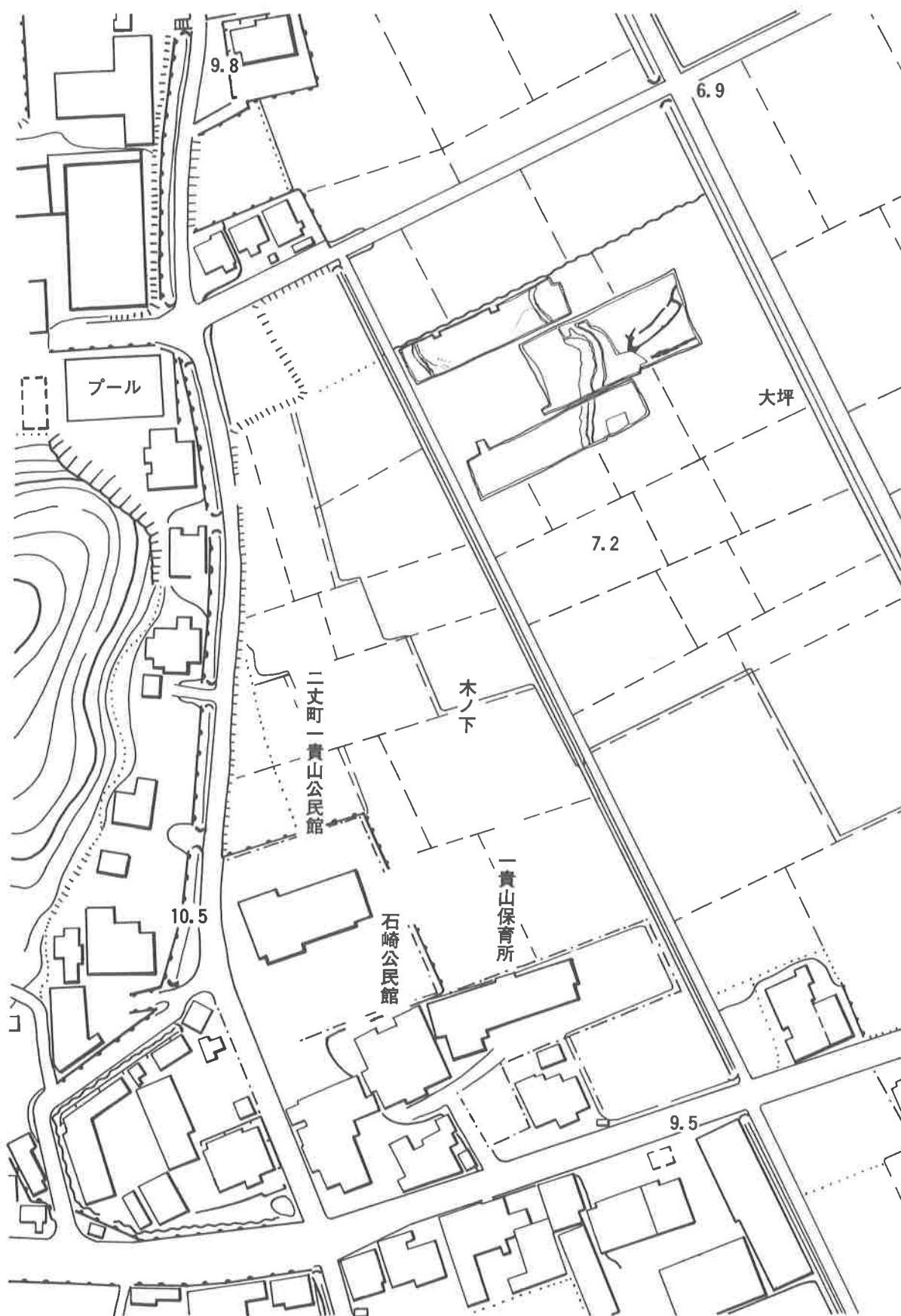
我が国への稻作の伝来は、板付、菜畑等でも確認されているとおり、後背湿地を呈したの地形が利用され、木製農工具、石庖丁等の磨製石器と共に水路には堰を備えたほぼ完成された形の水田技術が入ってきている。稻作自体のスムーズな受容、急激な広がりはこうした要因があったためであろう。

稻作受容後の社会状況は、弥生中期のクニグニの成立まで、小平野、河川単位で形成された集団を中心で、そのらの存在は、集団によっては青銅器を保有しないものもあるが、今のところ、甕棺や木棺等の集団墓の検出、それらの中より出土する青銅器の量でしか、確認されない状況にある。

板付遺跡周辺では、まとまった数の青銅器を保有した集団は確認されていないが、板付田端遺跡で細形銅剣の出土例がある。逆に言えば、吉武高木遺跡等での多くの青銅器を保有した集団が成立了背景には、近隣にいち早く稻作を受容できる条件を備えた場所があったと言え、他地域でも同様の事が想定できる。次ぎに糸島地域についてその類例を考えてみたいが、『伊都国』の中心たる三雲遺跡周辺では、前期末前後の段階での青銅器の出土は報告されてない。しかし、井原遺跡群の赤崎地区で細形銅剣が1例発見されており、この時期は、三雲地区よりやや南側に中心があった可能性もある。二丈町においても状況が似ており、佐賀県に近い西古川遺跡での1例しか発見されていない。近隣で稻作受容適地を見てみると、平成3年度に調査された竹戸 東縄手遺跡で、板付Ⅱ式段階のV字溝が調査され、それ以前となると縄文晩期の広田遺跡がある。広田については、稻作の開始期の遺構が確認されていないものの、報告者の小池氏によると打製石斧等の土耕具に農耕受容の可能性も考えられるとの見解である。広田遺跡については、地形的にも後背湿地であり、可能性はあると言えよう。次ぎに石崎地区遺跡群であるが、石崎丘陵周辺での青銅器の出土例は現在までのところ、確認されておらず、故原田大六氏が調査した石崎 小路遺跡の中期の甕棺に管玉120個（現在、東京国立博物館所蔵）が出土したもののみに権力の特出がみられる。しかしながら、同地域での中期の遺構、甕棺の出土は非常に少なく、小路遺跡周辺（丘陵南西側）に首長墓クラスの甕棺や遺構が広がる可能性もあると言え、今後の調査に期待したい。



第3図 調査指導風景

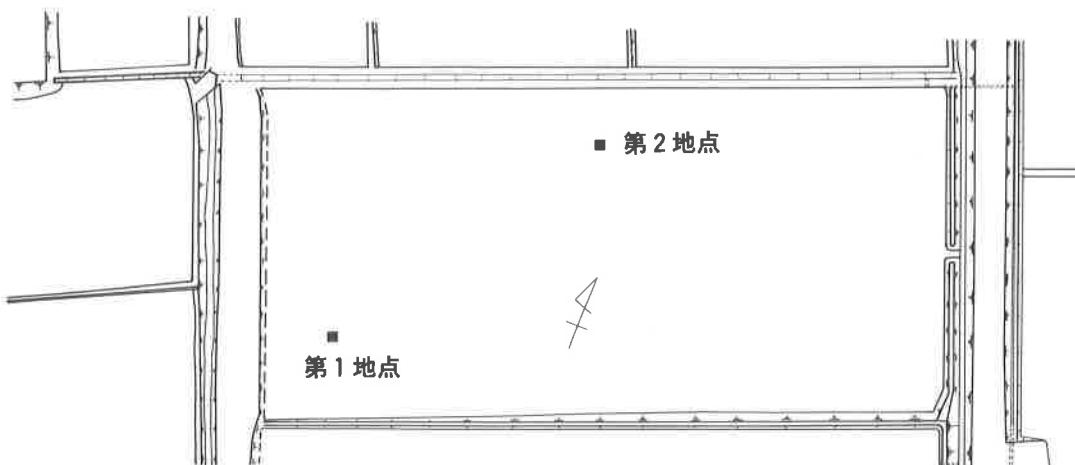


第4図 周辺地形図 (S=1/1,500)

2. 地形と地質

稻作開始期の遺跡が点在する石崎地区遺跡群は脊振山系より派生し南北にのびる独立低丘陵（石崎丘陵）とその周辺部に広がる。今回の調査地点である大坪地区は、低丘陵の東側縁で谷を隔てた台地上にあたる。この台地も脊振山系より北へ広がる沖積地で、過去に行われた耕地整備のためか、現況とはかなり違う地形を呈していたと考えられた。

大坪遺跡内の地質は、風化花崗岩（マサ土）を基盤層として、その上に長石、満吉地区方向からのものとみられる洪積層、沖積層が厚く覆っている。このため、縄文～弥生、古墳時代の遺構面が時間的に検出できると期待できた。今回の調査を含めて、丘陵東側は大坪遺跡Ⅰ、矢風遺跡と調査されてきたが、ほぼ同様な状況を呈している事が確認されており、表土（耕作土）以下すぐに包含層（黒色砂質シルト）が現れ、次に弥生前期を中心とした遺構面（青灰色砂質シルト）が広く続いている。土質調査によると表土以下、基本的には黒灰～青灰色の砂質シルトが1.5m～2.7mの厚さで堆積し、暗灰色砂が1.7m～2.7m、褐灰色礫混じり砂が1.7m～2.3mと厚く、基盤層の風化花崗岩となっている。また、風化花崗岩の深さが第1地点が他より1m深い事などからも丘陵との境に谷が入っている事が考えられる。同様に石崎丘陵周辺にはいくつかの小さい谷が入っている事が近年の調査で明らかになっており、稻作受容には最適地であったと言えよう。



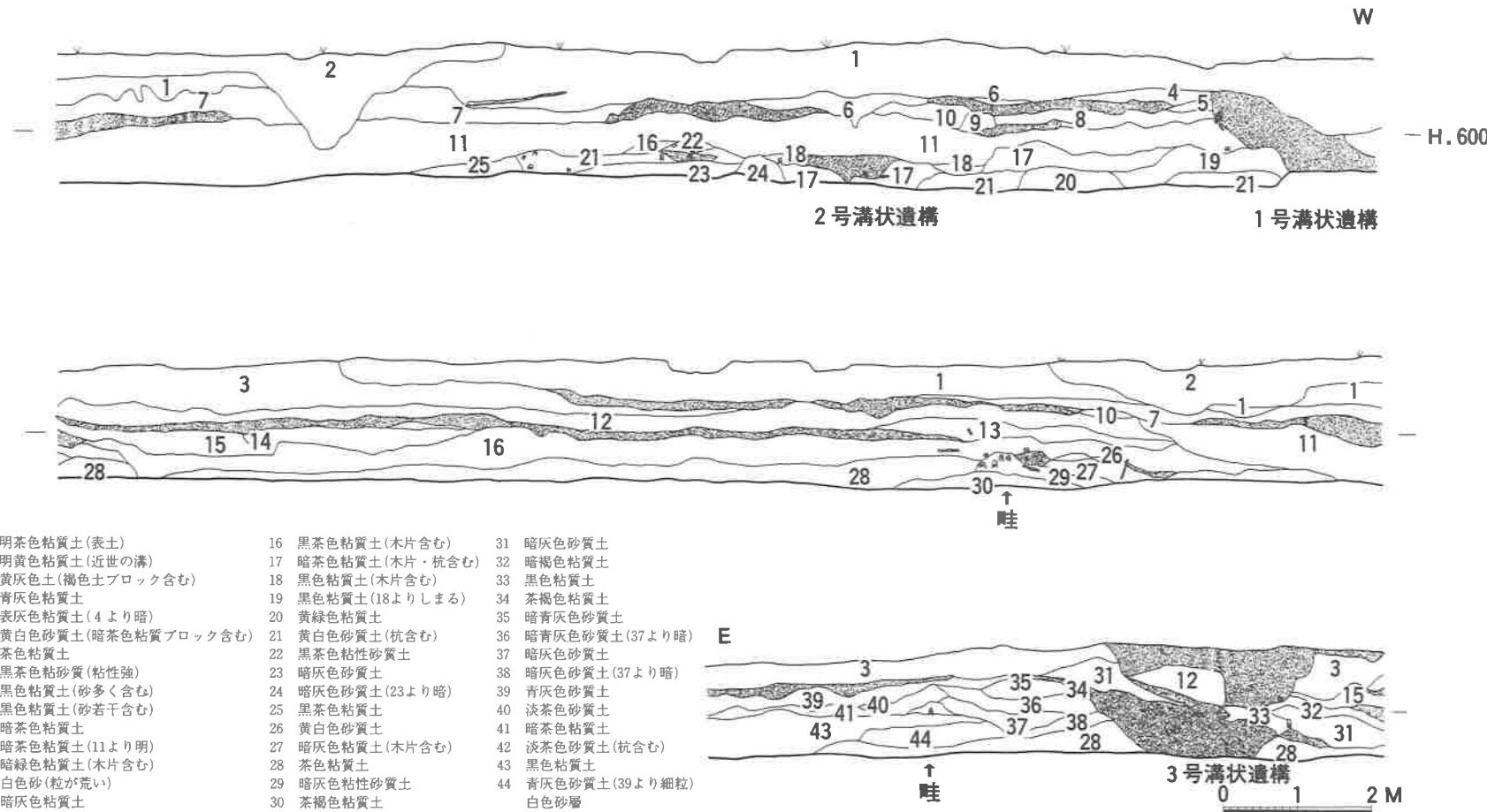
標 尺 m	標 高 m	深 さ m	層 厚 m	現場観察記録			
				土質 名	土 質 分 類	色	記 事
	6.60	0.40	0.40	表 土	粘性土	青水灰。	木根混入。
1							
2							
3	4.10	2.00	2.50	砂質シルト	黑 灰		砂は細粒。シルト は含水大で粘性大 粒径不均一。礫積 物混入。
4	2.40	4.60	1.70	砂	暗 灰		中一粗粒砂で非常 にゆるい。粒径不 均一。
5	1.80	5.20	0.60	礫交り砂	青 灰		中一粗粒砂でゆる い。所々30%程 度の片岩礫混入。
6	1.50	5.50	0.30	砂質シルト	青 灰		
7	1.10	5.60	0.40	礫交り砂	青 灰		
8							
9							
10	-3.00	10.00	4.10	マサ土 (風化花崗岩)	褐 灰		全体に砂質土状を 呈する。G L - 9.00m - G L - 9.00mまで粒径 均一で中一粗粒砂。 G L - 9.00m ~ G L - 10.00m間 所々20~30%の 未風化花崗岩礫混 入。緑まりはゆる い。
11							
12							

第1地点

標 尺 m	標 高 m	深 さ m	層 厚 m	現場観察記録			
				土質 名	土 質 分 類	色	記 事
	6.60	0.40	0.40	表 土	粘性土	青水灰。	木根混入。
1							
2							
3	5.43	1.90	1.50	砂質シルト	黑 灰		砂は細粒。シルト は含水大。粘性大 粒径不均一。礫積 物多く含む。
4	2.73	4.60	2.70	砂	暗 灰		全体に中一細粒砂 粒径不均一で細ま りはゆるい。所々 粗粒砂になる。粘 性土含む。含水大。
5							
6							
7	0.43	6.90	2.30	礫交り砂	褐 灰		中一粗粒砂。粒径 不均一。礫まりは ゆるい。礫は約30 ~60%の花崗岩礫。 角礫で僅い。
8							
9							
10	-2.00	10.00	3.10	マサ土 (風化花崗岩)	褐 灰		全体に砂質土状を 呈する。粒径不均 一で中一細粒状。 緑まっている。
11							
12							

第2地点

第5図 土質柱状図



III. 調査の記録

1. 概要

I-1の調査に至る経過でも述べたとおり、立ち会い調査時点でかなりの遺構が削平されていた。この部分は貯水池の北側外壁部分に当たり、土壤改良工事の最中であったが、杭列や溝状遺構が確認された。この既に掘削された部分を先行して調査に入ったため、同地区をI区と呼称し、引き続き、土壤改良工事の必要な南側外壁部分をII区、中央、貯水槽をIII区として三分割した格好で調査を実施している。

遺構は、表土以下、床土、包含層を挟んだ下の暗青灰色シルト層に広がり、この層自体で、低い台地を形成している。また、昭和63年度調査地区（大坪遺跡I）の河川、甕棺墓群、住居跡等もこの層の上に乗っており、弥生時代前期前半から古墳時代初頭にかけてはの遺構面と考えられる。また。この暗青灰色シルト層は、地山ではなく堆積土であるため、なお、古い時期の遺構が下層に広がる事は確実であろう。以下、遺構、遺物の順に説明を加えたい。

2. I区の調査

遺構

北側外壁部分で、既にかなりの削平を受け、現状で確認できたのは、溝状遺構3、杭列A～Hの8列のみである。順次説明を加える。

1号溝状遺構（第7図）

調査区西側で検出し、南から北へと流れる。現状で幅40～55cm、深さ10cmを測り、底の部分しか残っていないが、土層観察によると元来は、幅230cm、深さ110cm程であったと言える。時期については、出土土器より弥生中期初頭が初現である。

2号溝状遺構（第7図）

1号溝状遺構に平行して南北に走る。現状で幅40～130cm、深さ36cmを測るが、土層観察によると幅135cm、深さ40cm程に復元できる。やや西側へ湾曲し、1号溝状遺構より広い。出土遺物は縄文晩期の鉢形土器底部が1点出土しているものの中期初頭の土器が大半を占め、1号溝状遺構と同時期と考えられる。

3号溝状遺構（第8図）

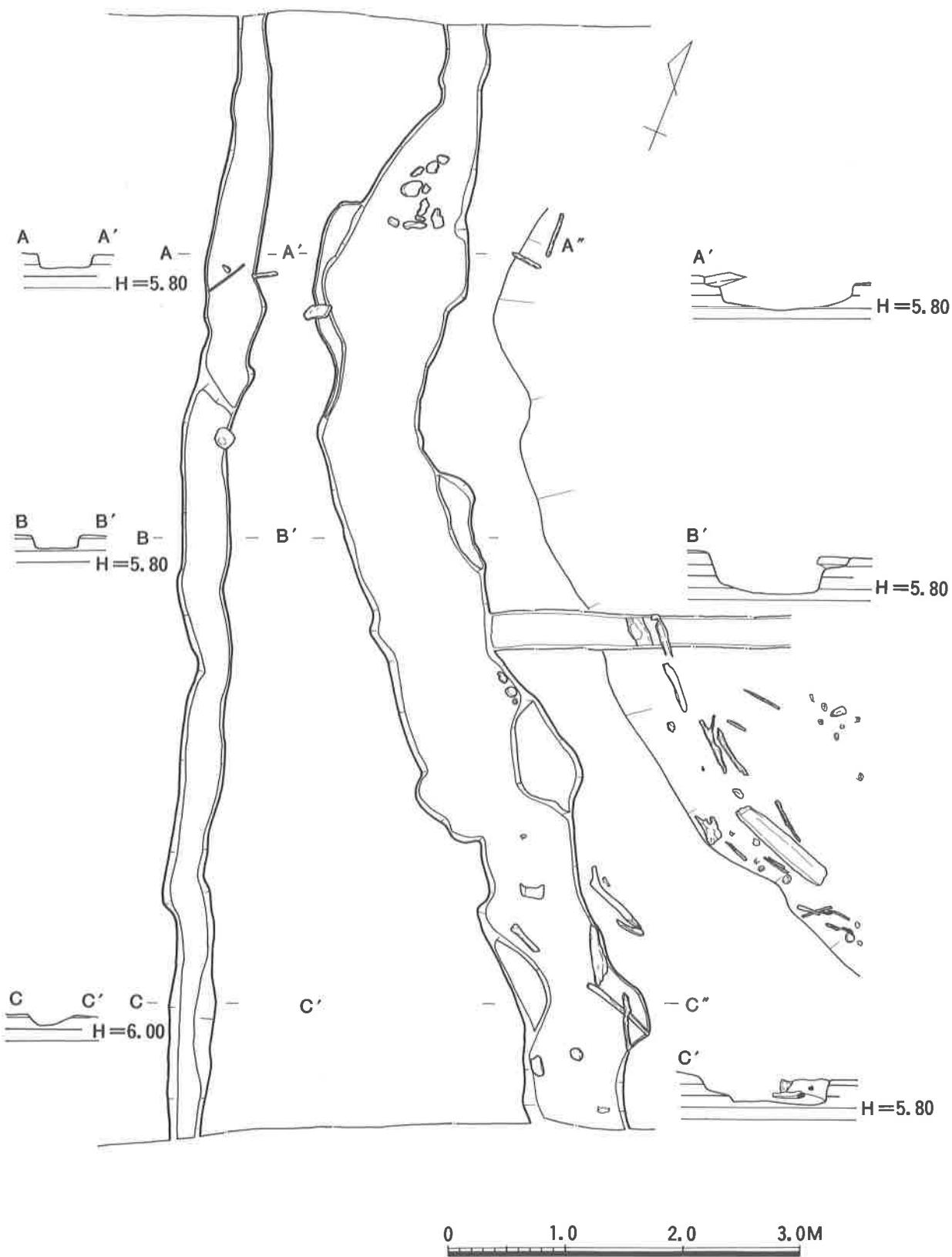
調査区東側で検出し、南北に走る。現状で幅310cm、深さ110cmを測るが、土層観察によると幅m、深さm程に復元でき、かなり幅を持つ溝と言える。II区、III区の調査において、木器の出土や井堰が検出されてたため、その性格は水田に伴う水路であると考えられる。

杭列A・B・C・D・E（第9図）

2号溝状遺構の東側で検出した杭列群である。2号溝状遺構東側で検出した段落ち自体は、明確なものではなく、これに沿って南北に伸びる。杭列の性格については、谷部で検出した東西へ伸び

1号溝状遺構

2号溝状遺構



第7図 I区 1号・2号溝状遺構実測図 (S=1/50)

る杭列群とは時期、性格とも違い、単に谷への落ちを補強したものか、畦を補強したものか判断はしにくい。時期については西側の溝状遺構の時期と同じと考えられる。

杭列 F (第10図)

谷部で検出した南東から北西に伸びる杭列群である。約30mの谷部のほぼ全域を横断する形で続いている、ほぼ2列から成る。周辺より弥生中期、前期の土器片、大型蛤歯石斧等が出土した。西側の杭列群と方向が違い、検出面も低いため、前期に逆上る可能性がある。杭列の性格については、断言できないものの、Ⅲ区の下層で検出した畦を補強していた杭列群に出土状況が類似している点や部分的に2列となっている事を考えると畦を補強していたものと考えたほうが妥当であろう。

杭列 G・H

3号溝状遺構の東側肩で検出した杭列Gは溝の中央より始まり、北側の調査区外へと延びる。下層の遺構のものか、3号溝状遺構に伴うものは判断できなかった。杭列Hは溝状遺構の西側で検出し、南北へと延びる。時期、性格については判断しにくい。

遺物

1号溝状遺構出土土器 (第11図)

001は甕形土器口縁部片で、口縁部下に三角突帯を貼付する。突帯以下が直線的であり、中期でも初頭に近い時期と言える。外面ハケ、内面ナデ調整を施す。002は断面L字を呈す中型の甕で、口縁下に三角凸帯を付す。口縁端、上面は丹塗りである。時期は中期後半。003は頸部より直線的に立ち上がる壺、004は口縁くの字を呈す甕で、端部を丸くおさめる。共に後期後半代の時期である。005～007は甕の底部であり、005は上げ底を呈す亀の甲タイプ。006、007は平底を呈し、006は外面ハケ調整、007はナデ仕上げである。008は高壺の脚部で短脚である。上位に若干のハケ調整が認められるが、ナデ仕上げと言える。007、008は、中期中頃。006は中期後半、005は中期初頭であろう。

2号溝状遺構出土土器 (第11図)

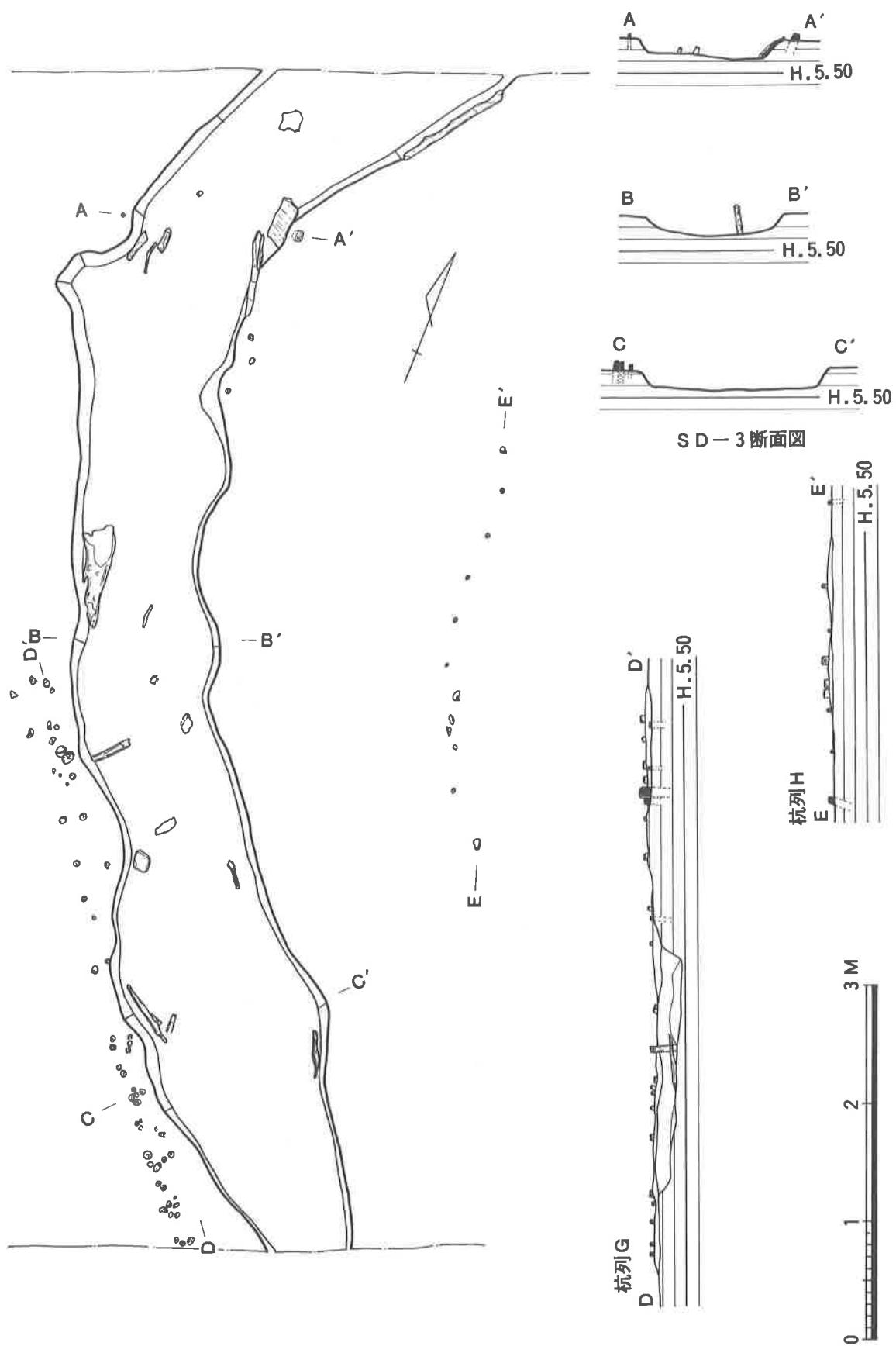
009、010は口縁L字を呈す中型の甕で、009は外面ハケ調整、010はナデ調整である。共に中期中頃。011は縄文晩期の浅鉢底部片で、器壁は10mmと厚く、底部外側は強いナデ、胴部外面に板ナデを施す。012～015は甕の底部である。全て上げ底であるが、012は上げ底が高く、胴部との境が強くしまる「亀の甲」タイプ、013上げ底が低い「城の越」タイプである。012は中期初頭、他は中期前半である。

谷部包含層出土土器 (第11図)

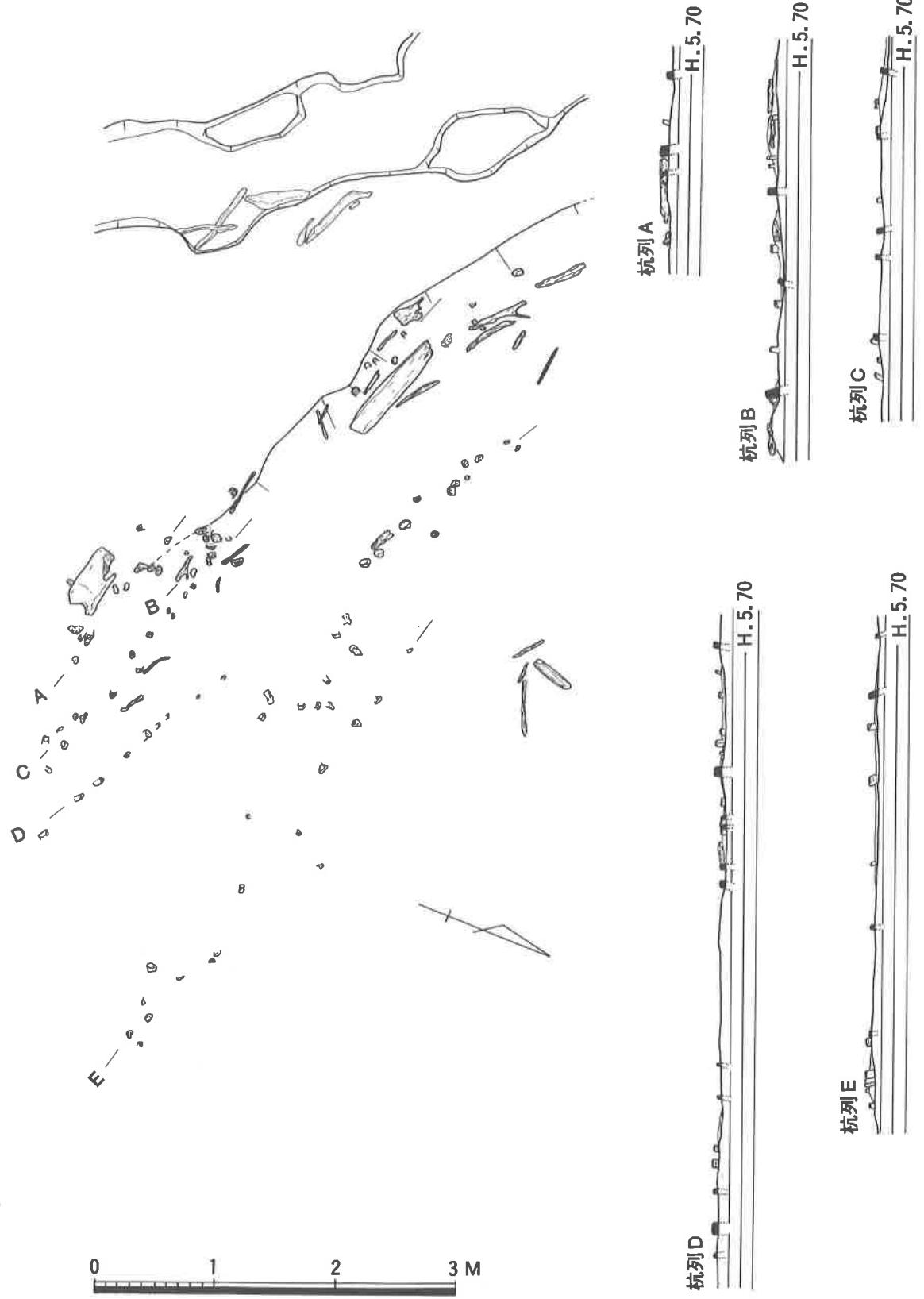
I区中央の杭列検出面出土の土器で、碎片が多く、2点だけ図化した。016は平底の甕底部で外面タテハケ、内面ナデ調整を施す。中期中頃。017は広口壺底部片で、外面板ナデを施し、黒色顔料を塗る。中期後半であろう。

3号溝状遺構出土土器 (第12～15図)

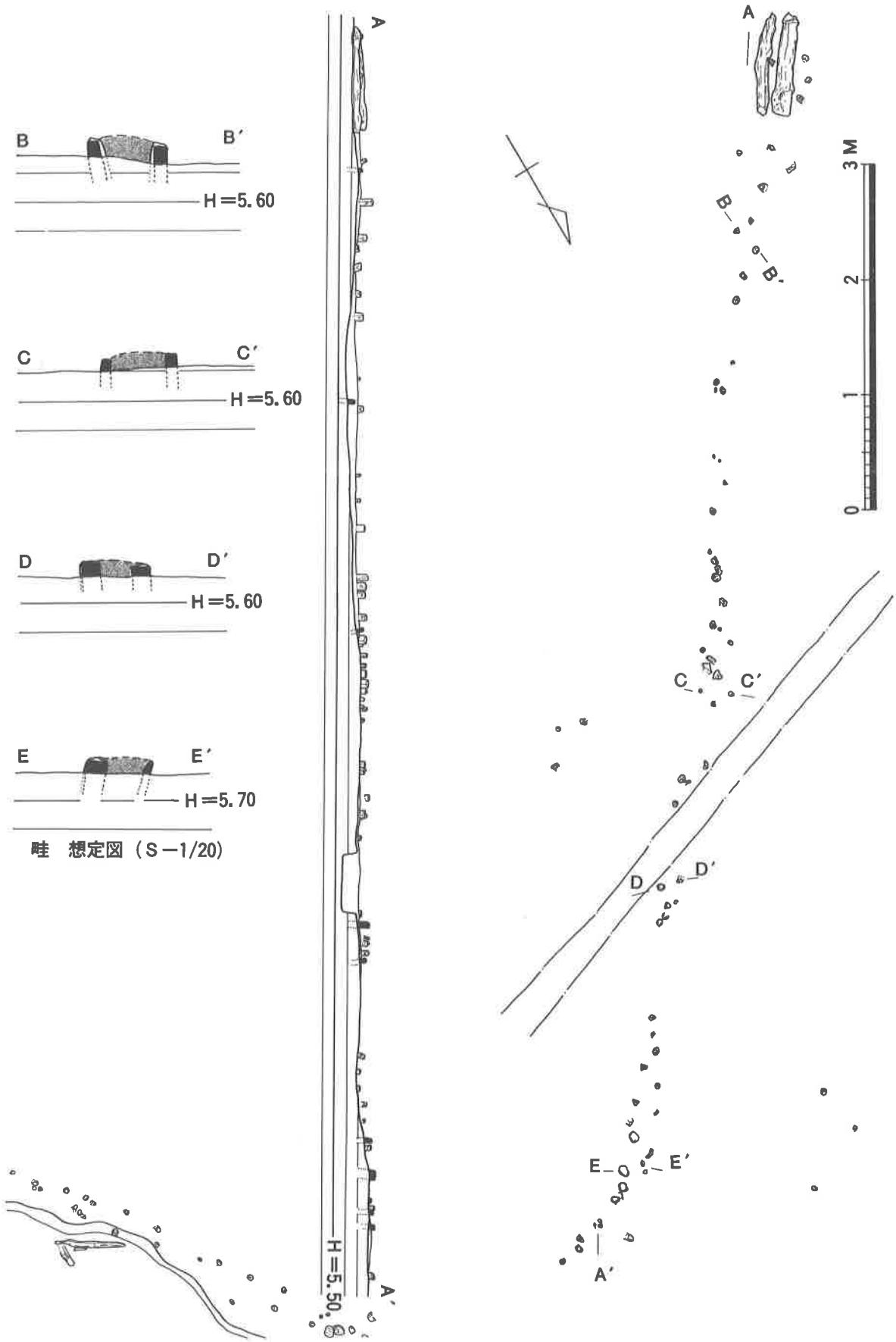
018、019は口縁波状を呈す阿高系の土器で、胎土に金雲母片を多く含む。018は口縁端部に凹点



第8図 I区 3号溝状遺構実測図 (S=1/50)

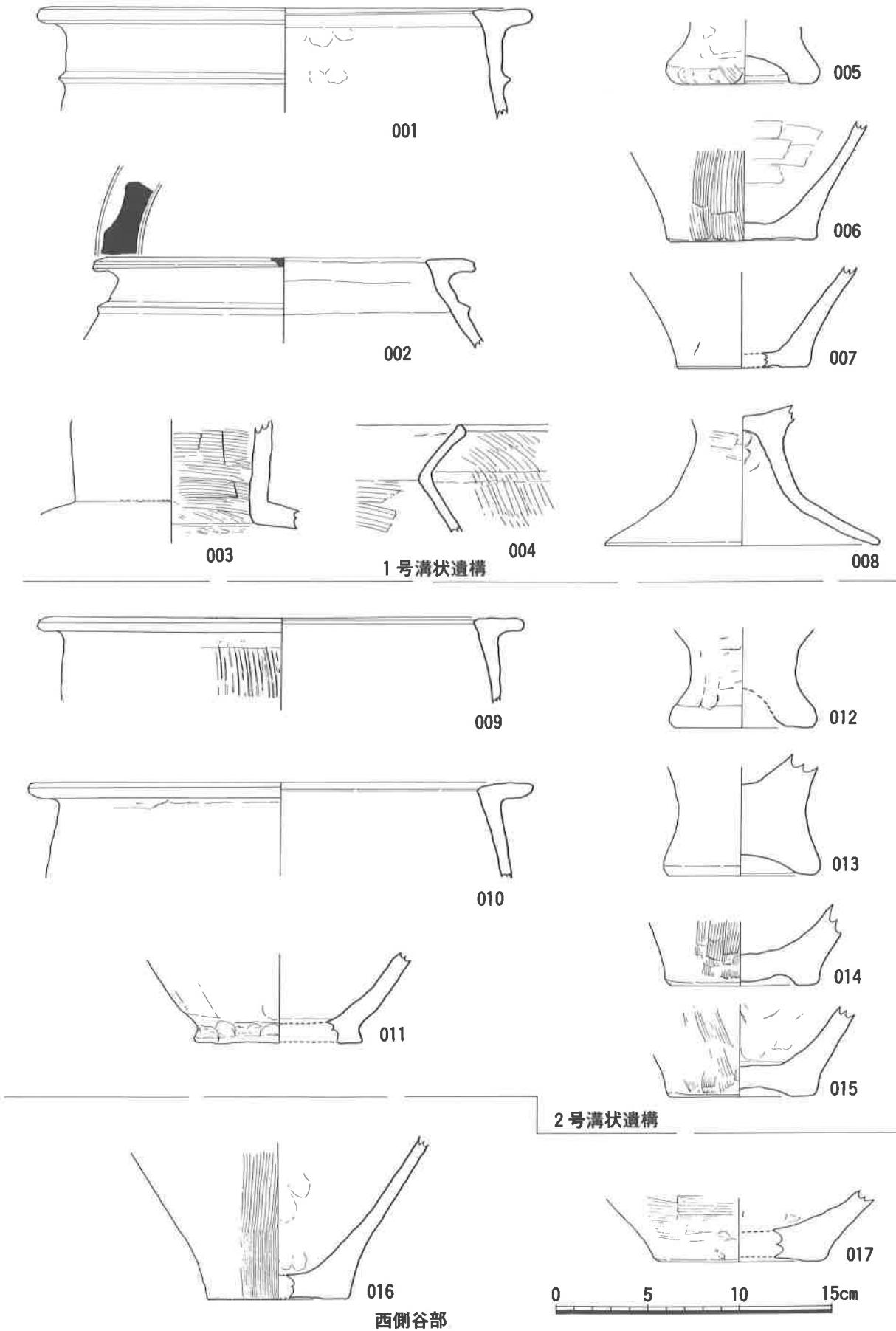


第9図 I区 杭列A～E実測図 (S=1/50)

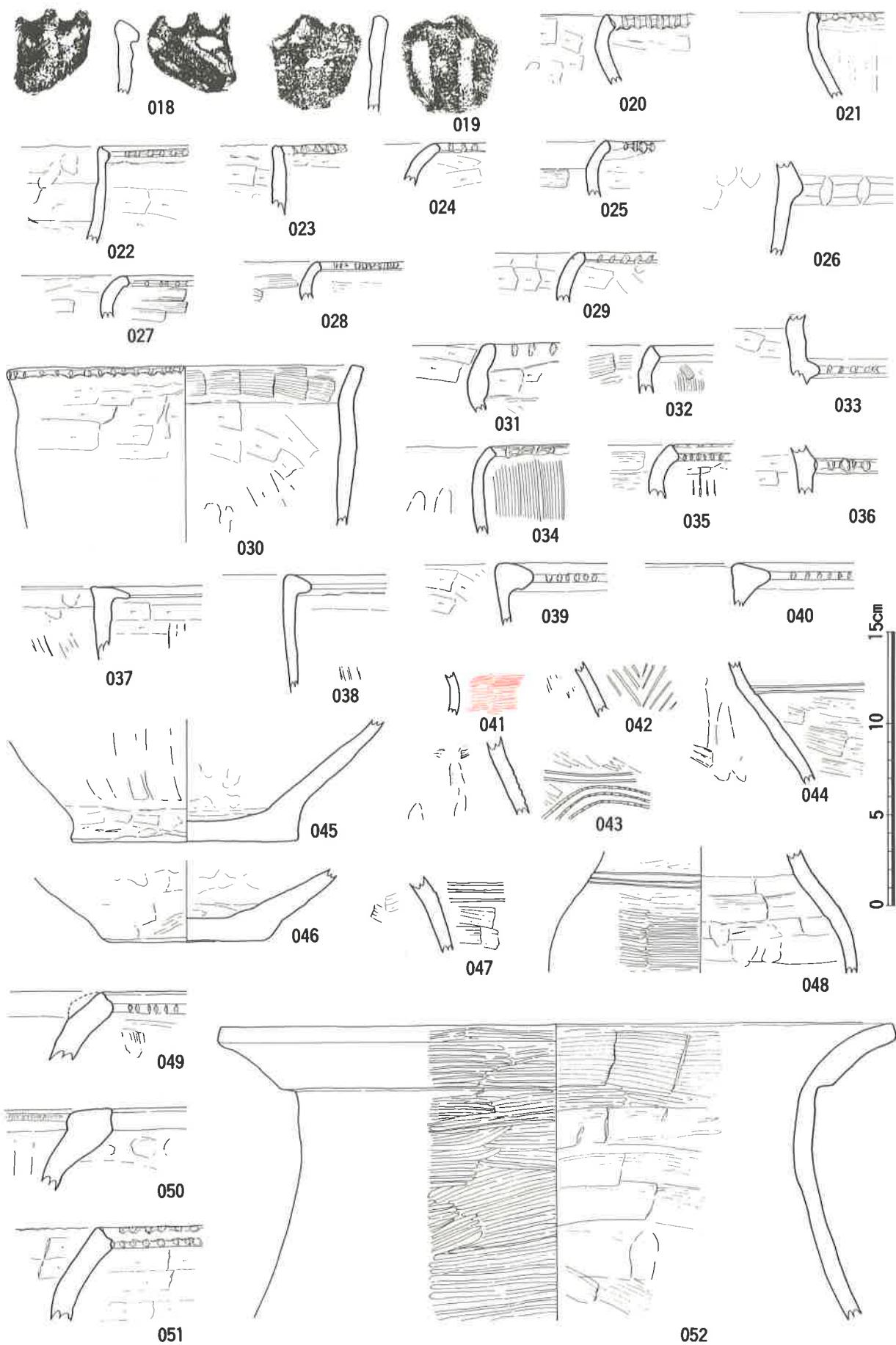


第10図 I区 杭列F 実測図 (S=1/50)

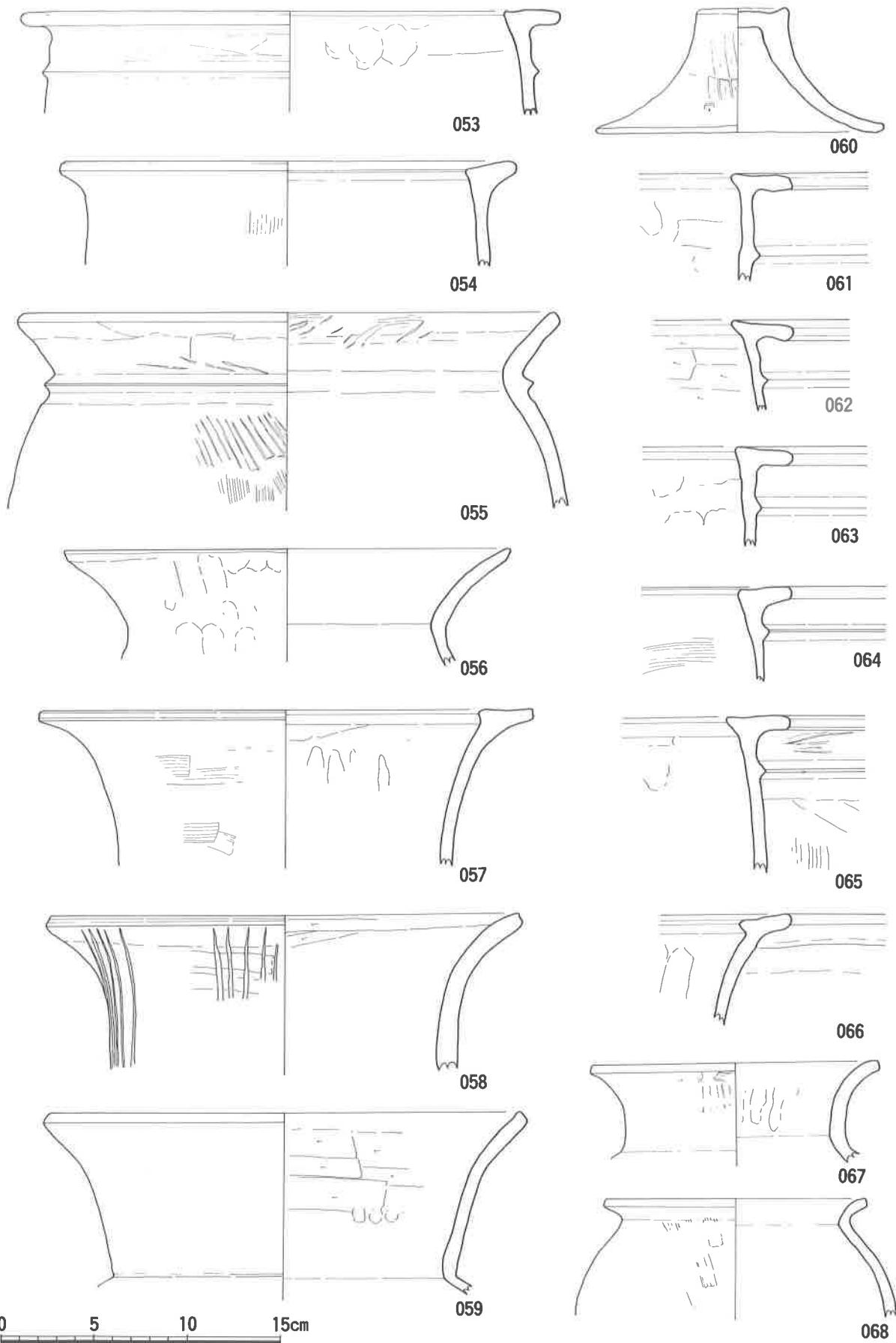
を配し、019は外面に縦方向の凹線を施す。共に縄文後期初頭であろう。020～034、036は刻み目凸帯文及び口唇部に刻み目を施す土器である。020、021は肩部より内側に屈曲する深鉢で内外面板ナデを施す。022、023は内湾しながら立ち上がる深鉢で022は口縁部に刻み目凸帯を付し、023は口唇部に刻み目を施す。すべて夜臼期のものであろう。024以下は口唇部に刻み目を施す甕で基本的に内外面板ナデ若しくはハケ調整である。030は口縁部径19.6cmに復元できる。030、034は弥生時代前期初頭(板付I式期)、他は弥生時代前期中頃～後半(板付II式期)に比定できる。026、033、036は肩部で屈曲し、立ち上がる甕で、026は大型となり、接合痕内側を強いナデを施す。026は前期中頃～後半、033は中期初頭であろう。036は深鉢の可能性もあり、刻み目の感じより前期初頭と考えられる。037～040は口縁断面三角形を呈する亀の甲タイプの甕で、039、040は口唇部に刻み目を施す。時期は中期初頭であろう。041～044、047、048は壺の胴部片で、041は外面ミガキを施し、夜臼期に上がる可能性がある。他は肩部に2ないし3本の沈線をもつもので、調整はミガキ、板ナデである。042には連続山形文が、043には貝殻重弧文が施入される。何れも前期中頃から末の時期と言える。045、046は大型の壺底部片で045は板付I式の円盤貼付底である。049、050は口縁内側に粘土帯をもつもの金海式の壺であり、051は粘土帯を持たない。051が若干、古手であろう。052は口縁径36.6cmを測る板付I式の大型壺である。外面調整は丁寧なミガキを施し、内面は板ナデである。053、054、061～065は中期中頃～後半の甕口縁部片で、054以外は口縁部下に三角突帯を持つ。調整は基本的にナデ調整である。053は口縁径28.8cmに、054は24.4cmに復元できる。055は口縁径28.4cmに復元できる後期後半の甕で、くの字口縁を呈す。外面粗いハケ調整、内面ナデ調整である。060は中期の小型甕蓋で、口縁径15.4cm、器高6.8cmを測る。外面調整は板ナデである。に040～059、066は広口壺片で、057、066は勧先状の口縁をもち、中期中頃に比定できる。058は中期後半のもので、外面に5本単位のミガキの暗文が入る。067は小型の壺で、外面ハケ調整、内面ナデを施す。中期初頭であろう。068は短頸壺で、外面細かいハケ調整の後、ナデを施す。時期は後期後半である。069～084は中期中頃～後半代の甕口縁片で、断面「T字」、「L字」を呈し、口縁下に突帯を持たないものである。調整は基本的にハケ、若しくはナデ調整である。086は「T字」口縁上部が窪み、端部に刻みを施入するものである。時期は中期初頭であろうか。087～092、095～097は上げ底を呈する甕底部である。087～090は中期初頭のもので、調整は基本的に板ナデ若しくはナデである。089は所謂「亀の甲」タイプのものであろう。それ以外は中期前半以降のものと言え、調整は基本的にハケ、若しくはナデである。094、098、099、101は平底を呈し、外面ハケ調整、内面ナデ調整である。093も平底を呈するが、器壁が厚い。中期中頃の筒形状の鉢であろうか。102は平底から丸みをもって立ち上がる丹塗り磨研土器で、内面板ナデを施す。時期は中期後半であろう。100は甕蓋として復元したが、天中央部に円孔をもつ。時期は中期中頃であろうか。103～105は後期後半～終末期の口縁「くの字」を呈する甕である。内外面ハケ調整を施す。106は「くの字」口縁の端部を丸く收め、頸部に三角突帯を付す。共に板状工具による刻みを施入する。時期は終末期～古墳初頭であろう。107は頸部のしまりが強い甕で、内外面、ケズリを施す。時期は古墳前期である。108は後期前半代の袋状口縁壺で、内外面ハケ調整を施す。109～111は鉢で、109は口縁径23.8cmに復元できるもので、口縁「くの字」を呈す。110は端部を丸く收めるもので、外面ハケ調整、内面に板ナデを施す。共に後期前半代であろう。111は楕形に近いもので、平底を呈す。口縁径9.4cm、底部径5.0cm、器高7.4cmを測り、外面ハケ、内面板ナデを施す。時期は中期中頃であろう。112、113



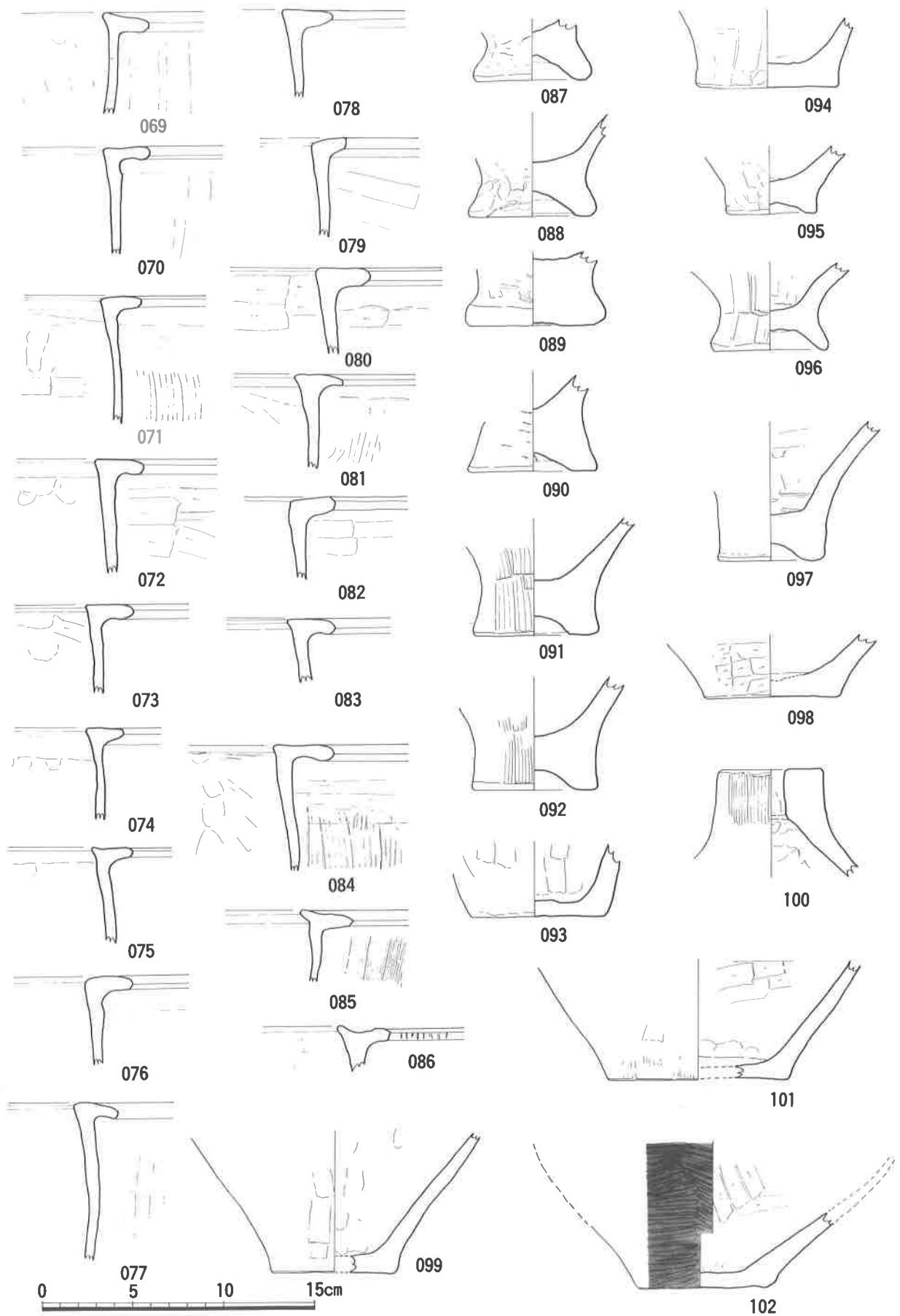
第11図 I区 1号・2号溝状遺構・西側谷部出土遺物実測図 (S=1/3)



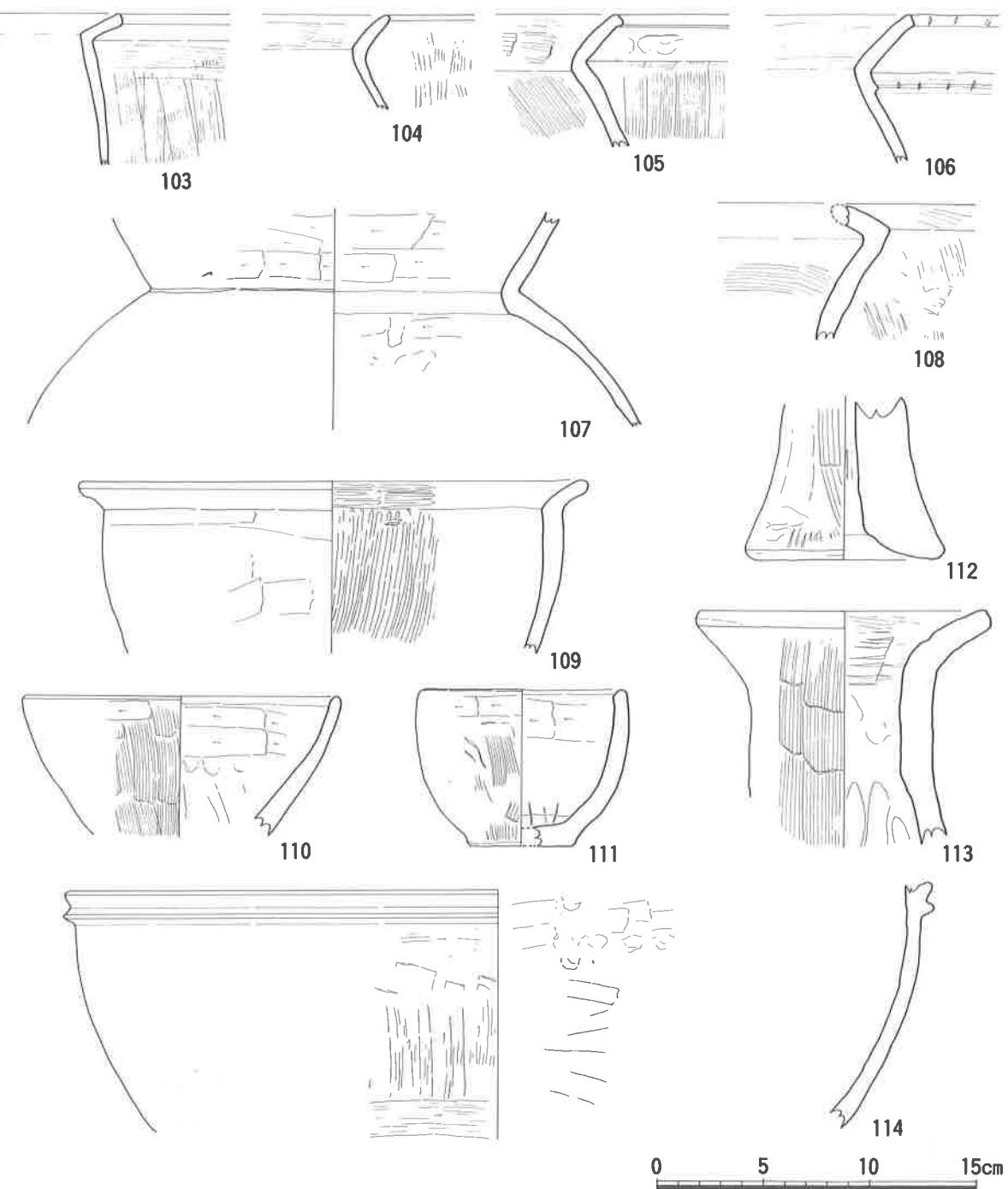
第12図 I区 3号溝状遺構出土遺物実測図-1 (S=1/3)



第13図 I区 3号溝状遺構出土遺物実測図-2 (S=1/3)



第14図 I区 3号溝状遺構出土遺物実測図-3 (S=1/3)

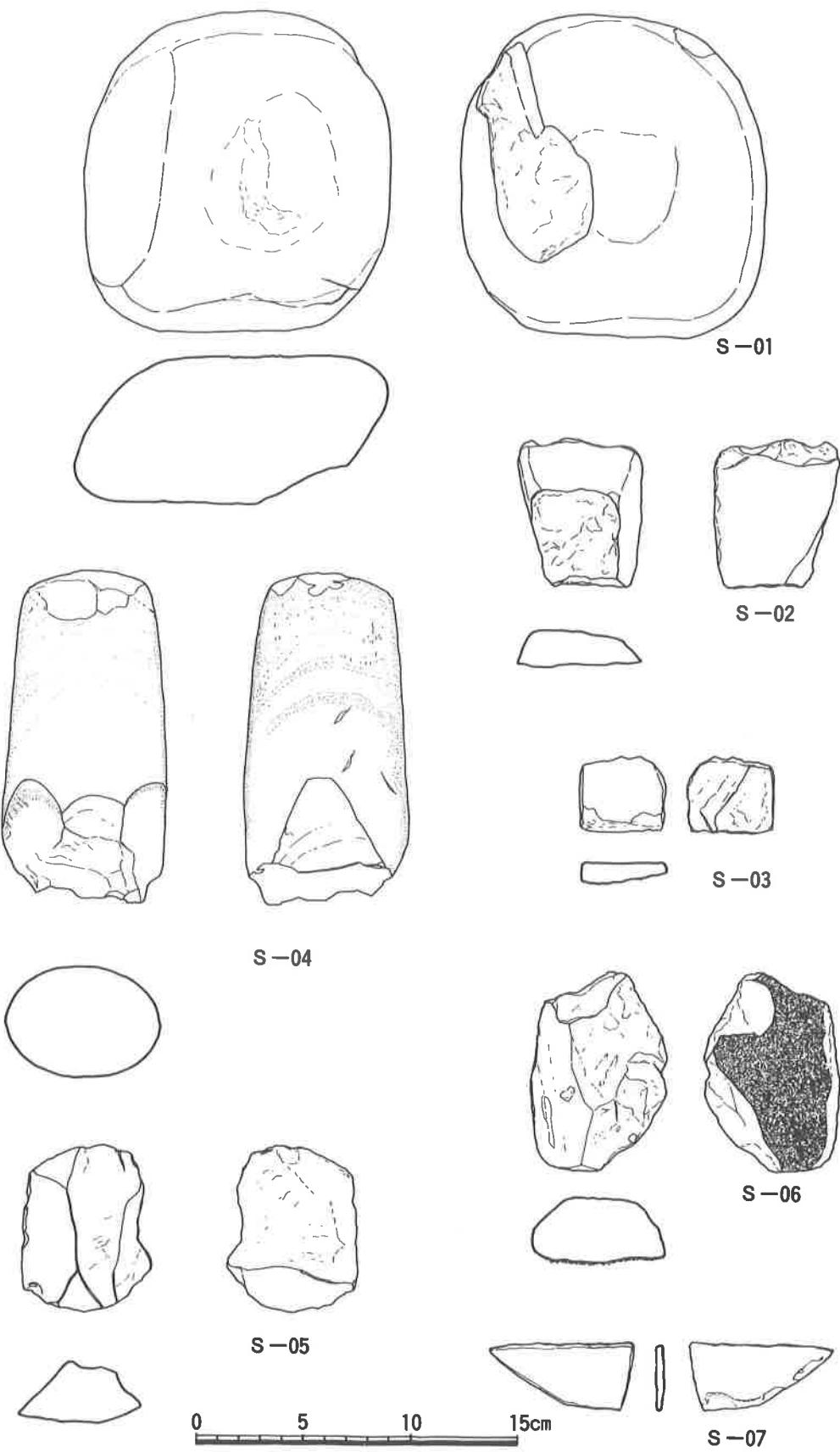


第15図 I区 3号溝状遺構出土遺物実測図-4 (S=1/3)

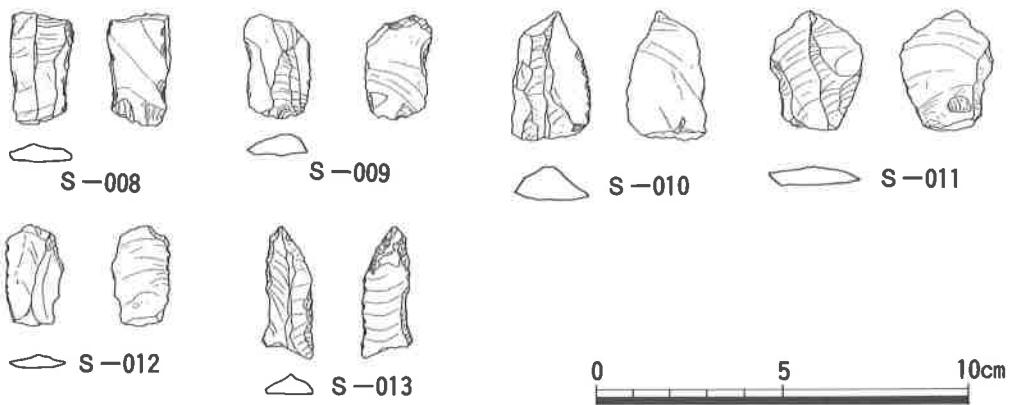
は器台で112は古相を呈す。113外面粗いハケ調整、内面ナデを施す。時期は後期後半であろう。
114は胴中央部2条の突帯をもつ甕で、外面ハケ、内面板ナデを施す。時期は中期中頃であろう。

I区の石器（第16・17図）

S-01は1号溝出土の楕円形を呈する叩き石で、中央がわずかに窪む。全面丁寧に磨き、一部、剥離面がある。直径14.2×14.8cm、厚さ6.8cmを測る。花崗岩製。S-02、03は2号溝出土の石斧片



第16図 I区 出土石器実測図 (S=1/3)



第17図 I区 出土石器実測図-2 (S=1/2)

である。S-02は小型品であり、刃部付近を丁寧に磨く。玄武岩製。現存長6.6mm、最大幅5.7mm、厚さ15mmを測る。S-03は粘板岩製で側面を磨く。現存長3.3cm、最大幅3.9cm、厚さ0.9cm、刃部は0.4cmを測る。偏平片歯石斧であろうか。S-04は谷部の中央部で2号溝に近い所で出土した大型の磨製石斧である。現在長15.2cm、幅7.4cm、厚さ5.1cmを測り、材質は玄武岩である。S-05は谷部中央で出土した玄武岩の石器で、側面を磨く。現存長7.5cm、最大幅5.3cm、厚さ2.3cmを測る。S-06、S-07は3号溝出土。S-06は砂岩製の砥石であり、裏面が加熱により黒変している。現存長9.0cm、最大幅6.0cmを測り、厚さ3.0cmを測る。鋳型の転用品として考えられる。S-07は穿孔はないが、石庖丁であろう。現存長6.6cm、最大幅3.0cmを測り、厚さは3mmと薄い。S-08～S-12は3号溝より出土した剝片の縁辺部に調整を加えた削器、搔器と呼ばれるものであり、すべて黒曜石製である。両方の縁辺部に調整を加えたものと片側のみ加工したものがある。S-8は長さ3.0cm、最大幅1.65cm、厚さ5mm、S-9は長さ2.6cm、最大幅1.7cm、厚さ6mm、S-10は長さ3.3cm、最大幅2.05cm、厚さ9mm、S-11は長さ3.1cm、最大幅2.5cm、厚さ5mm、S-12は長さ2.7cm、最大幅1.45cm、厚さ3.5mmを測る。S-13は3号溝出土の石刃で、黒曜石製。長さ3.2cm、最大幅1.3cm、厚さ5mmを測る。

小 結

I区の調査は、立ち会い時点において、かなり遺構が削平され、現状での検出、精査のみの調査となつたが、検出された杭列群や出土土器、石器などから水田遺構の存在を伺える貴重な調査となつた。調査終了時点において、西側谷部ヘトレンチを設定、下層の状況を伺つたものの湧き水がひどく、途中断念した。しかしながら、東側3号溝周辺の遺構面の状況から、下層の存在は疑う余地はなかつた。この部分については、工事の関係上、トレンチを入れる事はできず、次ぎの調査区への課題として、下層の調査を断念したものの、この調査区を元にII区、III区の状況がかなり想定できた事は不幸中の幸いであった。

3. II区の調査

遺構

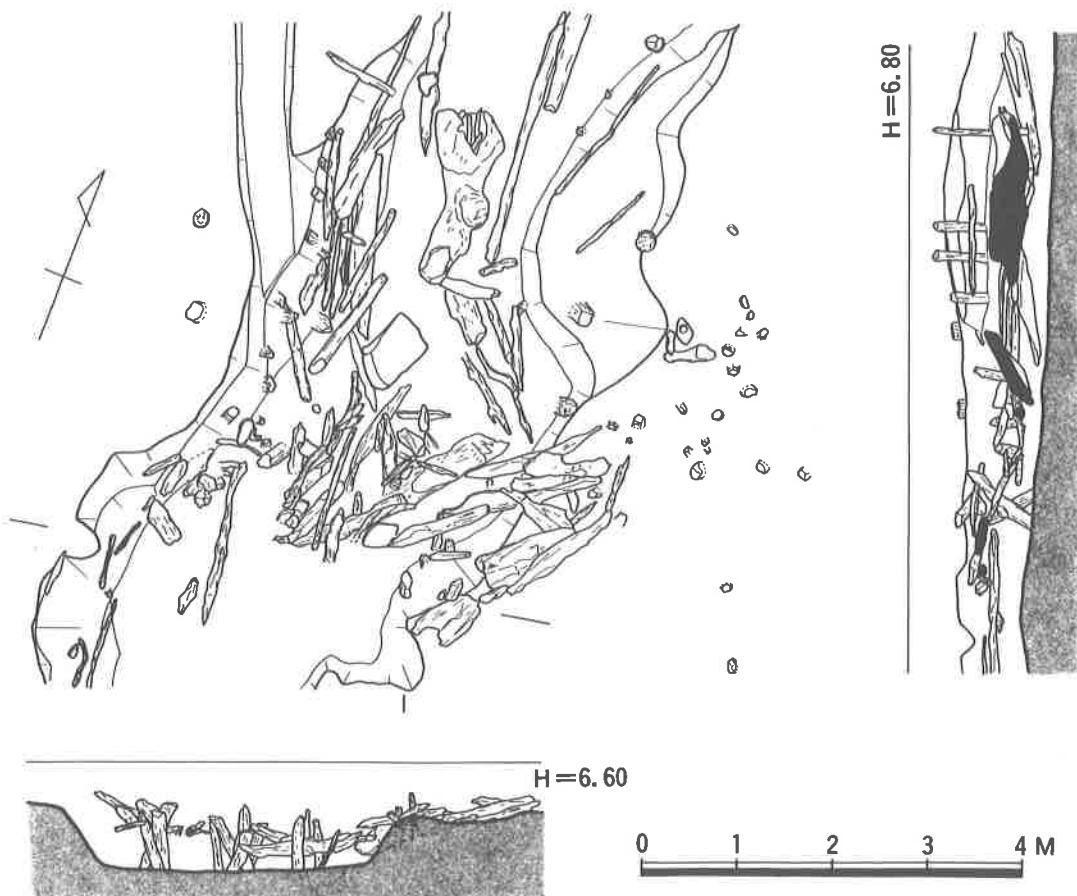
I区の調査を受け、その南側全域を調査対象としたいという意向で農林サイドと協議したもの、土壤改良工事の進捗状況上、部分的な調査を望む農林の意向に押し切られ、結局、南側隅の11m×50mの調査区となった。I区では遺構のほとんどが工事により削平されていたため、II区での検出状況、特に3号溝状遺構の広がりと水田の検出に期待が持てた。以下、順次説明を加える。

3号溝状遺構（第19図）

I区では弧を描く様に検出されたが、II区ではほぼ直線的に検出した。表土以下、遺構面の青灰色砂質土まで約50cmを測り、溝は土器を含む白色の粗い砂が明確に入っていた。幅190cm、深さ45cmを測り、下部で一部、二段となる。溝内側の両肩には杭、矢板を打ち込み、それぞれ横木、棒を止めており、しっかりと溝を護岸している。また中央南寄りでは柵状の井堰を備えており、この溝自体水田に伴う性格のものと判断できる。時期的には最下層の夜臼土器より縄文晩期に掘られたものと判断でき、弥生時代後期後半頃まで続いたものと考えられる。

3号溝状遺構内堰（第18図）

3号溝状遺構の中央南寄りで検出した柵状の堰である。肩から溝内側にかけて、平行して大小の



第18図 3号溝状遺構内堰実測図 (S=1/40)



第19図 II区 3号溝状遺構実測図 (S=1/50)

木杭を打ち込んで、横木を止めている。充填材は板材の他、柱状の木材や自然の幹、枝などがあり、柱については、図化していないが、先端が焼かれているものが含まれ、建築部材の転用と考えられるものがある。堰は、幅0.6m～0.9m、長さ1.1m～1.6mを測る。時期的には出土遺物等に時間幅があり、確証はないが、遺構面の高さや肩部の木器（舟形隆起）の形状により、弥生時代中期中頃のものと考えている。

矢板列（第20図）

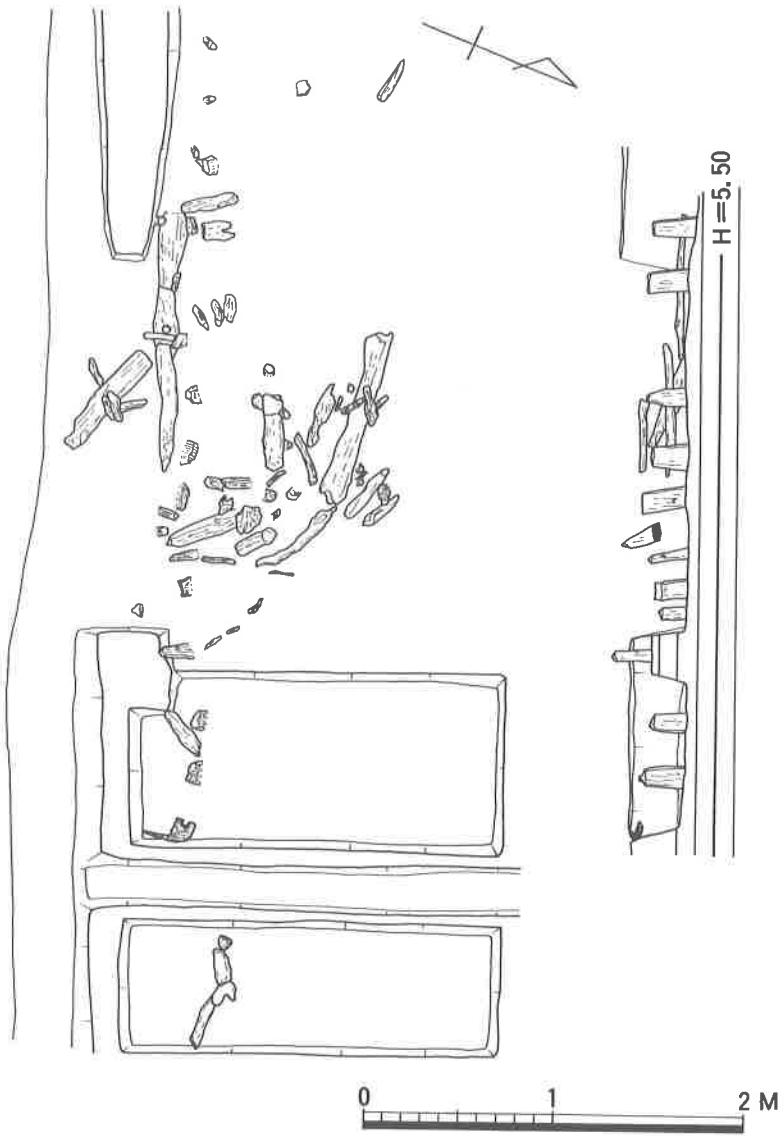
調査区中央部の南側で検出したもので、矢板列、杭列ともに一列で、調査区外へ伸びる。I区で検出した谷部中央の杭列群と出土状況が似ており、若干、方向がぶれているが、ほぼ東西へと走る。付近より四つ又鉤、エブリが出土した。検出時において2mのグリッドを組み、畦等の立ち上がりを観察したが、明確な土層の変化は確認されなかった。畦を補強したものは定かではないが、いずれにせよ、水田を区画するものと考えられる。時期は木器の形態より中期中頃と考えている。この矢板列、杭列ともに調査区外へ伸びていたが、湧水がひどく、また、調査区の関係上、追跡は断念した。

甕棺墓（第21図）

II区のAトレンチ内で検出した甕棺墓である。表土の除去の際、深く掘り過ぎてしまい、そのままトレンチとして、土層の観察の場所としたが、精査の際、担当者の不注意で甕棺の存在に気づかず、掘り方上端を掘り過ぎてしまった。現状での掘り方は、長軸116cm、短軸104cm、深さを15cmを測る。棺は壺形土器の、合わせ口式で、上甕は胴上部、下甕は口縁下を打ち欠いていた。棺内より骨片、歯が出土している。

甕棺（第22図）

上甕 上甕は、胴下半を欠損するが、大型の壺で、胴上部の頸部付近より打ち欠いている。外面、横方向のミガキ、内面は板状工具による擦過、ナデ調整で、指頭圧痕が顕著に残る。色調は外面黒色、内面淡黄色を

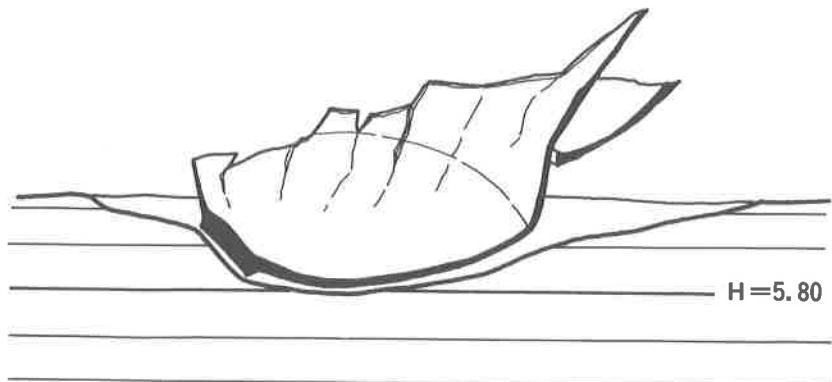
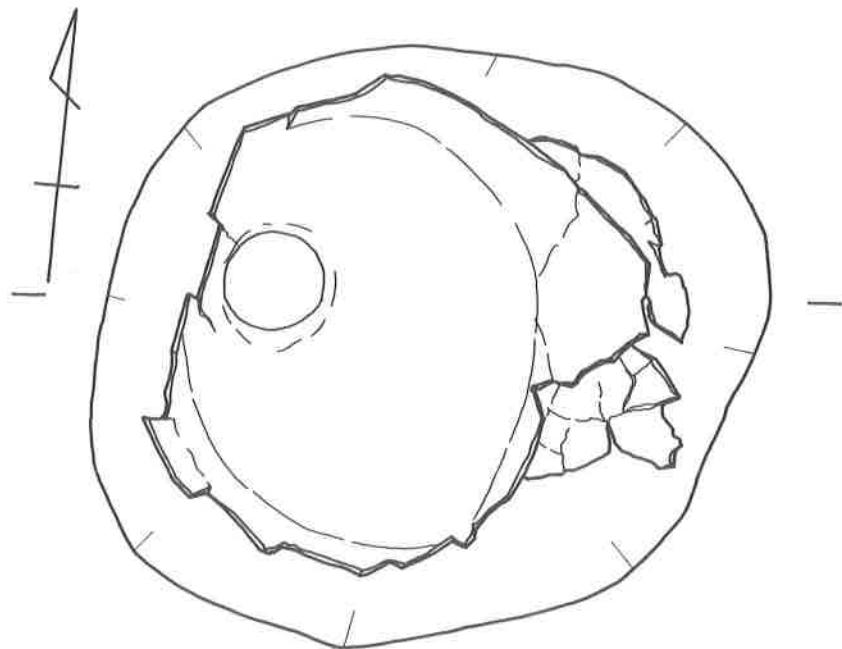


第20図 II区 矢板列 実測図 (S=1/50)

呈し、焼成は良である。外面胴上部に4本の横線とその上に現状で7本単位の山形文の彩文を施す。彩文は赤色で、付論に本田氏の論稿を載せているので、参考にされたし。現在高20.4cm、胴部最大径48.0cmを測る。

下甕

下甕は頸部上部から打ち欠いている壺で、上甕と違い、胴部と頸部の境に一条の沈線を巡らす。胴部最大径はやや下気味にあり、底部は円盤貼付底である。調整は外面ミガキ、内面板状工具による擦過、頸部内側は強いナデを施し、底部付近指頭圧痕が残る。色調は外面黒色、内面淡黄色、焼成は良である。現在高48.0cm、胴部最大径47.0cm、底部径12.4cmを測る。



第21図 甕棺墓実測図 (S=1/10)

上甕、下甕とともに橋口編年のIaより先行すると考えているが、時期的には弥生時代前期前半代(板付I式古~板付I式新)と言えよう。

甕棺掘り方内出土土器 (第23図)

甕棺掘り方内出土の土器である。暗青灰色シルト層内に包含されていたものと考えられ、時期的には甕棺墓より先行する。弥生前期以降の遺構面である暗青灰色粘質土は、石崎地区一体に広がるものであるが、本来の地山ではなく、堆積層である。この層以下古い遺構面がある事は確実で、一期期古い土器の包含が全域で認められている。115~117は共に縄文晩期前半の粗製深鉢で、同一固

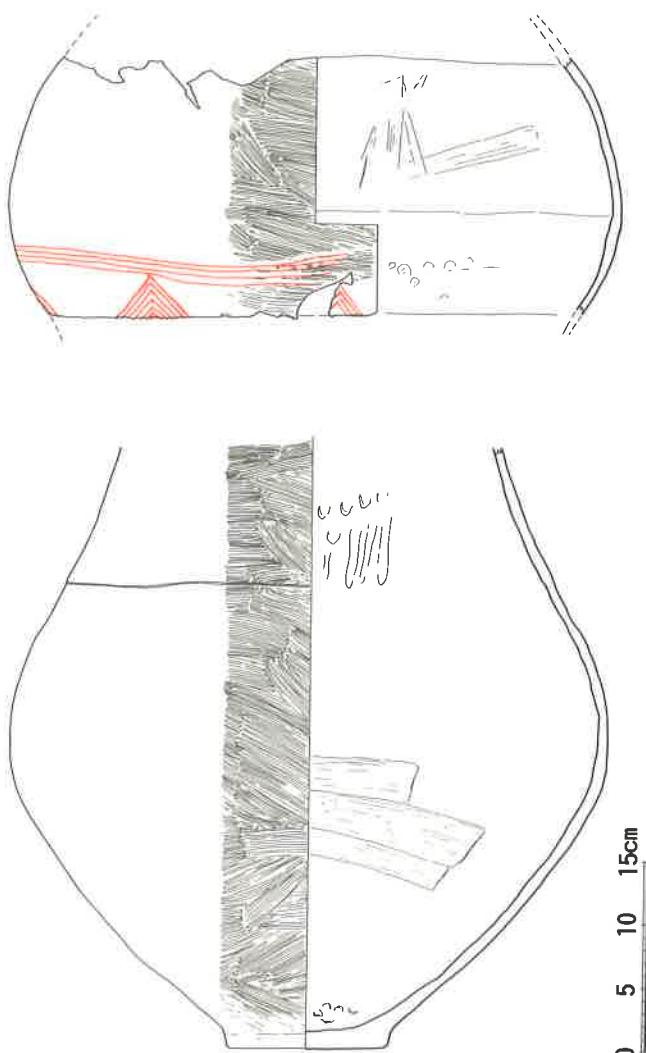
体と考えられるが、接合する面はない。底部は比較的肉厚の平底で、直線的に外反する胴部から内側に丸く収める口縁部へと続く。調整は、外面粗い条痕、内面条痕の後、ナデを施す。色調は内外面希茶色で、焼成はやや不良である。

サブトレンチ出土土器（第24図）

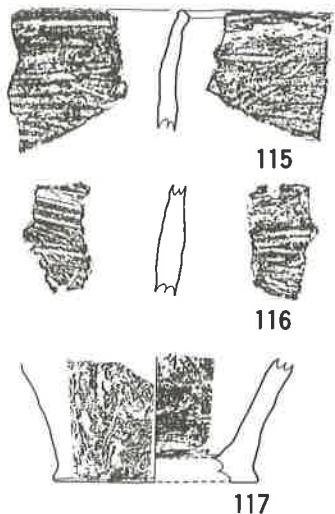
甕棺墓を検出したトレンチの北側で、設定したサブトレンチ内の土器である。118、119は頸部のしまりのない甕の口縁部片で、調整は内外面ハケ、118は板ナデも併用する。120は甕の底部で、中央が若干上げ底となる。調整は外面はハケ、内面はナデ調整である。時期は共に前期後半～中期初頭であろう。121は大型の壺の底部で、外面は板状工具による擦過を施す。甕棺の底部よりは明らかに後出的であり、時期は前期末と言える。

3号溝状遺構出土土器（第25・26図）

122～131、134、135は口縁端部に刻み目をもつ甕である。112は深鉢の可能性がある。122～125、134は比較的小さめの刻み目をヘラ状工具で施し、外面調整はナデ、123はハケ調整である。128は口縁端部に平坦面を持ち、刻み目は深い。すべて板付Ⅰ式の範疇に収まるであろう。129～131は口縁端部の下側のみに刻み目を持ち、調整は基本的に板ナデである。時期は前期末であろう。132、133は口縁断面が三角形を呈す甕である。時期は中期初頭であろう。136は金海式の甕で、内側に粘土帯を付す。内外面板ナデとミガキを施す。137、138は壺底部であり、137は円盤貼付底で、外面板ナデを施す。板付Ⅰ式である。138は後出的で、外面ハケ調整である。前期末であろう。139～143は弥生中期の甕口縁部片で、口縁部断面がL字、T字を呈す。139は口径23.2cmに復元でき、外面ハケ調整、内面ナデ調整である。144はく字状口縁を呈するもので、口径20.4cmに復元できる。外面ハケ調整、内面板ナデを施す。時期は終末期であろう。145～147は広口壺であり、口縁部に差異がある。146

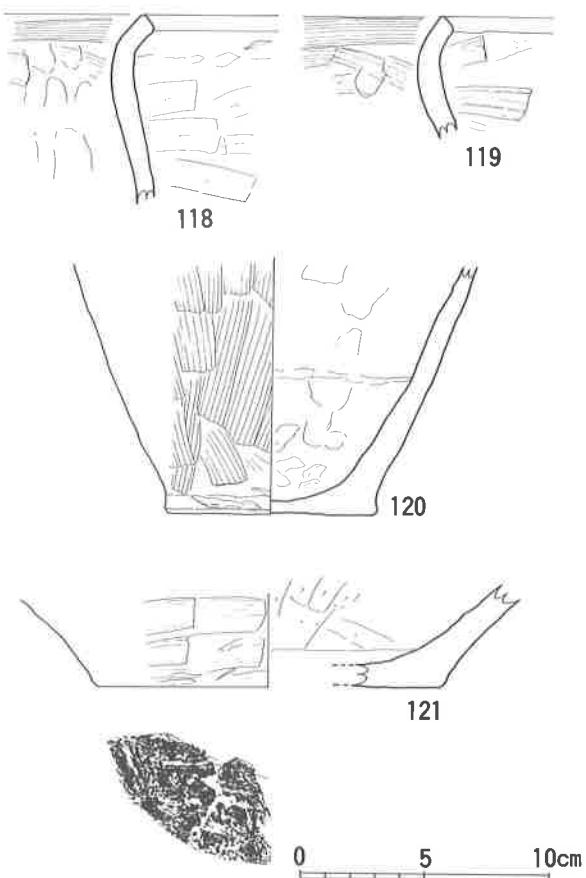


第22図 甕棺実測図 (S-1/6)



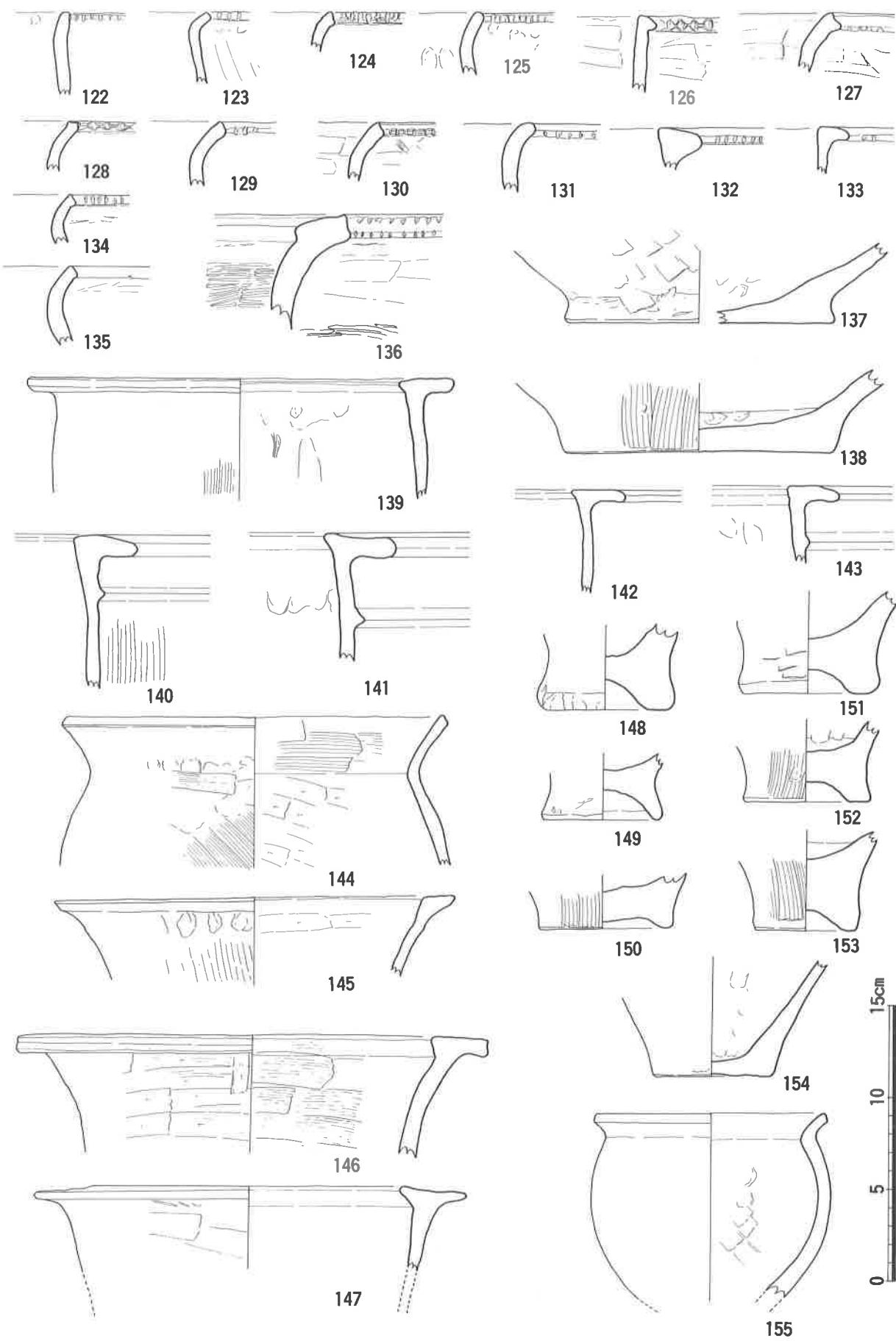
第23図 甕棺掘り方内出土縄文土器実測図 (S-1/2)

は口縁断面がL字状を呈し、外面板ナデ、内面ハケ調整を施す。また、内外面黒色顔料を塗る。148～153は上げ底、154は平底を呈す甕の底部片で、148、149、151は亀の甲タイプ、150、152、153は外面ハケ調整を施す城の越タイプである。155は底部を欠損する壺で、くの字口縁を呈す。口径12.4cm、器高は現高で10cmを測る。外面丁寧なナデ、内面ハケ調整である。時期は後期終末であろう。156、157は中期の高坏で、156は口径26.6cmに復元できるもので、内外面丹塗り磨研である。時期は後期初頭であろう。157は坏部が深いもので、外面ナデ調整、中期代で収まるであろう。158は小型の高坏の脚部で、内外面板ナデ、後期前半代と考える。159は器高の低い器台で底径7.9cm、口径7.0cm、器高8.1cmを測る。外面板ナデを施す。時期は後期前半代であろう。



II区出土石器（第27・28図）

S-14は刃の部分が磨かれてない、石庖丁の未製品である。現存長6.0cm、幅4.6cm、厚さ4mmを測る。砂岩製。S-15は石庖丁であり、大半は欠損する。現存長2.9cm、幅3.2cm、刃部3mm、厚さ5mmを測る。安山岩製。S-16は直線的な形状であるが、材質もS-14と同じであり、石庖丁と考えられる。現存長4.5cm、幅3.8cm、厚さ0.3mmを測る。S-17は滑石製の小型紡錘車で、中央に4mmの円孔を穿つ。1.9cm×1.7cm、厚さ4mmを測る。すべて3号溝出土である。S-18～S-37は3号溝出土の石器である。S-18は長さ2.2cm、最大幅1.7cm、厚さ4.5mmを測る打製石鏃で表裏とも丁寧に調整加工している。黒曜石製。S-19も打製石鏃で先端部を欠損する。長さ1.95cm、最大幅1.9cm、厚さ3.5mmを測り、表裏とも丁寧に調整加工している。黒曜石製。S-20は安山岩製の石鏃であり、関の一方を欠損する。長さ2.65cm、最大幅1.8cm、厚さ4mmを測るもので、表裏とも主要剝離面を多く残す。S-21は長さ3.75cm、最大幅2.1cm、厚さ10mmを測る削器で、表裏とも主要剝離面を多く残す。黒曜石製。S-22はつまみ形石器で、長さ3.2cm、最大幅1.8cm、厚さ8mmを測る。黒曜石製。S-23はやや大型のつまみ形石器で、半分に欠損している。長さ3.2cm、最大幅1.8cm、厚さ8mmを測る。黒曜石製。S-24～S-26は縦長剝片を用いた石刀である。S-24は主要剝離面と剝離面が逆である。長さ3.3cm、最大幅1.2cm、厚さ6.5mmを測る。S-25、S-26は主要剝離面と剝離面が同一方向であり、断面が台形状を呈す。S-25は長さ3.5cm、最大幅1.1cm、厚さ3mm、S-26は長さ4.3cm、最大幅1.3cm、厚さ5mmを測る。すべて黒曜石製である。S-27～S-37は石刀、すべて黒曜石製である。S-35以外は主要剝離面を多く残し、所謂サブブレイドと呼ばれるものである。S-27は長さ3.3cm、最大幅2.4cm、厚さ5.5mm。S-28は長さ3.55cm、最大幅2.0cm、厚さ5.5mm。S-29は長



第25図 II区 3号溝状遺構出土遺物実測図-1 (S=1/3)

さ3.45cm、最大幅2.0cm、厚さ9mm。S-30は長さ3.15cm、最大幅1.9cm、厚さ7.5mm。S-31は長さ2.85cm、最大幅2.45cm、厚さ4mm。S-32は長さ2.65cm、最大幅2.5cm、厚さ6mm。S-33は長さ3.3cm、最大幅2.25cm、厚さ8mm。S-34は長さ4.6cm、最大幅2.75cm、厚さ9mm。S-35は長さ2.8cm、最大幅1.55cm、厚さ5.5mm。S-36は長さ2.15cm、最大幅1.5cm、厚さ3.5mm。S-37は長さ2.2cm、最大幅1.5cm、厚さ4mm。

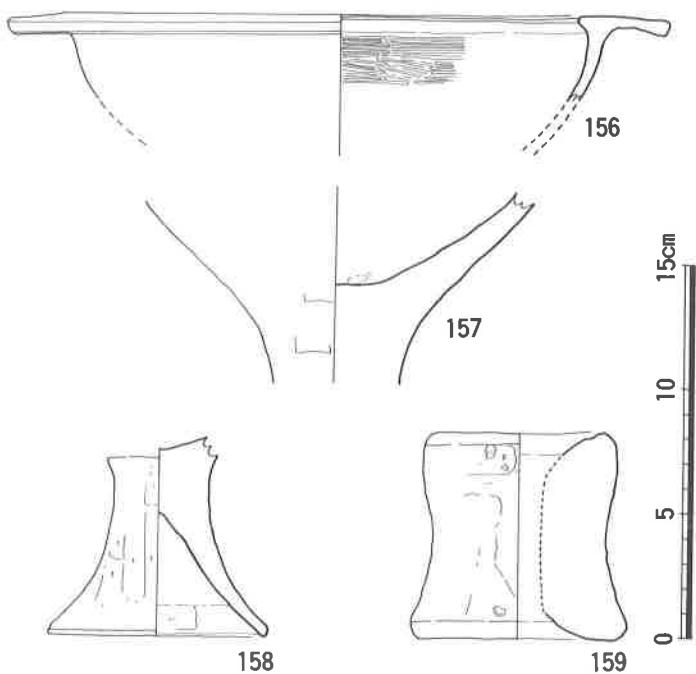
II区出土木器（第30図）

W-01は、3号溝の東側肩付近で出土した平鉤である。舟型隆起より欠け、横も1/3が欠けている。隆起のすぐ脇に柄を絞めるためのものと考えられる直径2.5cm位の孔を穿つ。加工痕は突起とその周辺に顕著に残り、現長11.3cm、幅14.4cm、厚さ1.1cmを測る。

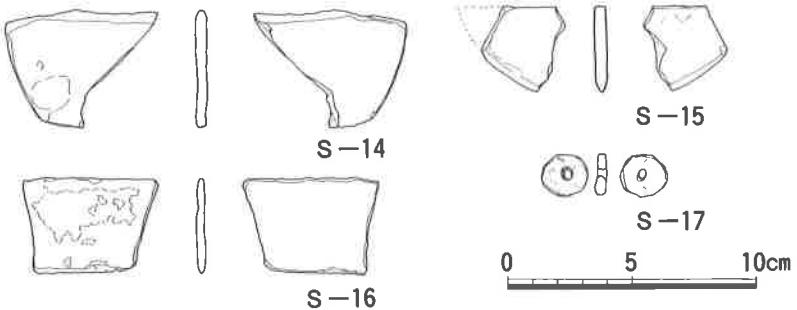
W-02は3号溝の東側の杭列付近で出土した舟型隆起である。隆起の部分で剥離しているため、現状の孔の角度では鉤か鋤かは判断できない。孔は長軸4.6cm、短軸3.4cmを測る方形で、全体的に加工痕が残る。現長14.4cm、幅6.2cm、厚さ2.0cmを測る。W-03は矢板列付近で出土した鉤で、半分より欠損しているが、四つ又鉤であろう。頭部は半円形で、断面、隅丸の棒状の刃部へと続く。孔は一辺4.0cm程の方形である。現長27.4cm、幅11.8cm、厚さ2.5cm、刃部の長さ15.2cmを測る。W-04は矢板列中で出土した狭鉤である。両先端を欠損する。中央の柄の装着部は若干盛り上がり、5.3cm×4.2cmの円孔を穿つ。加工痕は部分的に観察でき、現長42.3cm、幅9.8cm、厚さ1.9cmを測る。

その他の遺物

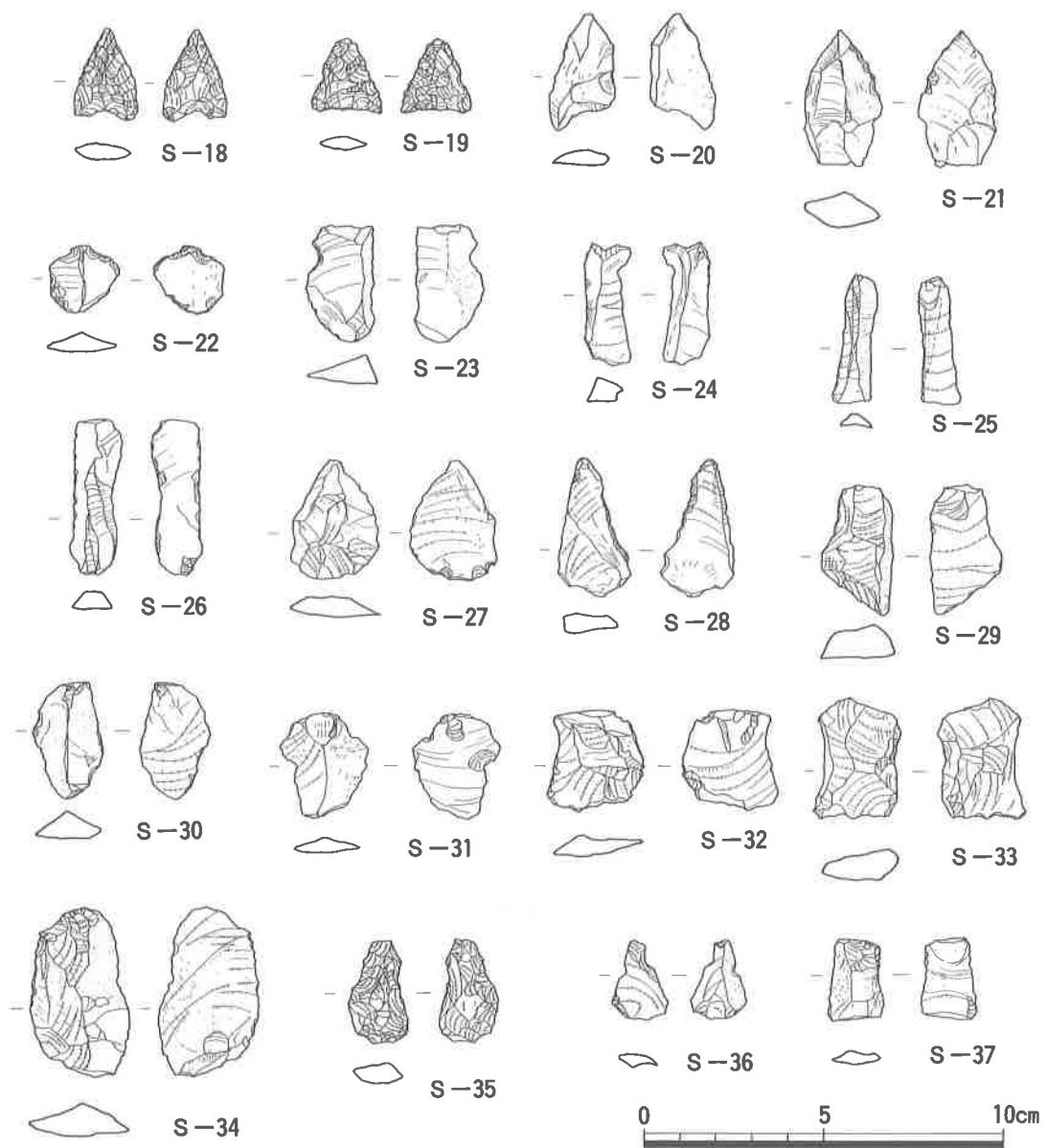
1～3は3号溝出土の投弾である。暗赤褐色～褐色を呈すもので丁寧に整形する。1は他と違いやや大型である。1は長軸5.3cm、短軸3.0cm、厚さ2.9cm。2は長軸3.3cm、短軸2.2cm、厚さ2.2cm。3は長軸3.2cm、短軸1.8cm、厚さ1.6cm。4は土製紡錘車で、中央に5mmの円孔を穿つ。土器片の転用品である。5は碧玉製の管玉であり、色調は黒色に近い濃紺を呈す。全長24mm、径7mmを測る。共に3号溝出土である。



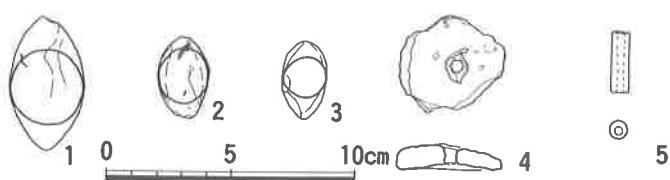
第26図 II区 3号溝状遺構出土遺物実測図-2 (S=1/3)



第27図 II区 出土石器実測図 (S=1/3)



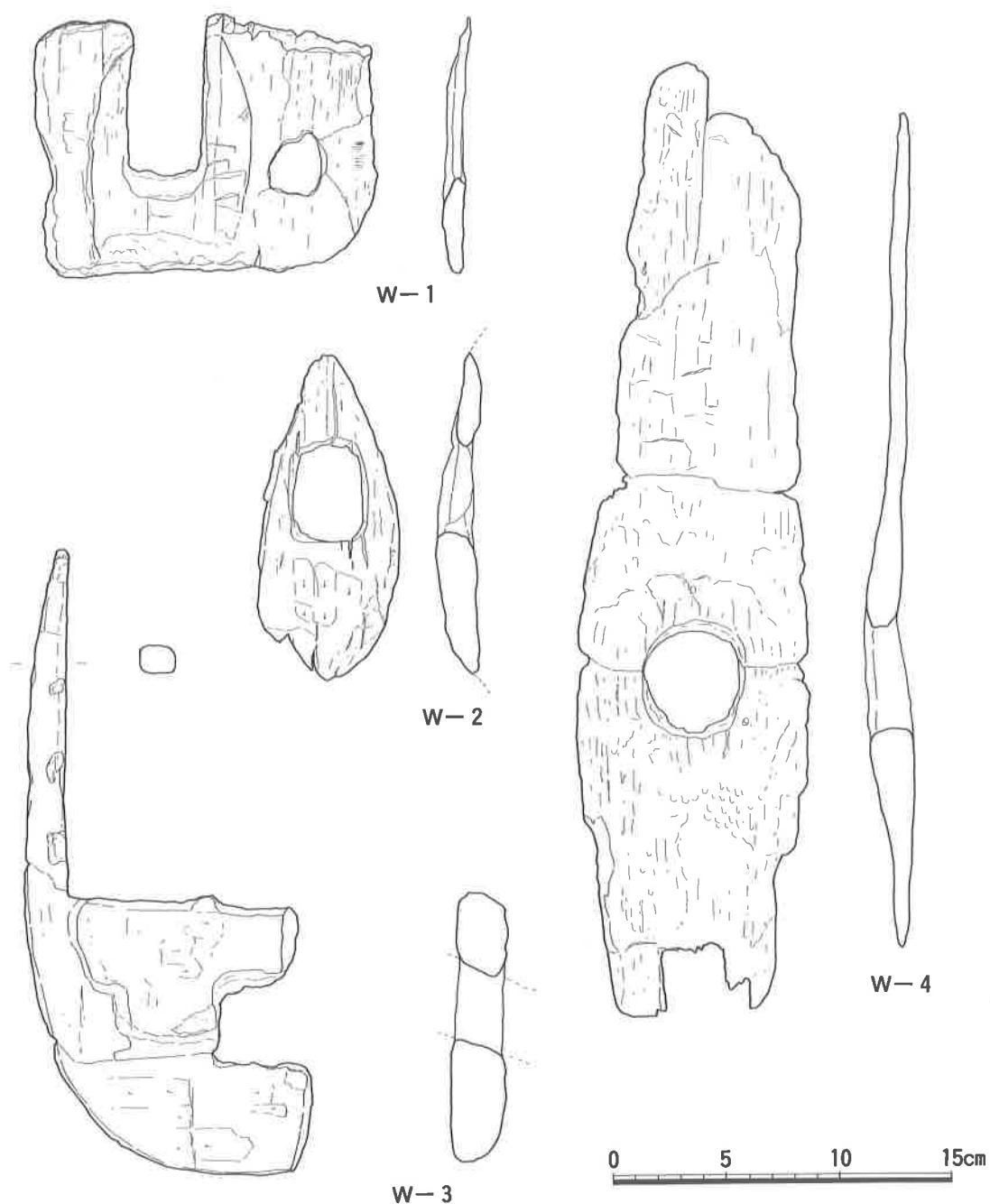
第28図 II区 出土石器実測図-2 (S=1/2)



第29図 その他の遺物実測図 (S=1/3)

小 結

II区では、I区で確認した3号溝状遺構を全容を検出できた。この溝は、その項でも説明したとおり、横木や板材を杭で止め、しっかりと溝の両肩を護岸している事が観察でき、当時の土木技術の高さを窺わせる。また、中央部には、堰を完備しており、この溝状遺自体が水田に伴うものとして判断できる。この3号溝については、昭和63年度調査区の河川につながるものであろう。甕棺墓についても、昭和63年度調査地の甕棺墓群とは別の墓群が近隣に存在しているものと考えられ、丘陵東側の低台地上に支石墓、木棺墓などを含むかなりの墳墓が広がっている事が想定される。



第30図 II区 出土木器実測図 (S=1/3)

4. III区の調査

遺構

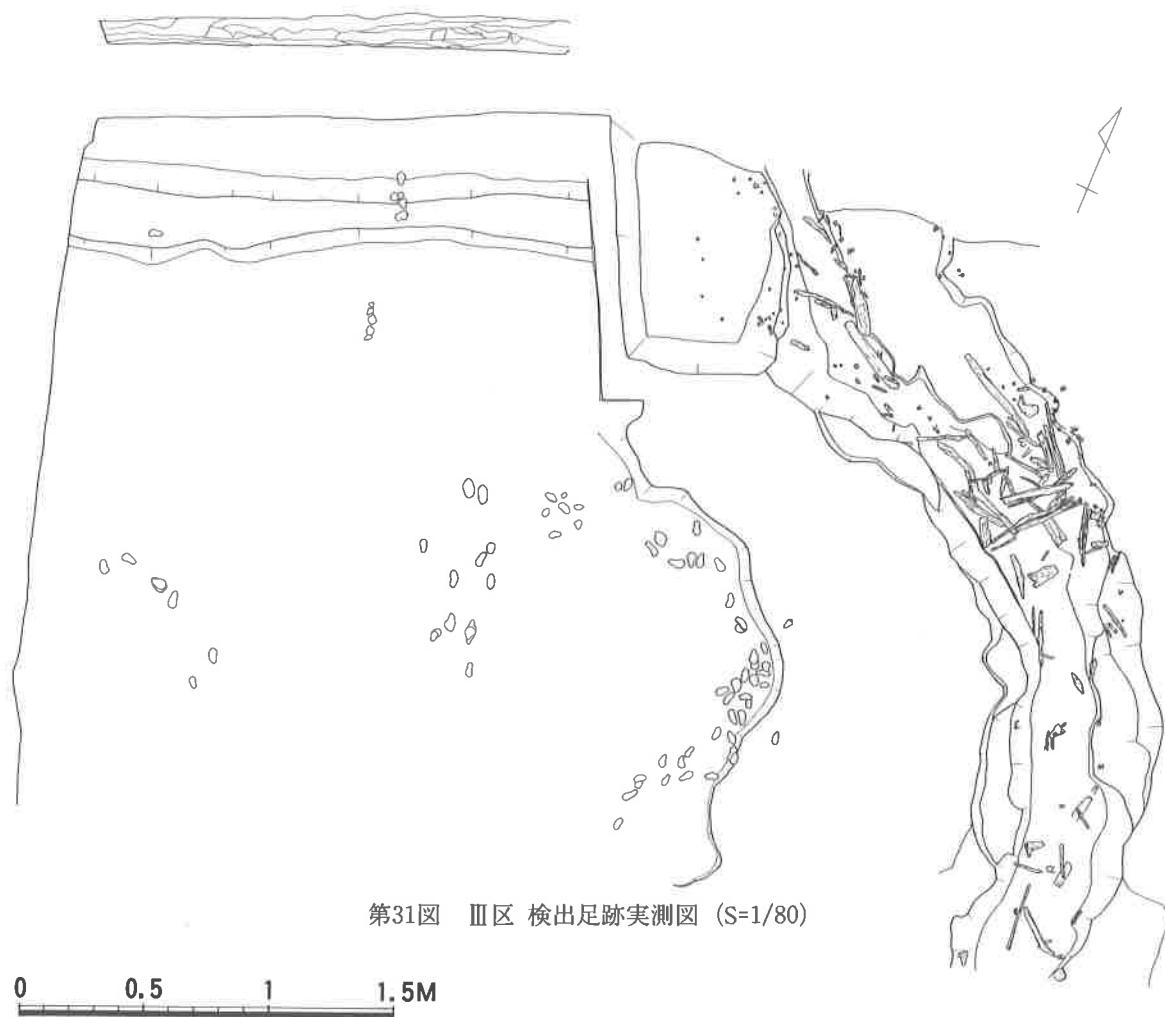
貯水槽部分にあたり、弥生中期の水田面、縄文晩期～弥生前期の水田面の2枚の遺構面を検出した。なお、下層に初期稻作開始期の遺構面の存在は疑うべきものではなかったが、再三にわたる協議の結果、貯水池の構造上、無理が生じるという農林サイドの考えに押し切られ、調査を断念した。遺構、遺物の順に説明を加えたい。

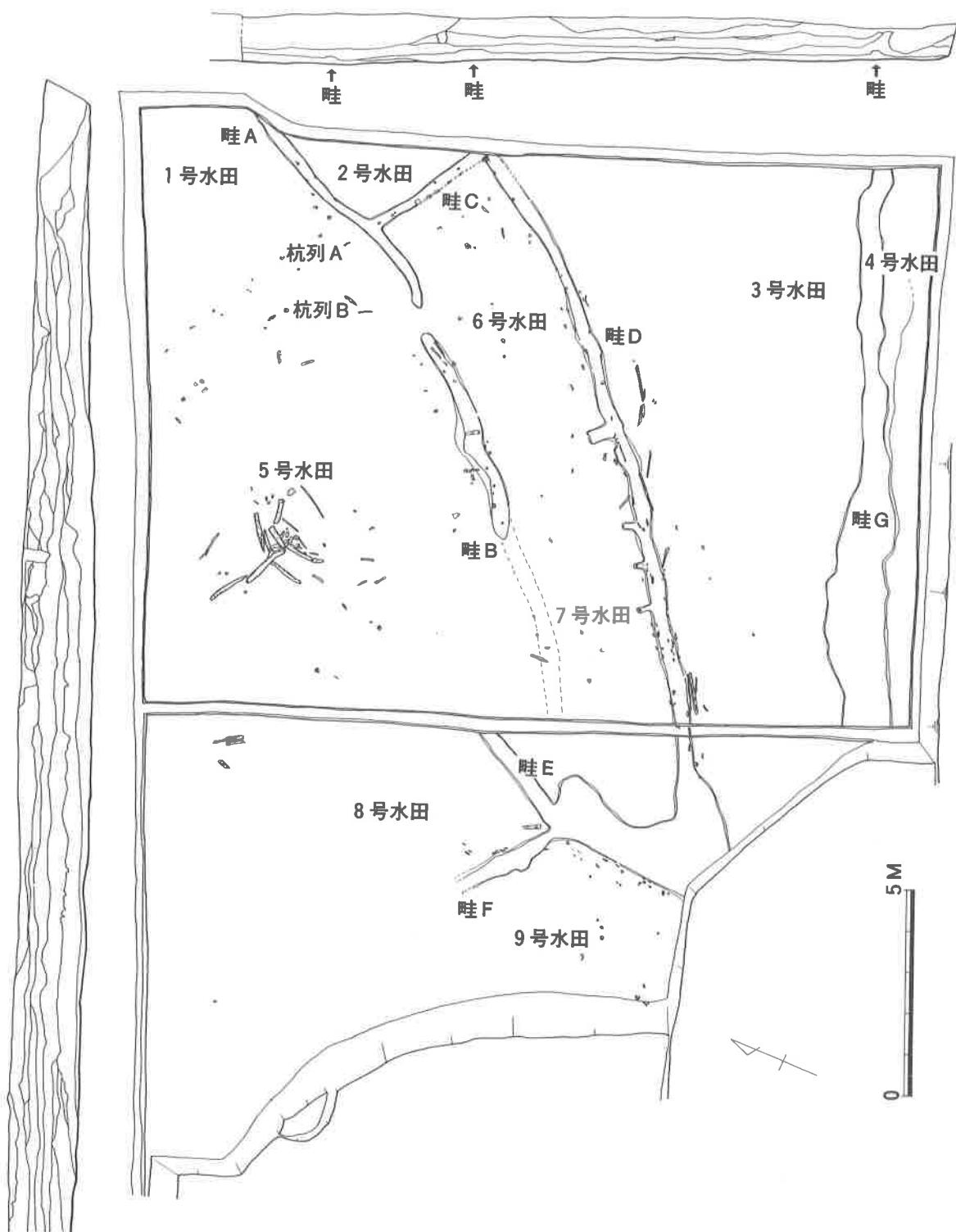
第1遺構面の足跡（第31図）

足跡は、I区、II区を通して確認した3号溝状遺構の西側、台地の傾斜変換線付近で集中している。検出した面は、暗茶色の粘質土上で、この面が白色の粗い砂で覆わっていた。確認された足跡は、西側より始まり、南側から北側へと台地を回るように進んでいる。この面自体、西側で畦状の高まりも検出されている事からも、水田面と判断できる。しかし、畦状の高まりは一箇所のみで、明確に水田を区画する畦や杭列は出土しなかった。

3号溝状遺構（第32図）

III区では西よりに弧を描く様に検出した。最大の幅は270cm、深さ75cmを測り、東側に平坦面を持ち、2段となる。溝内側の両肩には杭、矢板を打ち込んでいるが、横木を渡している部分は確認されなかった。溝内からは弥生土器の他、三つ又鍬などの木製品、管玉、紡錘車などが出土している。





第33図 III区 第2遺構面検出水田遺構実測図 (S=1/150)

第2遺構面の水田（第33図）

3号溝状遺構の東側は、畦、杭列、甕棺墓等の遺構が検出されなかったため、下層の調査を実施した。結果、第1遺構面から約90cm下で、南から北へとわずかに傾斜する第2遺構面にあたり、水田面9枚を検出した。検出された水田は、畦、杭列等で区画された、形態的には小区画水田と言える。調査区の設定上、調査地の拡幅ができず、大半は調査区外となったため、水田の全容を確認する事はできなかった。以下、順次説明を加える。

1号水田

畦Aと杭列Aで区画された水田である。大半は調査区外となるため、全容は不明である。杭列Aについては、畦を補強したものとも考えられ、畦自体は流失したものであろう。

2号水田

畦A、畦Bにより区画され、大半は調査区外となる。畦A、畦B共に幅25cm程で、杭でしっかりと補強されている。

3号水田

畦D、畦Gにより区画されている。間の南北方向に畦等の存在の可能性があるが、検出時では確認されなず、現状では一回り大きい水田と判断した。また、畦Dは畦の両側に横板をはめ、杭で止めていた。

4号水田

畦Gより南側へ伸び、大半は調査区外となる。やはり、南北方向に畦等の存在の可能性があるが、現状では3号水田同様、一回り大きい水田と判断した。

5号水田

畦B、畦Eと杭列A、Bにより区画される。中央に矢板等を杭列で止めた施設が検出されている。

6号水田

畦C、畦A、畦B、畦C、畦Dで区画される。北側に水口を持ち、畦は杭列でしっかりと補強している。現状で19.25m²を測る。

7号水田

畦B、畦D、畦Eで区画される。畦Eが途切れているが、5号水田の施設の方向へ伸びているため、推定で28.52m²を測るものと考えられる。

8号水田

畦E、畦Fと5号水田の施設で区画される。北側は調査区外となり、畦も大半が流失している。

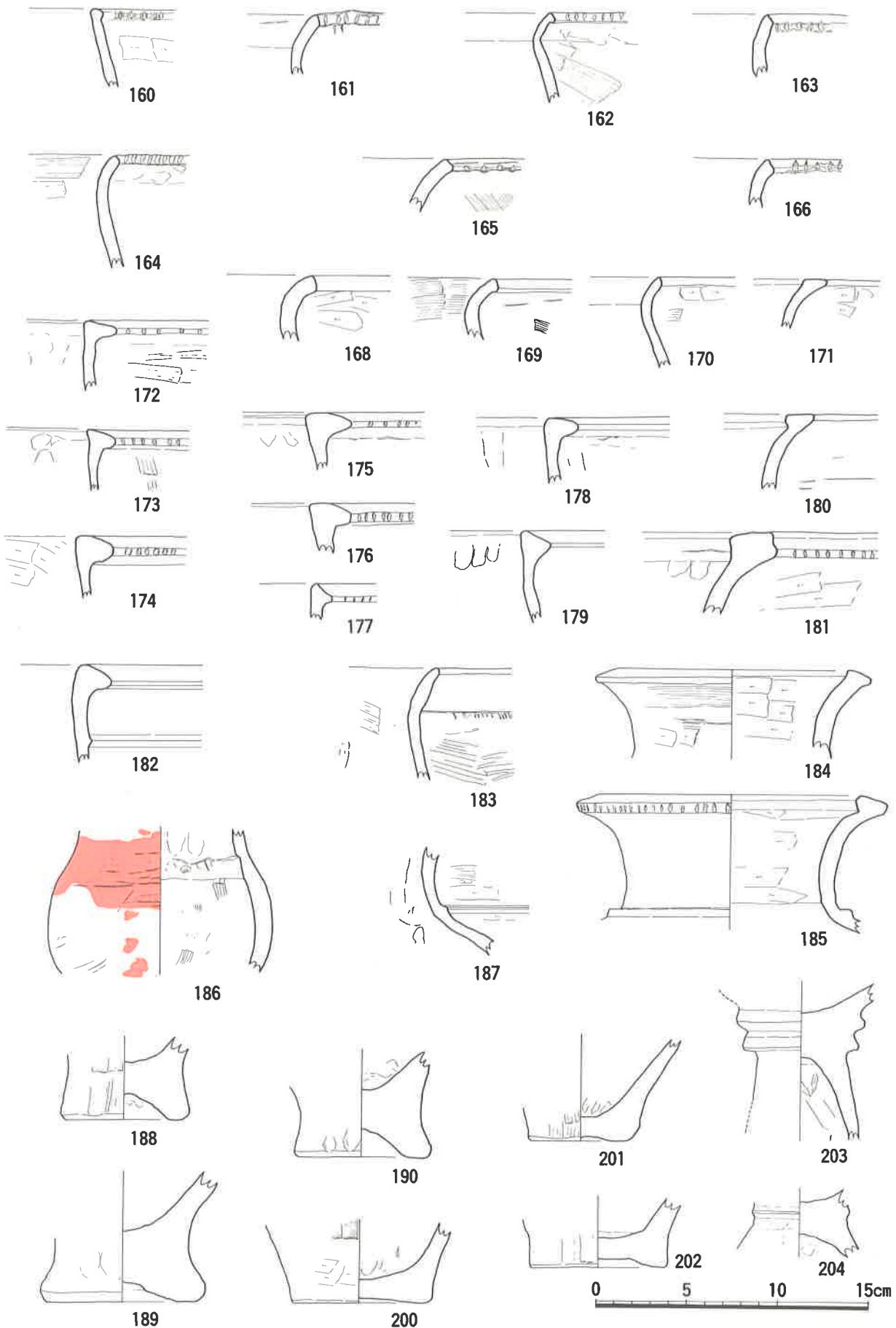
9号水田

東側にコーナーを持つ畦Fの西側の水田である。大半は西側調査区外となり、畦も流失がはげしいが、残存しているものは、しっかりと杭等で補強している。

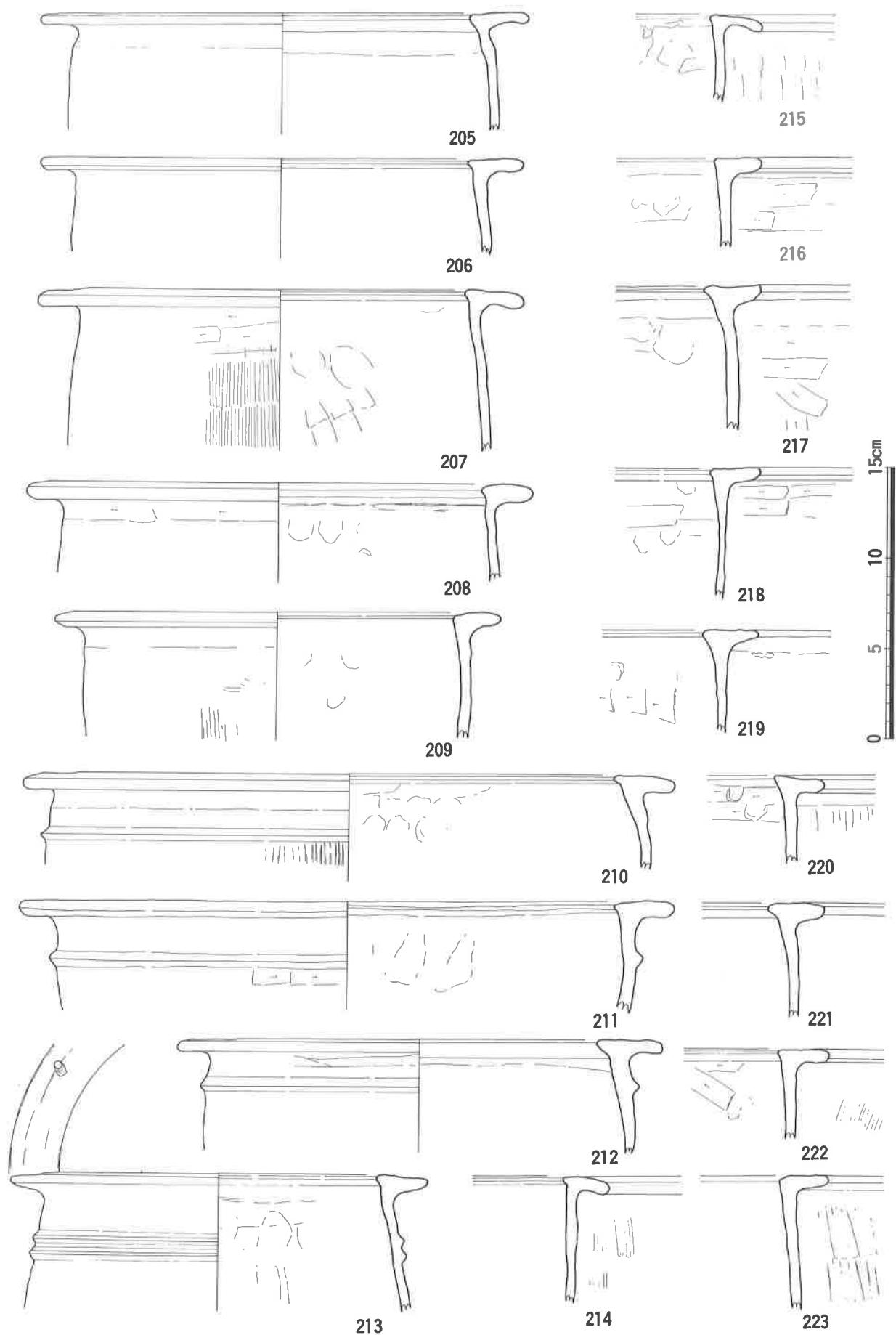
遺物

3号溝状遺構出土土器（第34～38図）

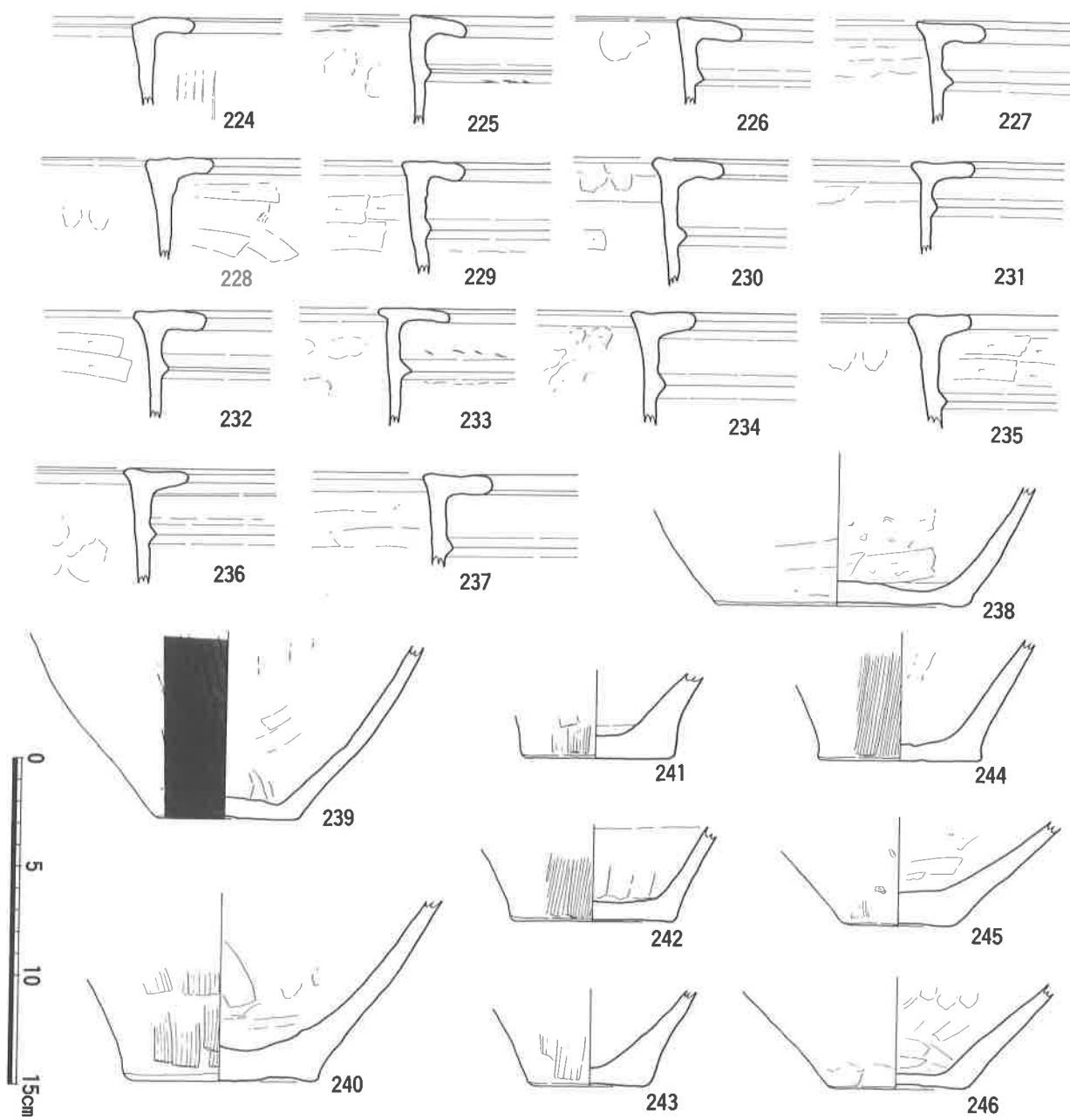
160は肩部より内側へ屈曲する深鉢の口縁部片で、口縁端部へ刻み目を持つ。161～166は甕口縁部片で、口縁端部に刻み目を持つ。162は外面ハケ調整、164は板ナデを施す。共に弥生時代前期前半（板付Ⅰ式期）であり、他は前期末（板付Ⅱ式期～金海期）であろう。168～170は刻み目を持た



第34図 III区 3号溝状遺構出土遺物実測図-1 (S=1/3)

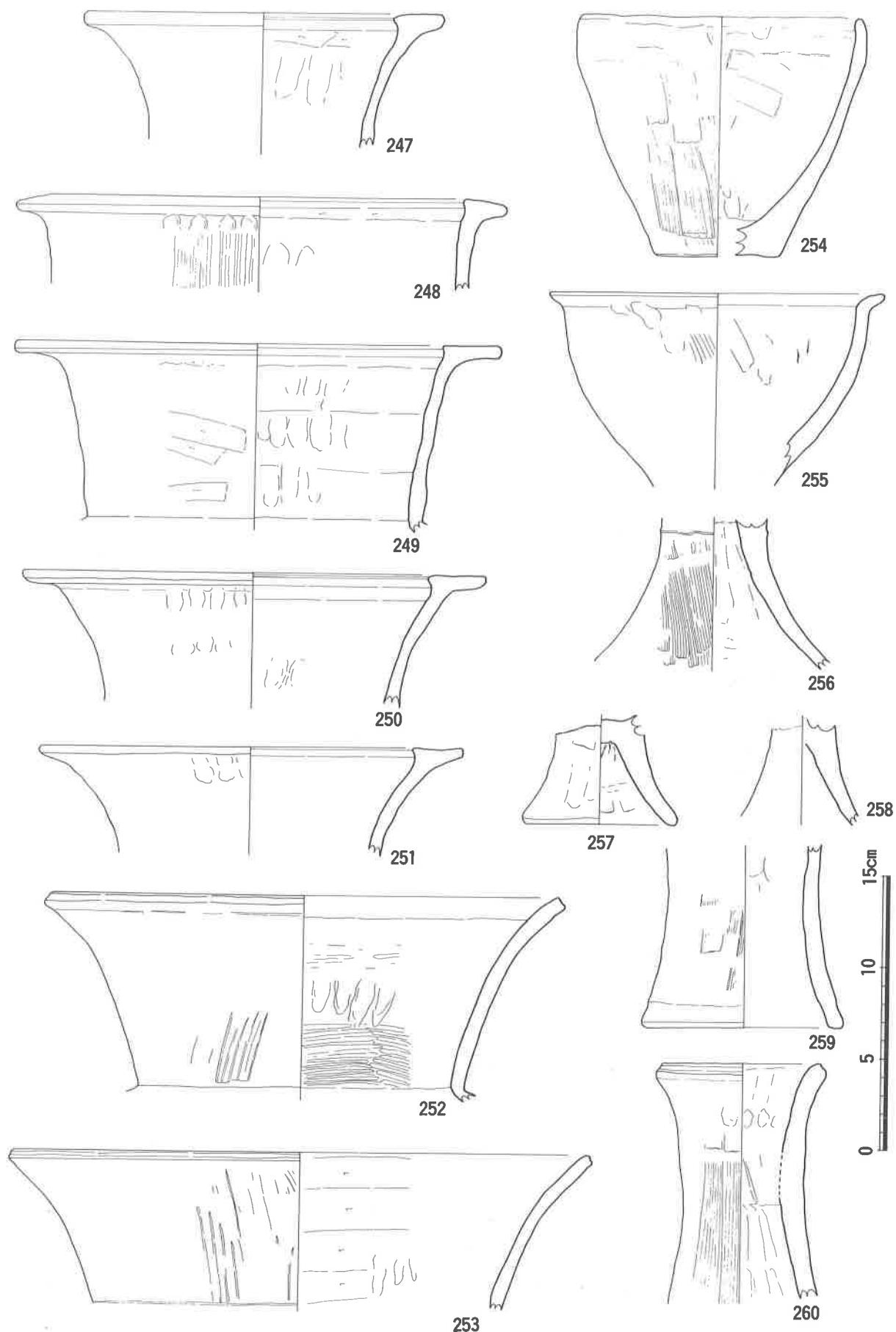


第35図 III区 3号溝状遺構出土遺物実測図-2 (S=1/3)

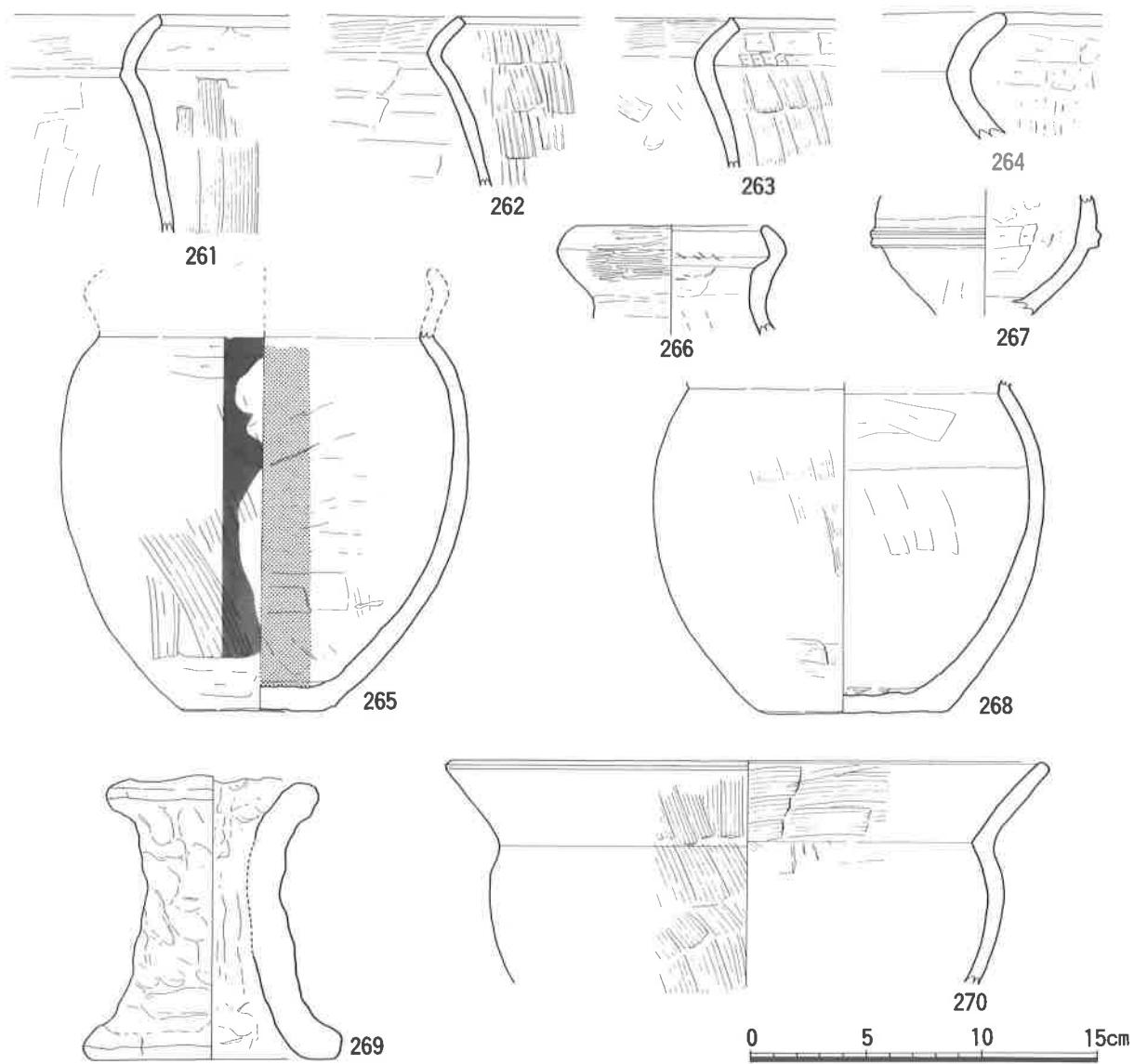


第36図 III区 3号溝状遺構出土遺物実測図-3 (S=1/3)

ない甕で調整は基本的に板ナデ、ハケ調整であり、時期は板付Ⅱ式期～金海期であろう。172～179は口縁断面が三角形を呈す甕で端部に刻み目を持つものと持たないものがある。全て亀の甲期で中期初頭と言える。171、184、185は前期末～中期初頭の壺で、肩部に三角凸帯を持つものである。184は復元で、口径15.2cm、185は17.0cmを測る。調整は基本的に板ナデで、185は口縁端部に刻み目を持つ。183は板付Ⅰ式期の壺で外面調整ミガキ、黒色顔料を塗る。187は肩部に凸帯を持つもので、調整はハケである。時期は前期末であろう。186は丸みを持つ胴部の肩から直線的に屈曲する壺で、肩部に赤色顔料を塗る。調整は板ナデ、頸部内側は強いナデを施す。時期は夜臼期であろう。188～202は壺底部で、200以外は上げ底である。200は中期中頃、それ以外は中期初頭である。203、204は壊部との境に段を有す高壊である。203は2段の三角凸帯を持ち、内側に黒色顔料を塗る。



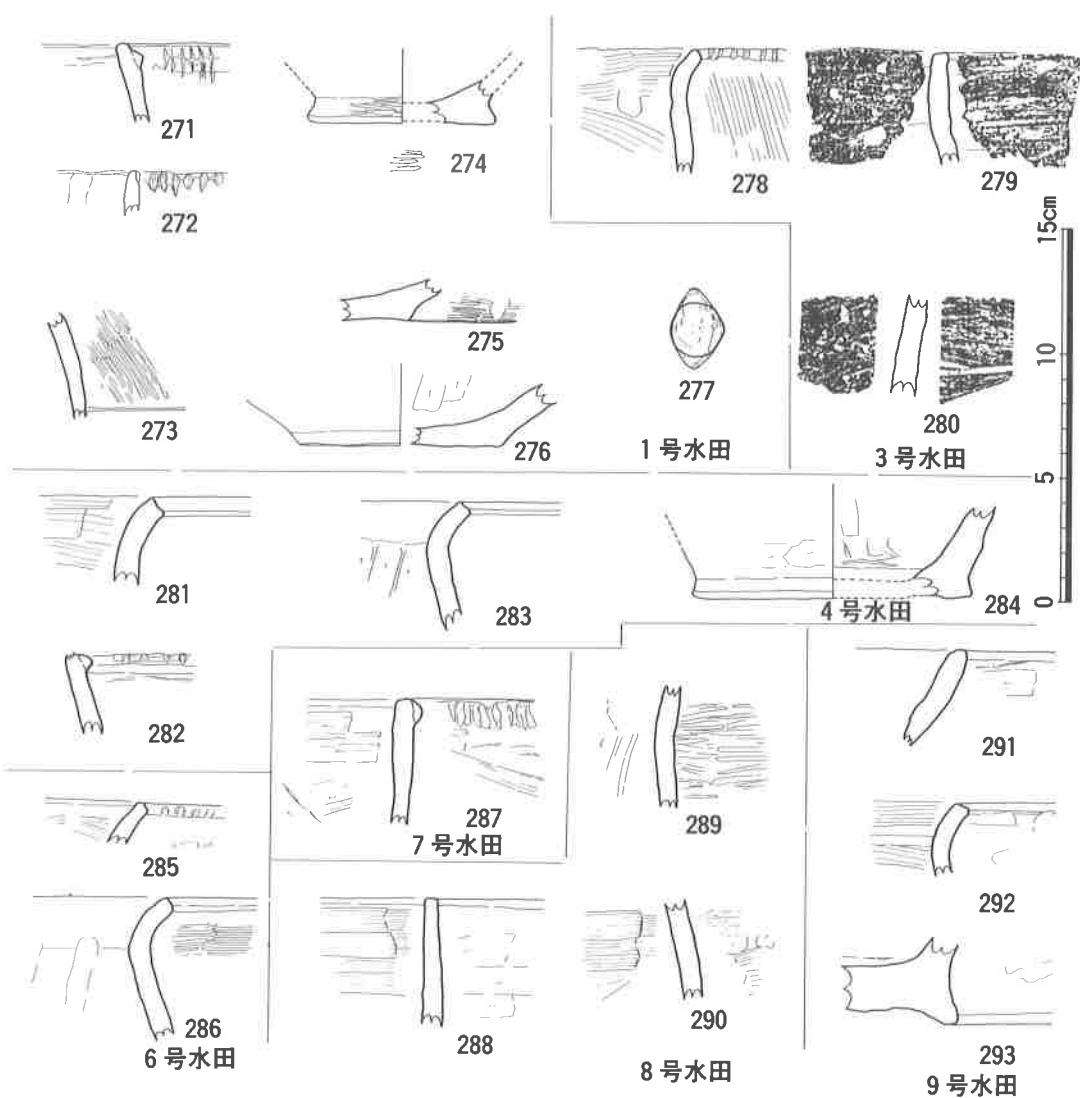
第37図 III区 3号溝状遺構出土遺物実測図-4 (S=1/3)



第38図 III区 3号溝状遺構出土遺物実測図-5 (S=1/3)

204はやや小型で、三角凸帯は一段である。204は板付Ⅰ式期、203は板付Ⅱ式期であろう。205～237は中期中頃前後の甕で、口縁断面が、L字、T字、く字とそれぞれ差異がある。205～208、212は口径27.0cm前後と中型で、調整はハケもしくはハケの後ナデ調整である。212は口縁下に凸帯を持つ。209、213は口径23.0cm前後とやや小型のもので、213は口縁上部に穿孔を持つ。210、211は口径36.0cmを測るやや大型のもので、調整はハケもしくはナデである。239は外面丹塗りの壺底部で外面粗いハケ、内面板ナデを施す。240～244は平底の底部より立ち上がり、直線的に外反する甕の底部で、240以外は小型である。調整は基本的に外面ハケ、内面ナデ調整で、240は中期後半、それ以外は、中期中頃前後であろう。245、246は広口壺等の底部であろう。小さめの平底から直線的に外反する。調整はナデである。243～253は広口の壺口縁部である。183は復元口径19.6cmを測る小型のもので、口縁形態はL字状である。時期は中期前半であろう。248～251は口径26cm前後と中型で、248は外面ハケ調整、249～251は断面、鋤先状を呈し、内外面ナデを施す。前者は中期中頃、

後者は中期後半であろう。252、253は頸部から口縁端部まで外反するもので、252は内面ミガキ、253は外面ミガキ、内面板ナデを施す。共に中期末～後期初頭であろう、254は平底の底部から直線的に外反し、端部を丸くおさめる鉢で、底径6.2cm、口径15.4cm、器高13.0cmを測る。外面粗いハケ、内面板ナデ、ナデを施し、時期は中期中頃であろう。255は底部を欠損するが、口縁く字を呈す鉢で、口縁径18.2cmを測る。後



第39図 下層水田出土土器実測図 (S=1/3)

期前半代であろうか。256～258は高坏で、256は外面ハケ調整、257、258は短脚の小型品で、外面板ナデを施す。前者は中期代、後者は後期代であろう。259、260は後期の器台で、脚部より直線的に立ち上がる。261～264はく字状を呈す甕で、内外面粗いハケ調整を施す。時期は概ね後期終末期であろう。265は平底の底部から丸みをもって立ち上がる壺で、口縁を欠損する。袋状口縁であろうか。外面ハケ、内面板ナデを施し、丹塗りである。時期は後期前半代であろう。266は小型の袋状口縁壺で、袋部は細かいミガキ調整である。時期は後期前半。267は胴中央部に台形凸帯を持つ小型の壺で、胴部は球形である。後期中頃であろうか。268は平底の感じが薄れつつある壺で、口縁を欠損する。内外面ハケ調整のあとナデを施す。時期は後期後半前後であろう。269は終末期の器台で、底径10.4cm、口径9.0cm、器高12.2cmを測る。内外面強いナデ調整である。270はく字状の口縁の鉢で、復元口径25.4cmを測る。内外面ハケ調整で、時期は後期終末期であろう。

第2 遺構面 水田出土土器 (第39図)

271～277は1号水田出土土器である。271は甕口縁部片で、調整は内外面板ナデである。口唇部にヘラ状工具による刻み目を施す。272も甕口縁部片で、内外面板ナデである。口唇部に板状工具による刻み目を施す。273は壺肩部で沈線を施す。外面調整はミガキである。274～276は浅鉢で、

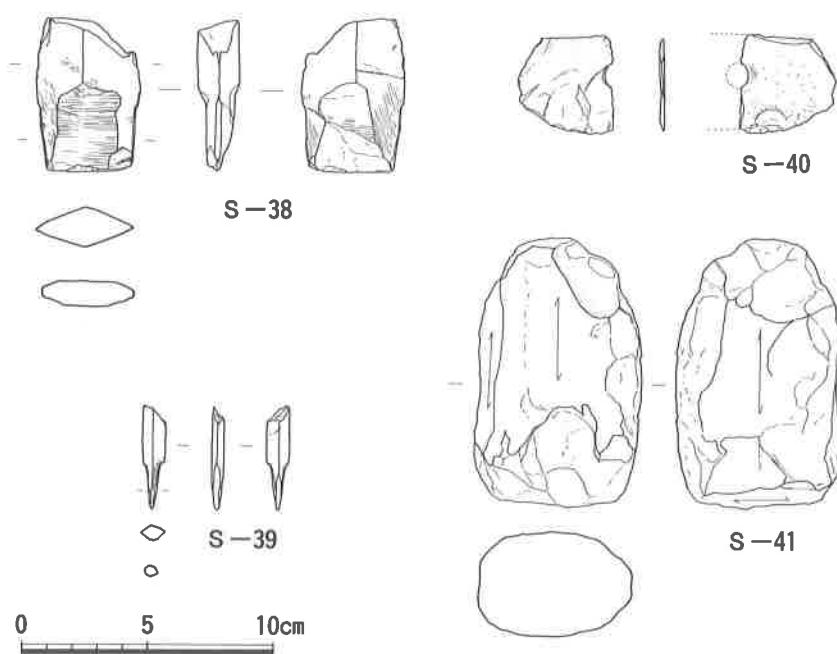
274は底径11.2cmに復元できる。外面と底部底にミガキを施す。

276はやや大型で、内外面板ナデを施す。

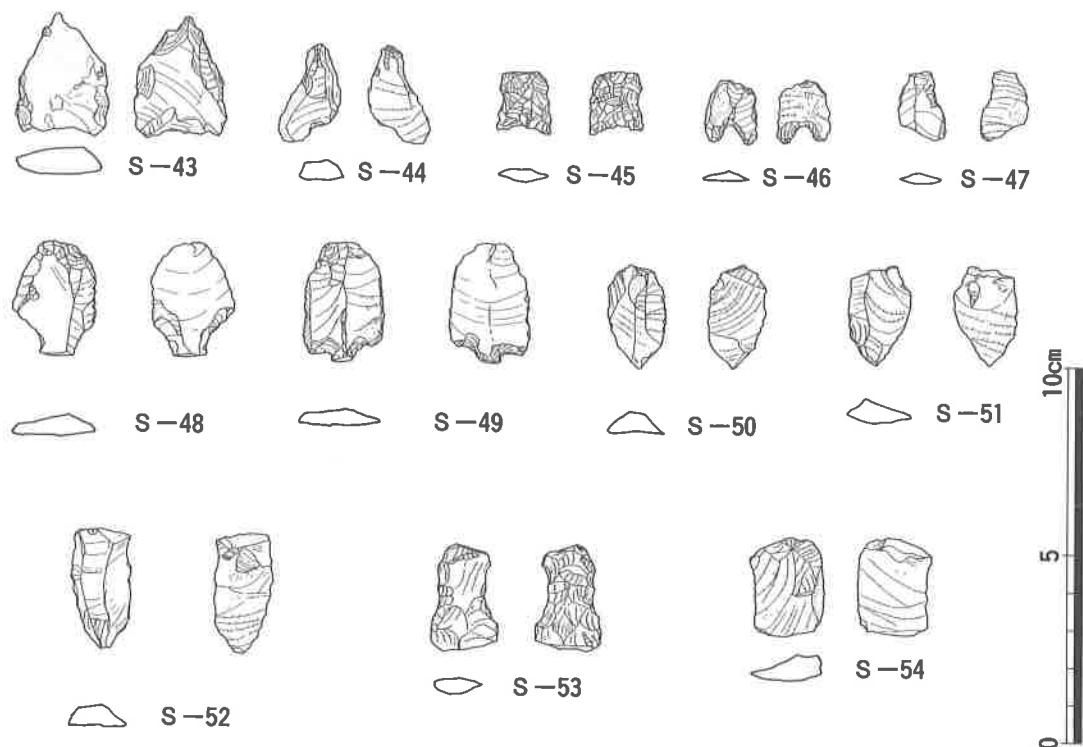
277は投弾で、長さ3.2cm、最大幅2.2cm、厚さ2.0cmを測り、色調は暗黄色である。

278～280は3号水田出土土器である。278は如意形の甕で、口唇部に刻み目を持つ。内外面ハケ調整である。

279、280は縄文晩期の深鉢であり、口縁端部



第40図 III区 出土石器実測図 (S=1/3)



第41図 III区 出土石器実測図-2 (S=1/2)

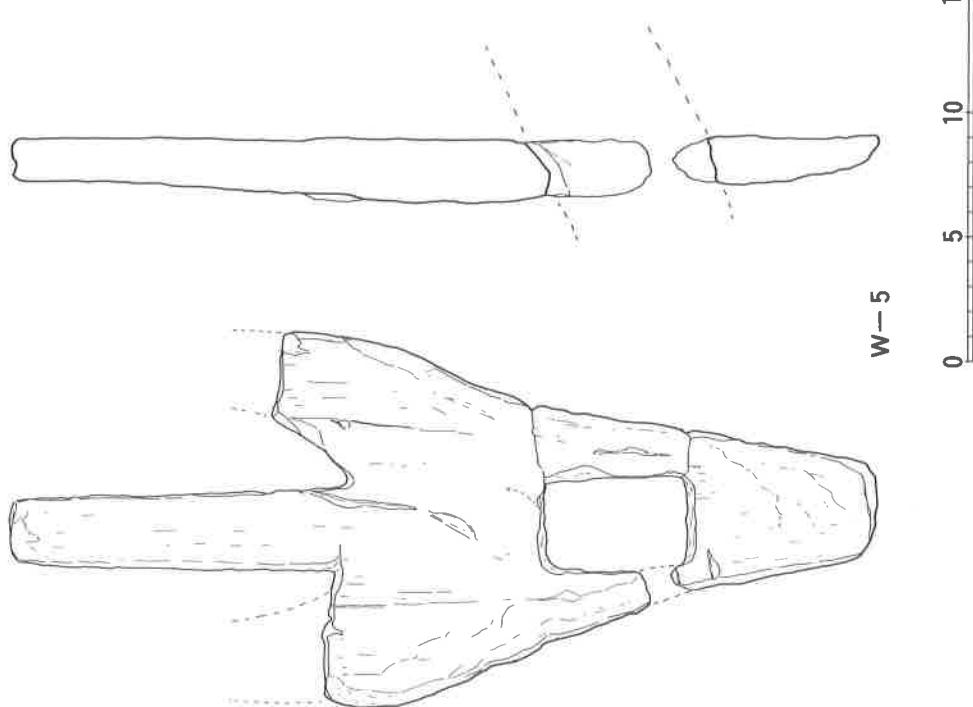
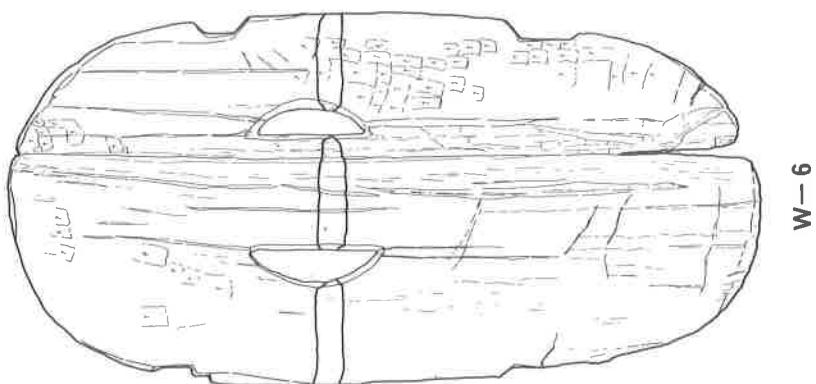
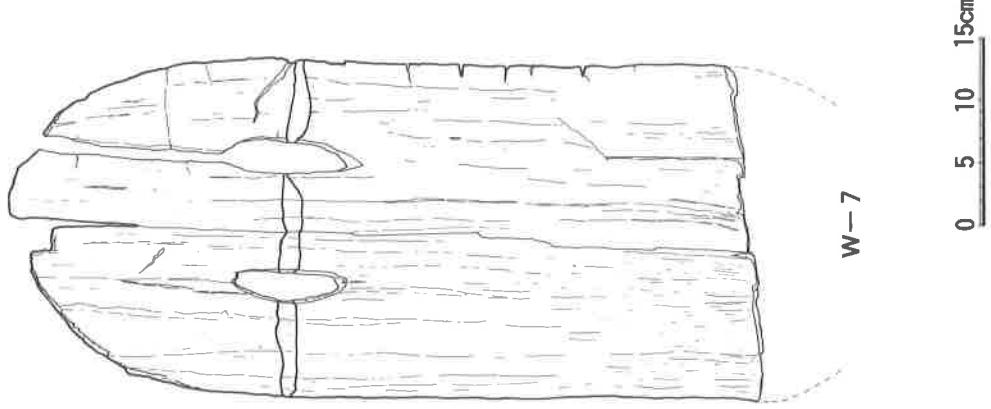
を丸くおさめている。内外面条痕を施す。280～283は4号水田出土土器である。280、281は甕口縁で、他の土器に比べ後出的である。調整はハケもしくは板ナデである。282は肩部で屈曲する甕であろうか。シャープさに欠ける突帯に刻みを施す。283は甕の底部片で、内外面板ナデを施す。底部径11.2cmに復元できる。284は、285は6号水田出土土器である。284は口縁端部に刻み目を施し、285は外面ミガキ、内面ナデを施し、やや後出的である。286は7号水田出土の甕で、直立気味に立ち上がり、口縁部に至る。内外面板状工具による擦過、口縁上部に大きめの刻み目を施す突帯を持つ。287～289は8号水田出土の土器である。深鉢であろう。287は口縁部片で、端部は平坦面を持つ。内外面板ナデ、ハケ調整を施し、外面に煤が付着している。288、289は胴部片で、288は中程より緩く屈曲する。外面ミガキ調整。289は内外面板状工具による擦過である。290～292は9号水田出土土器である。290は椀形の土器で内外面擦過を施す。291は甕口縁片。292底部片で、上げ底を呈す。

III区出土の石器（第40・41図）

S-38は8号水田出土の磨製石剣の基部である。鐸部が作り出されてない有柄式で、背部はシャープに研ぎ出されている。現長6.0cm、幅4.0cm、厚さ16mmを測り、粘板岩製である。S-39は7号水田出土の磨製石鎌で、剣先を欠損する。細みの小型で、全面丁寧に研磨する。関部は腸抉状をなし、茎部は先細く、断面六角形を呈す。現長4.0cm、基部1.7cm、身部幅9mm、厚さ5mmを測り、粘板岩製である。S-41は7号水田出土の石庖丁で、大半を欠損するため、全容は不明である。欠損部に穿孔が認められるが、加工面は粗く、未製品と考えられる。現長3.4cm、幅3.9cm、厚さ2mmを測る。玄武岩製。S-42は3号溝出土の石斧で未製品であろう。現長10.5cm、幅6.3cm、厚さ4.1mmを測る。玄武岩製。S-43～S-47、S-49～S-54は3号溝出土である。S-43は打製石鎌で主要剥離面を多く残す。先端部の端部を丁寧に調整加工している。現長3.1cm、幅2.4cm、厚さ10mmを測る。S-44も打製石鎌で関残す一方を欠損する。S-43同様主要剥離面を多く残し、端部に加工を加える。現長2.25cm、幅1.4cm、厚さ5mm。S-45は先端を欠損するもので表裏とも丁寧に調整加工を施す。現長1.4cm、幅1.3cm、厚さ4mm。S-47は先端と関の一方を欠損する。表裏とも主要剥離面を多く残す。現長1.5cm、幅1.2cm、厚さ3mm。S-48は8号水田出土のつまみ形石器で、主要剥離面を多く残す。現長3.0cm、幅2.2cm、厚さ5mm。S-49はつまみ部付近に加工を加え、大半は主要剥離面を残す。現長3.1cm、幅2.1cm、厚さ4mm。S-50～S-52は石刃である。共に主要剥離面を多く残し、S-52以外一方に刃部を作る。S-50は現長2.7cm、幅1.4cm、厚さ5mm。S-51は現長2.5cm、幅1.6cm、厚さ6mm。S-52は現長3.0cm、幅1.5cm、厚さ5mm。S-53、S-54は削器であろう。S-53は表裏とも調整加工を施す。現長2.8cm、幅1.2cm、厚さ4mm。S-54は現長2.6cm、幅1.8cm、厚さ6mmを測る。S-43～S-54すべて黒曜石製である。

III区出土の木器（第42図）

W-5、W-6、W-7は3号溝出土の木器である。W-5は三つ又鍬であり、両サイドの刃部を欠損する。長さ34.2cm、幅14.7cm、厚さ2.7cmを測り、3.3cm×5.7cmの方形の孔を穿つ。取り上げの際一部欠損している。W-6は半分に割れて出土したが、長楕半円形を呈する。中央やや下に半円形の透かしを2カ所穿つ。弧の部分の上下に台形状の切り込みを入れ、表面は加工痕が顕著に観察できる。



第42図 III区 出土木器実測図 (S=1/3・1/6)

長さ59.7cm、幅29.6cm、厚さ2.2cmを測る。W-7も2割して出土した。本来、長楕半円形を呈したものであったと考えられるが、一方がカットされる。透かしは中央より上に穿つ。弧側の切り込みは施されない。長さ59.4cm、幅26.8cm、厚さ1.7cmを測る。形態的に相違がみられるが、用途は同じであろう。当初、組み合わせ式の鍬の類いかとも考えてみたが、大きさ、形態からみて別の使用目的がある木器と考えたほうが妥当である。

小 結

3号溝状遺構は、西側に弧を描くように検出されており、かなり蛇行している事が考えられる。溝内からは、中央部で堰らしきしがらみが出土しているが、堰として確証はなく、しがらみに使用された木材も自然木が大半であった。遺物としては、上層で後期後半や中期中頃の土器が集中して出土しているが、三つ又鍬などの木製品の形態は中期代である。この時期については、第1遺構面の時期と合致し、溝の性格が水田面への用水路の機能を果たしていたものととらえてよからう。

第1遺構面としてとらえている面については、水田を区画する明確な畦が出土しなかったものの、北側において、幅50~60cmの高まりが検出され、大畦とも考えられる。また、台地裾部を歩き回った足跡が検出されたため、畦が流された水田面と考えている。

糸島地区で初の検出となった水田（第2遺構面）からは、板付I式土器と夜臼式土器が混在して出土しており、水田もこの時期と考えている。稲作開始期の遺跡が集中する石崎丘陵周辺において、今回、水田が検出された事により、同地区が板付、菜畑遺跡と同様の様相を呈していると判断でき、水田部が丘陵東側に広がる事が想定できよう。

IV. ま と め

今回の調査において、明らかになった事を要約すると次のとおりである。

① 3号溝状遺構について

石崎丘陵の東側は、谷部を挟み低台地が広がる。この低台地上では南北に走る溝状遺構が検出され、溝を中心とする水田面が確認された。溝状遺構については、最下層の夜臼式土器に始まり、最上層は弥生終末期のものまで含まれており、かなりの時期幅があるものの、その主体を占めるものは、中期中頃~後期後半の土器群であった。この溝内からは、Ⅱ区において堰と考えられるしがらみが検出されて、また、Ⅲ区にいても同様のものが検出されており、唐津市 巡見道遺跡で検出されたしがらみと同じような状況にあると想定できる。中期の水田については、明確な畦等は検出されなかつたが、矢板列が出土した。また、Ⅲ区においては、大畦と考えられる高まりが出土し、台地の縁部において足跡が検出されている。このため、この面自体が水田面と考えられ、区画のための畦が流されているものと考えたい。木製農工具については、溝状遺構、矢板列を中心に平鍬、又鍬等数点が出土しているが、形態的に見て中期代のものばかりである。

② 水田について

Ⅲ区の下層で検出した水田遺構については、出土遺物より、縄文晩期～弥生前期（夜臼、板付混在期）のものと判断している。水田形態については、依存状況は良好とは言えないものの現状で判断すると長方形を呈す小区画水田と復元できる。取水については、調査面積の関係上、判断しづらいものの台地上の3号溝状遺構下層の土器から判断して、この溝から取水していたであろう。水田の畦については、20～30cmを測る小規模なものであるが、畦自体、杭や矢板で補強している事が確認でき、当時の水田技術の高さを示すものである。稻作開始期や導入直後の水田技術が高い水準であった事は、近年の発掘でも確認されつつあるが、我国への導入時点での水田技術はすでに完成された形であったと考えてよい。今後、同地区の調査において、良好な水田面の検出と下層の水田面の検出に期待がもてる。一部分であるが、土をサンプリングしているので、今後、機会をみて、花粉分析等の報告をしたい。

③ 彩文甕棺について

甕棺墓については、本調査区内（Ⅱ区）からは1基のみの出土であった。しかし、丘陵南東側、大野二丈線付近の大坪遺跡（昭和63年度調査地点）や矢風遺跡（平成元年度調査地点）では、多くの墓群が確認されており、墓域が今回の調査地点まで広がっていた事を考えると丘陵東側の低台上には弥生前期を中心とするかなりの墓が存在するようである。また、肩部に施されていた山形文の彩文については、前記の2遺跡でも1基ずつ出土しており、今後の類例を待ちたいが、この時期の甕棺の儀礼として注目される。また、赤色顔料の分析については、本田氏に御願いして、玉稿を頂いているので参考されたし。

④ 石崎地区遺跡群について

稻作開始期の遺構が、良好な状況で依存する石崎地区遺跡群は、その範囲自体も広域で今後、曲り田遺跡以外の早期の集落などの検出に期待がもてる。今回の調査では、丘陵東側で弥生中期と早期の2枚の水田面を検出できたが、いずれも低台上を南北に走る3号溝状遺構を中心としており、この溝がどこまで伸びるかは不明であるが、昭和63年度の調査地点で検出された河川に接続している事は間違いない、丘陵東側のかなりの範囲が水田面となるのは確実であろう。また、青灰色シルト層（遺構面）内の縄文土器については、主に晩期末のものが大半を占め、一部、後期前半の阿高系土器も出土している。このため、下層の存在は疑うべきものではなく、石崎地区遺跡群も福岡市板付遺跡、唐津市菜畑遺跡同様の様相を呈しているのであろう。今後、本格的な稻作の開始が、どこまで上がるかは定かでないが、同地区の調査に期待がもてる。

V. 付 論

大坪遺跡出土甕棺の彩文に用いられた赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター 本田光子

はじめに

大坪遺跡出土の甕棺の彩文に用いられた赤色物が何であるかを知るために、顕微鏡観察、蛍光X線分析を行った。

出土例に関する今までの知見に寄れば、出土赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第2鉄：赤鉄鉱（Hematite）を主成分とするベンガラと、硫化水銀（赤）：辰砂（Cinnabar）を主成分とする朱の2種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹がある。これら3種類の赤色顔料を考えて調査を行った。

試料

彩文が認められる部分の破片を借用して、実体顕微鏡下で観察を行った所、彩文部分は土器焼成後に赤色物なんらかの膠着剤により赤色の彩文を施していることが観察された。また、文様の端部から針先に付く程度の量を探り顕微鏡観察を行った。蛍光X線分析の測定は破片のままで行った。

顕微鏡観察

光学顕微鏡により透過光・落射光40～400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類・粒度等を観察するものである。三者は特に微粒のものが混在していないければ、粒子の形状、色調等に認められる特徴の違いから、検鏡により経験的に見極めがつく。

試料には赤色顔料の顕著な特徴を持つ粒子は認められなかった。いわゆる広義のベンガラと呼ぶ赤色の土と思われる粒子が認められた。

蛍光X線分析

赤色物の主成分元素の検出を目的として実施した。九州産業大学総合機器センター設置の理学電機工業株製蛍光X線分析装置システム3511を用い、X線管球；クロム対陰極、印加電圧；50kV、印加電流；50mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管で測定を行った。

赤色物の認められる彩文部分とそうでない部分の2ヶ所について測定した。主成分元素としては鉄のみが検出され、水銀は検出されなかった。この他主として土器胎土部分や付着の土砂に由来するストロンチウム、ルビジウム等の元素が検出された。鉄は土砂部分にも必ず含まれるので、赤色顔料由來のものとの区別は蛍光X線強度から判断したが、赤色部分の方がやや高い程度であった。なお、鉛丹の主成分元素である鉛は検出されなかった。

結果

以上の結果から、彩文に用いられた赤色物は、酸化鉄を主成分とするいわゆる広義のベンガラ、と考えられる。

考察

土器の赤色塗彩の残りはその塗彩技法と埋蔵環境に大きく左右される。弥生前期の彩文土器は焼成後塗彩であるため、一般に文様部の残りが悪い。本来は全面黒色下地に赤色で文様を描いたものであるが、発掘時に土の方へ彩文部分が付いてしまったり、運良く残っても剥落する場合が多い。本遺跡出土例も例外ではなく、調査担当者の適切な判断、取り上げにより、かろうじて残っている状態である。これに対して丹塗磨研土器の赤彩色は焼成前塗彩のため、彩文土器に比べると赤色顔料の残りは良いのが普通である。

赤色物による土器装飾法は、大きくこの焼成後塗彩つまり「彩文、赤彩」と焼成前赤色塗彩つまり「丹塗磨研」とに分かれる。前者は、彩文土器と赤色塗彩土器に分かれる。これらは埋蔵環境の違いで残り具合いも異なるのではっきりとは言えないが、そもそも赤色を固定する膠着剤の違い、すなわちまったく異なる装飾技法によるものではないだろうか。さらに使われる赤色顔料も、朱、ベンガラ（パイプ状粒子を含むものと含まないもの）、広義のベンガラとあり、これらを单一で使用するだけでなく、重ね塗りしたり混ぜたりと多彩である。これに対して、後者は「丹塗磨研」と呼ばれるものであるが、これもまたその内容は多様である。使われる赤色物は、酸化鉄による発色を想定した材料以外は考え難く、今までの調査例からも裏付けられる。具体的には、ベンガラを塗彩あるいは擦り込んで焼いたもの、広義のベンガラを同じように使ったもの、ただ「ミガキ」だけのもの、いわゆる「スリップ（化粧土）をかけたものなどが認められる。

本例は朱やベンガラではなく、広義のベンガラを使った彩文であり、弥生時代前期の赤色を用いた土器装飾法の中での一つの位置を示すものであろう。彩文土器に使われた赤色顔料の調査例はまだ30例に満たず、調査資料の増加が望まれているところである。

なお、一般にベンガラというのは主成分元素が鉄であり、主成分鉱物は赤鉄鉱である赤色顔料を指す。出土赤色顔料の「ベンガラ」の場合は主成分鉱物として赤鉄鉱の他褐鉄鉱（針鉄鉱、燐鉄鉱等）、非晶質の褐鉄鉱があり、これらが単一にもちいられたり、その混合物であることも多い。色は粒子の大きさで左右されるので一概には言えないが、赤鉄鉱と非晶質の褐鉄鉱が混合している場合、後者の量が多いと赤色が強くなるのではないかともいわれている。一方、主成分の定性分析で鉄が確認され、他に水銀、鉛が検出されなければ、主成分鉱物として赤鉄鉱が同定されなくともベンガラであるという判断もごく一般的になされている。さらに主成分の定量分析を行い、鉄の含有量の多少からベンガラの種類（品位・生産地）を分けることもある。また、出土ベンガラの粒子に種々の形状があることもわかってきており、パイプ状を呈する特異な粒子は産地を示す指標ではないかという指摘もある。いずれにしても、これもまた調査資料の増加が望まれる。

今回、調査の機会をお与え頂きました二丈町教育委員会古川氏および蛍光X線分析の測定をお世話頂きました九州産業大学総合機器センター助手古賀啓子博士に感謝致します。

VI おわりに

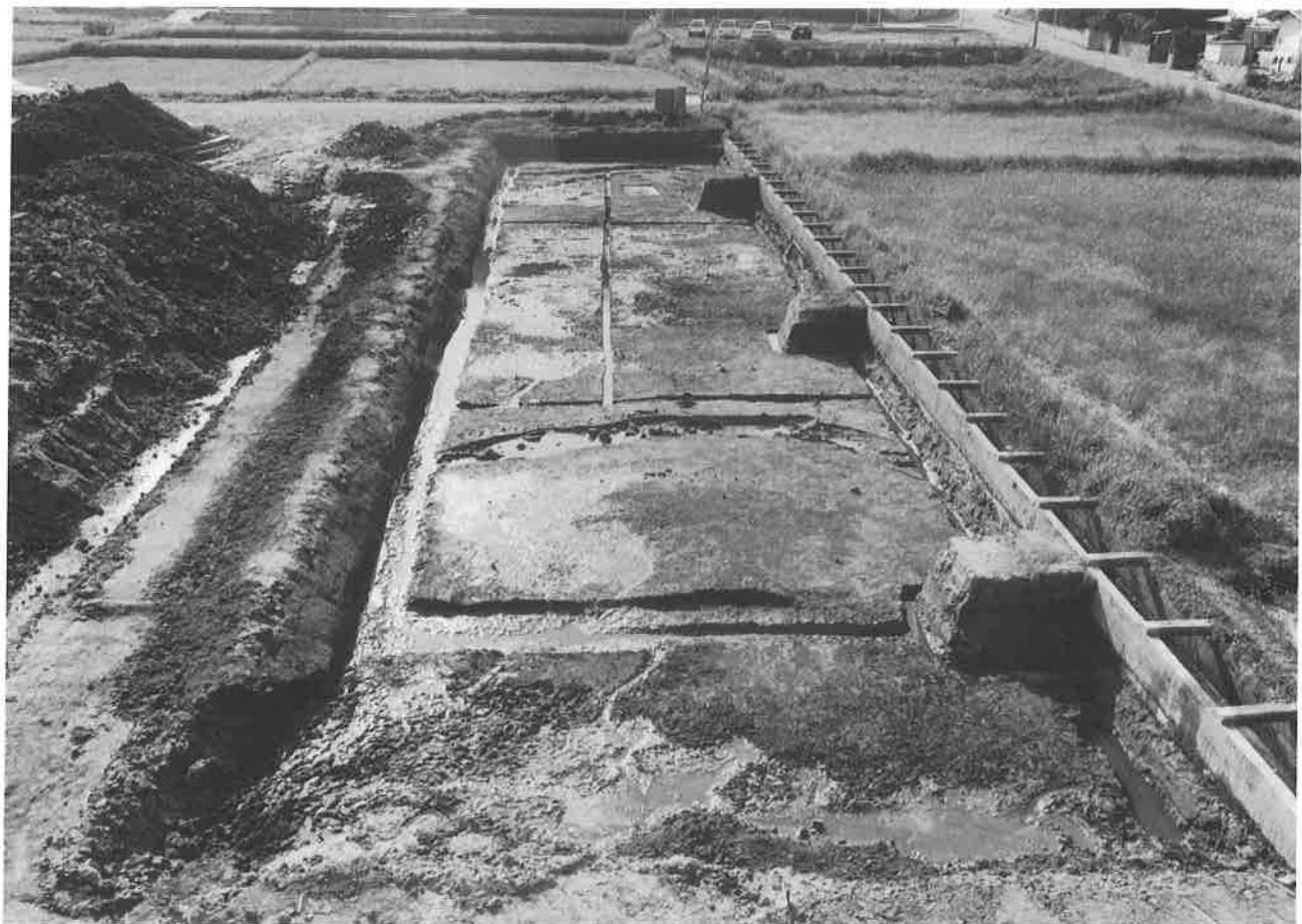
今回の報告にあたり、本田光子氏に玉稿を戴いた他、以下の方々に多くの御教授を賜りました。また、調査中においても数々の御指導を受け、報告書の刊行となった事に対し、御礼申し上げます。執筆者の勉強不足によりまとまりのない報告書となりましたが、末尾ながら感謝の意を表し、終わりとしたい。

橋口達也（福岡県教育委員会）、中間研二（福岡県教育委員会）、緒方 泉（福岡県教育委員会）、趙 現鐘（国立光州博物館）、川村 博（前原市教育委員会）、岡部裕俊（前原市教育委員会）、角 浩行（前原市教育委員会）、西川寿勝（大阪府教育委員会）、西谷 正（九州大学教授）、野井英明（北九州大学教授）、本田光子（福岡市埋蔵文化財センター）

参考文献

- | | |
|----------------------|-------------------------------------|
| 『石崎 曲り田遺跡』 I～III | 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 第8集
・第9集・第11集 |
| 『石崎 曲り田遺跡』 第2次調査 | 二丈町埋蔵文化財調査報告書 第2集 |
| 『曲り田周辺遺跡』 I～IV | 二丈町埋蔵文化財調査報告書 第4集～第7集 |
| 『二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告』 | |
| 『板付遺跡』 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第35集 |
| 『拾六町平田遺跡』 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第305集 |
| 『菜畑遺跡』 | 唐津市埋蔵文化財調査報告書 第5集 |
| 『巡見道遺跡』 | 唐津市埋蔵文化財調査報告書 第3集 |
| 『古代の水田を考える 田』 | 帝塚山考古学談話会第500回記念 |
| 『吉備の考古学的研究（上）』 | |
| 『弥生文化の研究』 5 道具と技術 I | |
| 『弥生文化の研究』 6 道具と技術 II | |
| 『図録 農耕の技術とまつり』 | 池島・福万寺遺跡の調査から |
| 『垂柳遺跡』 | 発掘調査概報青森県埋蔵文化財調査報告書第78集 |

図 版



a I 区全景（東側より）



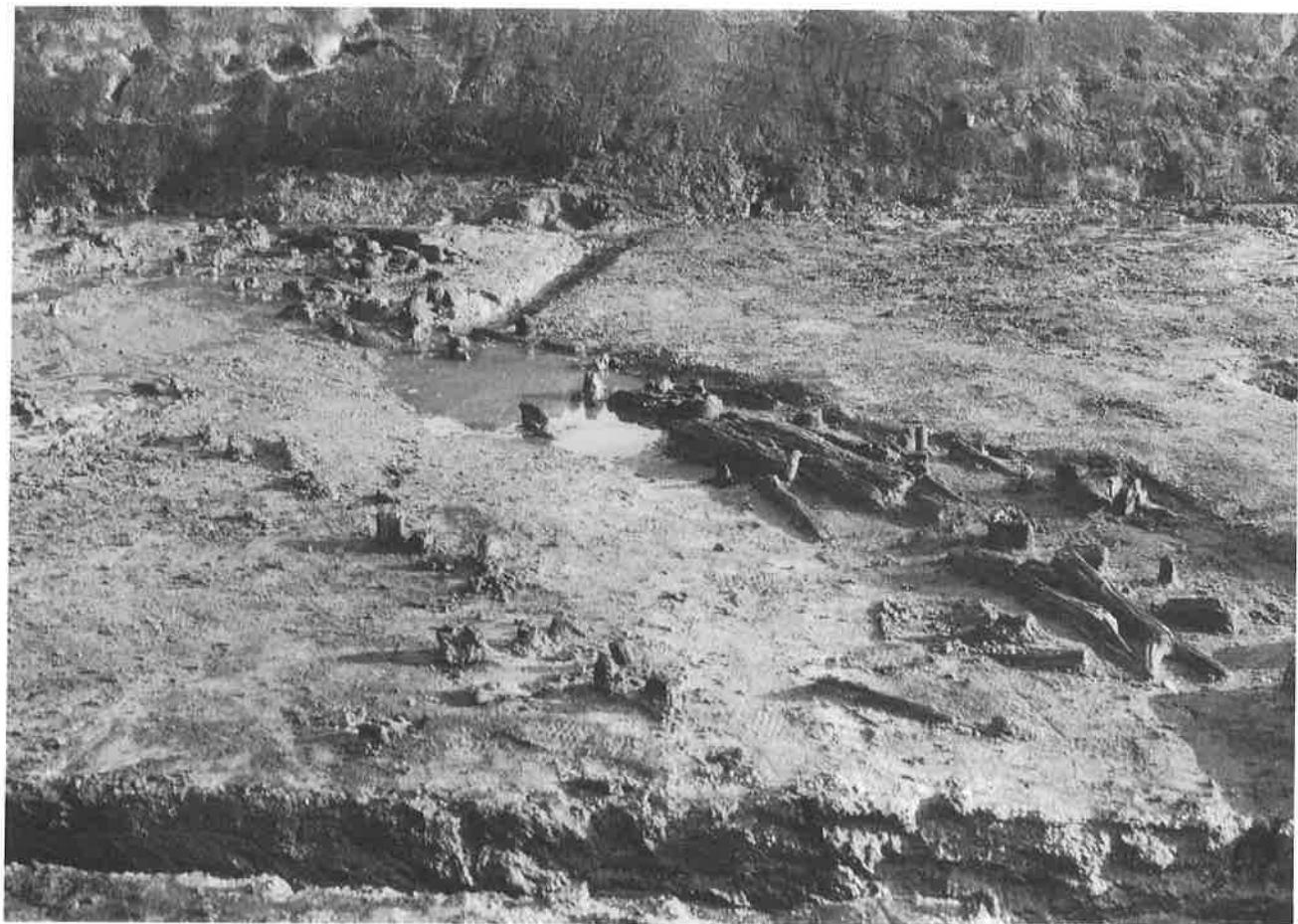
b 1号・2号溝状遺構全景（南側より）



a 1号溝状遺構



b 2号溝状遺構



a 西側杭列群



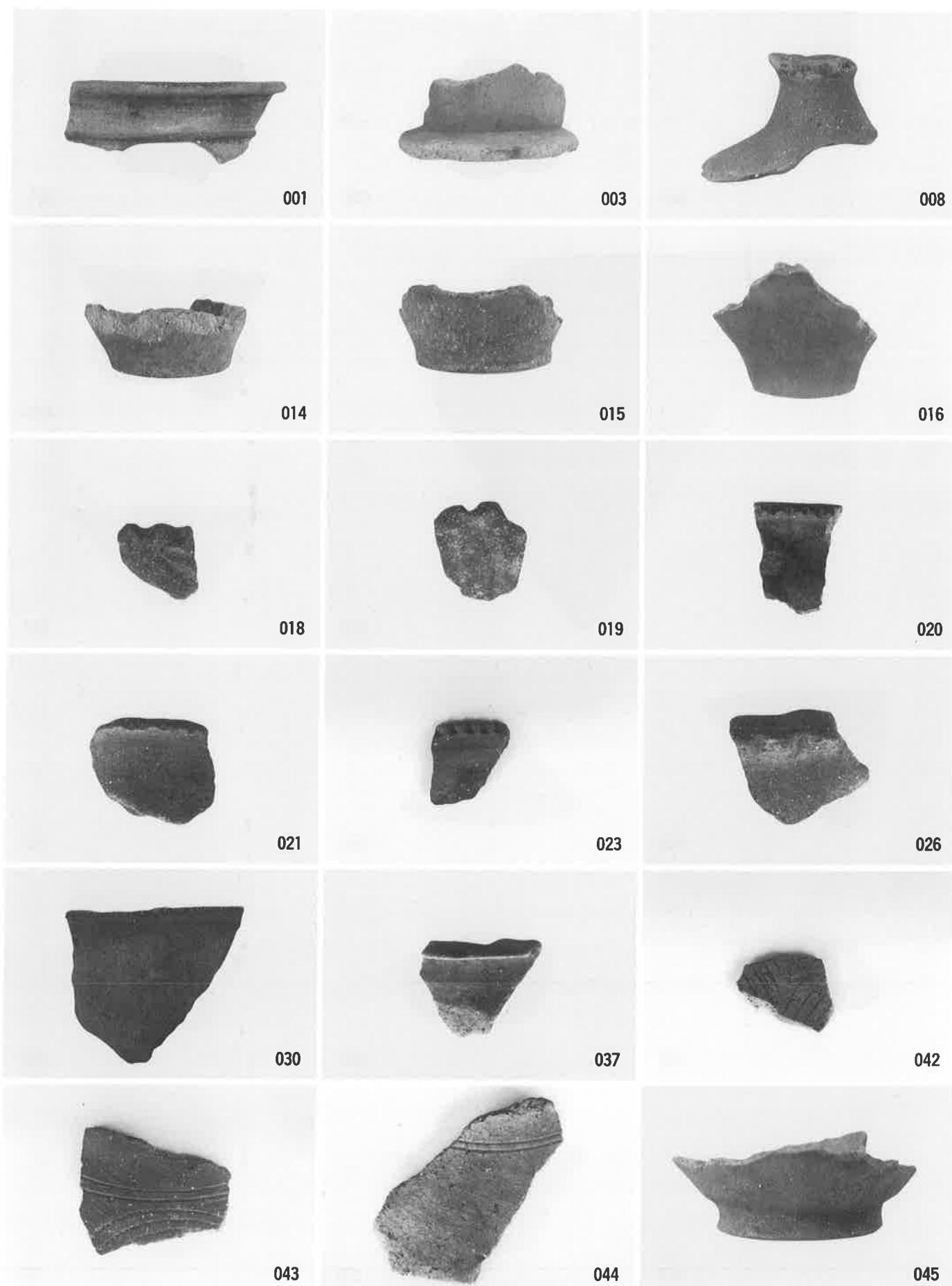
b 中央杭列群



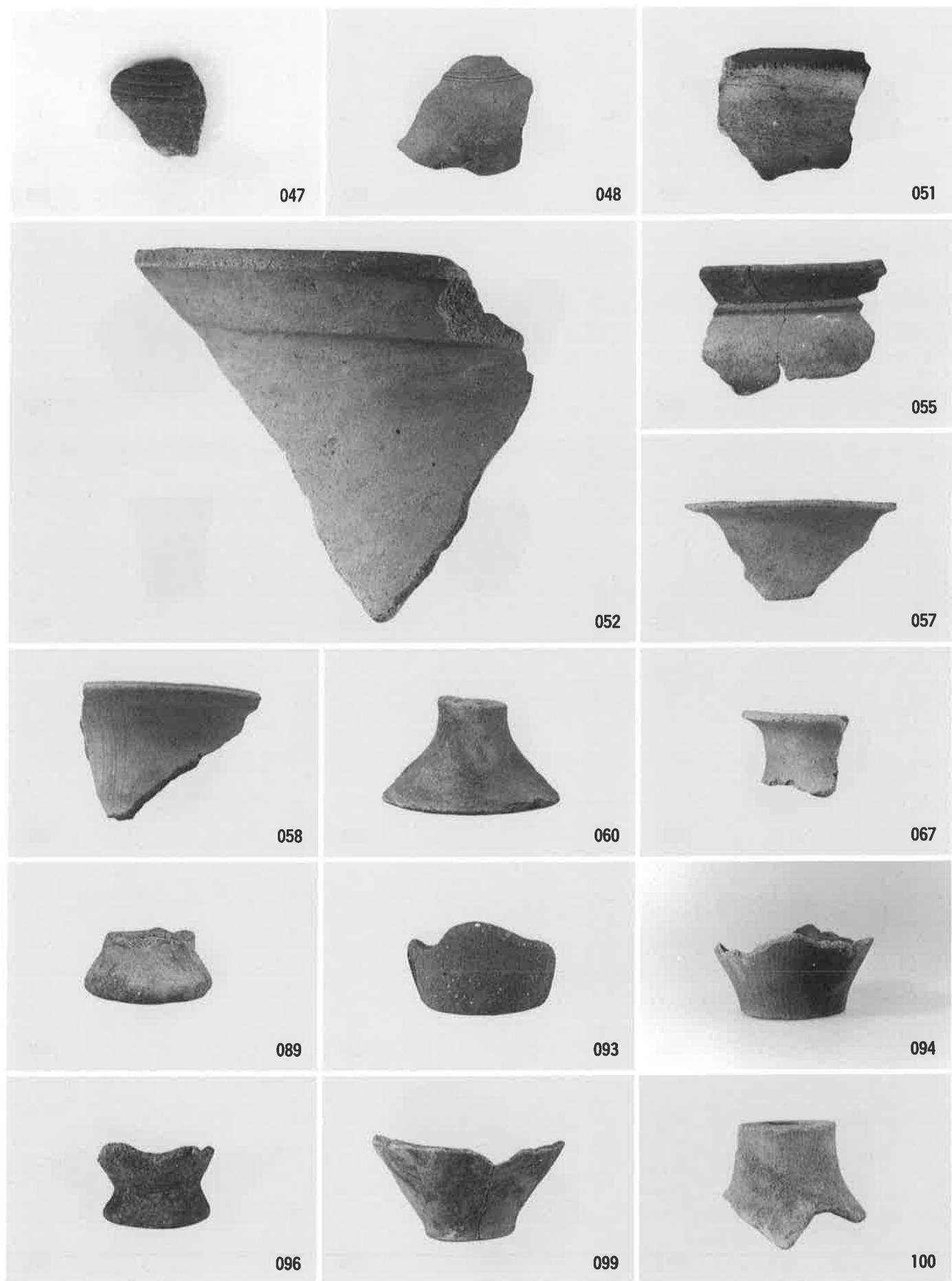
a 3号溝状遺構



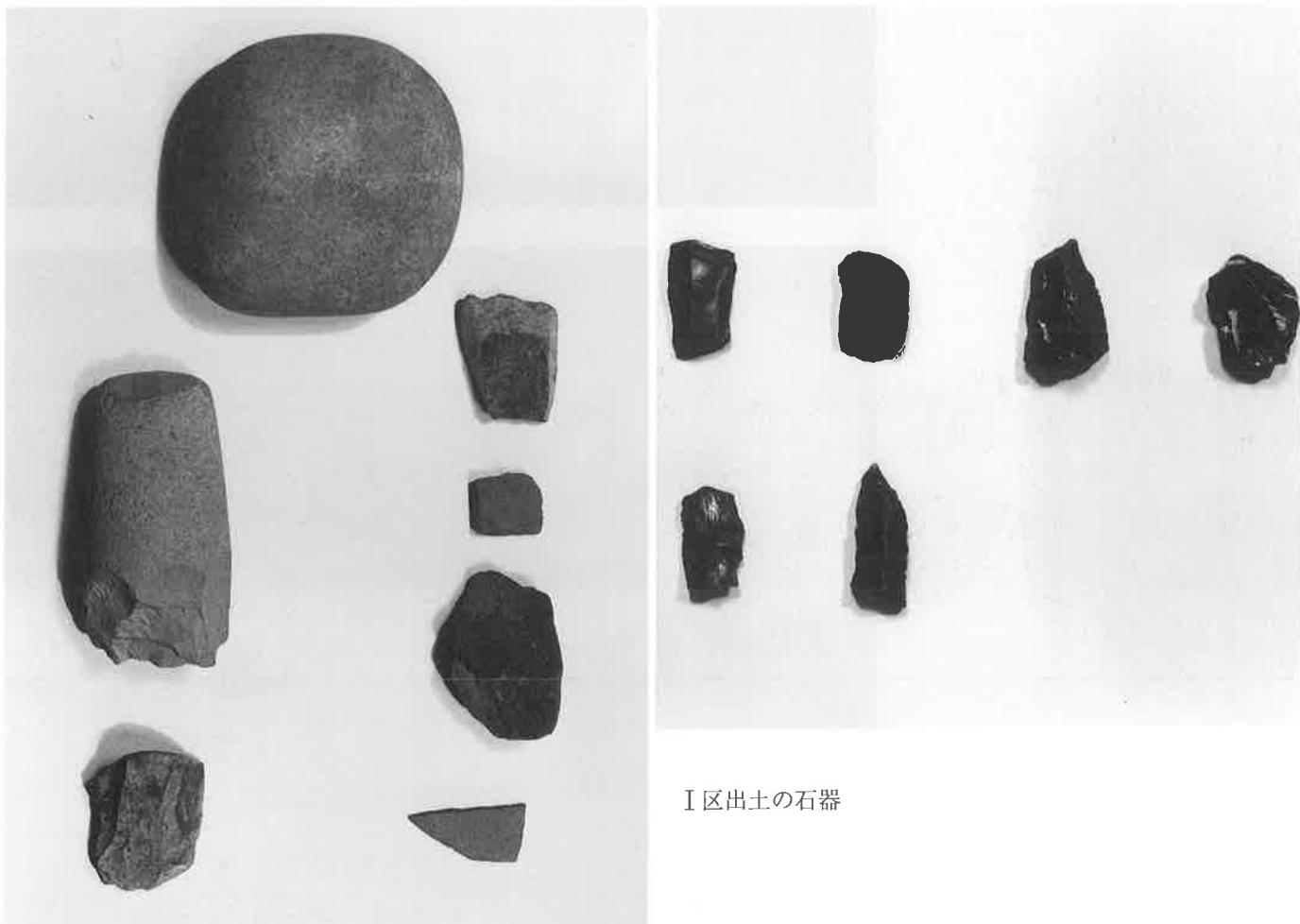
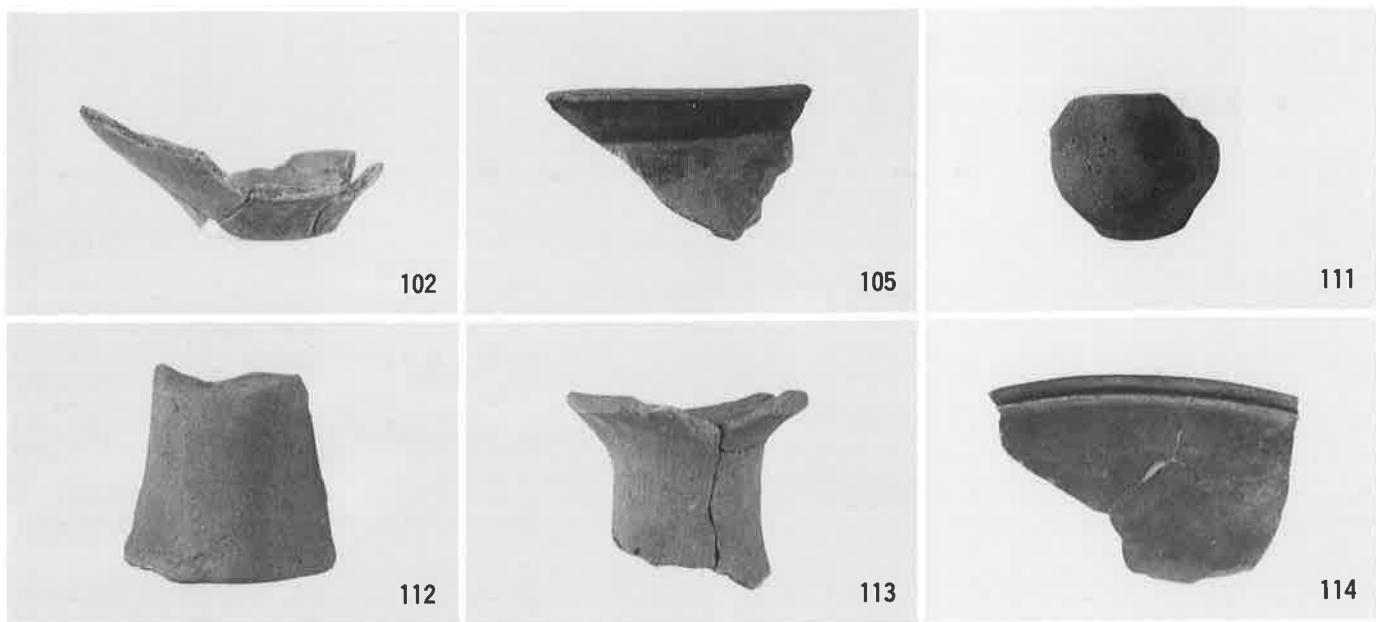
b 杭列 F



I 区出土遺物 - 1



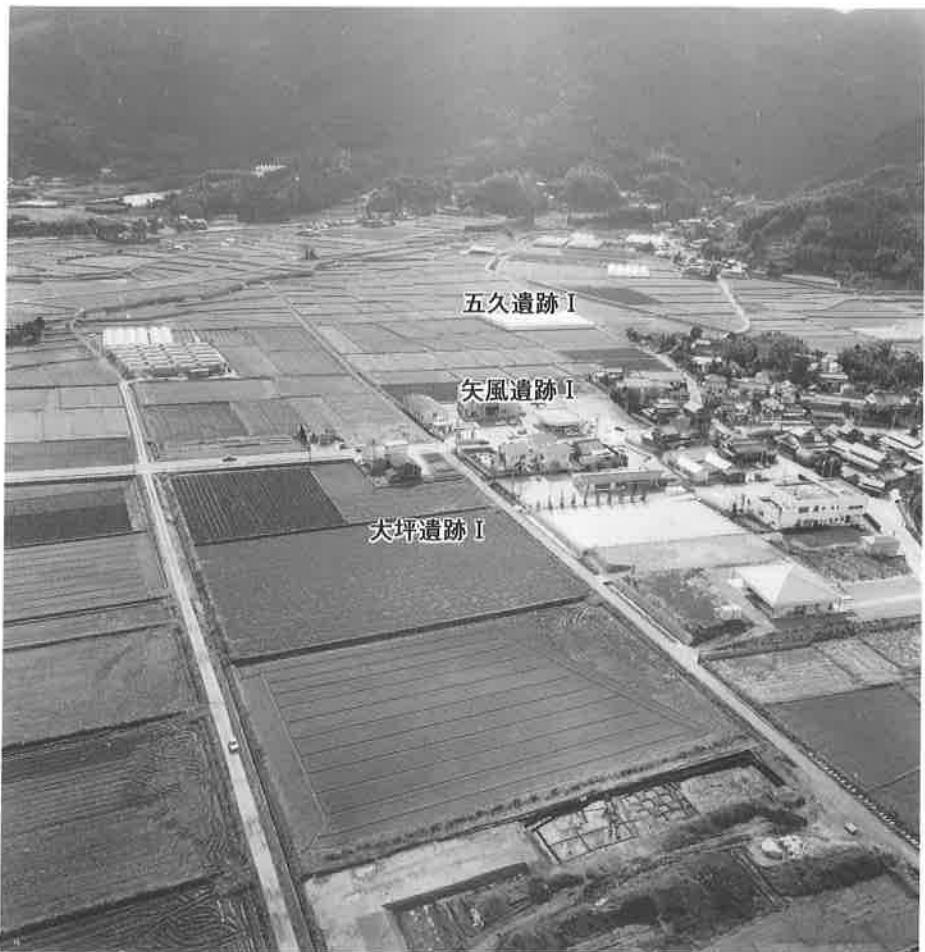
I 区出土遺物－2



I区出土の石器

I区出土遺物-3

a 五久地区を望む



b II区全景（真上より）





a 3号溝状遺構



b 同側面



a 平鍬出土状況



b 舟形隆起出土状況



a 3号溝状遺構内嘔



b 瓢棺墓



a 矢板列検出状況



b 四つ又鍬出土状況



上甕



115



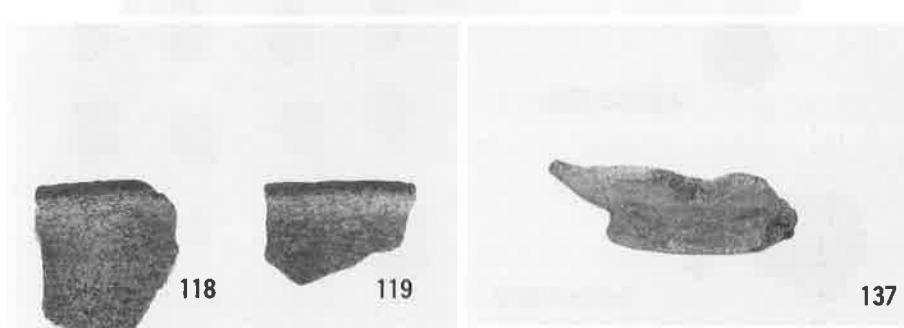
下甕



116



117



118

119

137

138



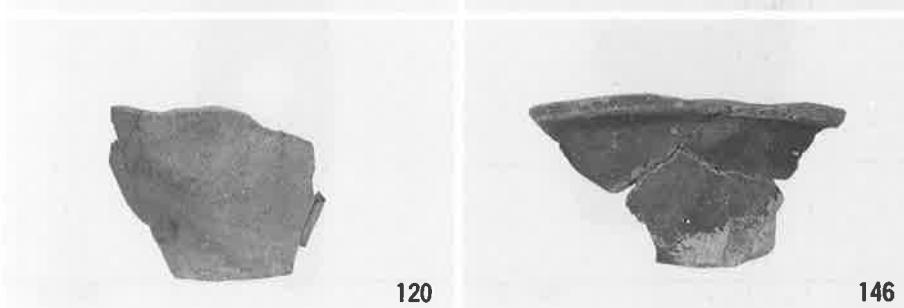
121



139



141



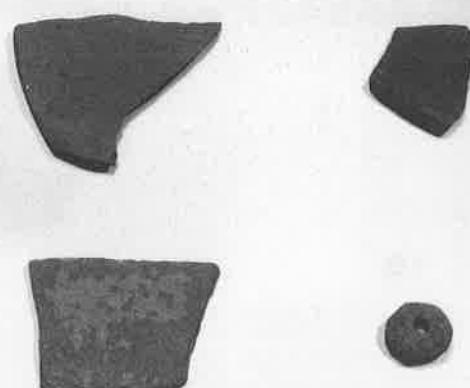
120



146



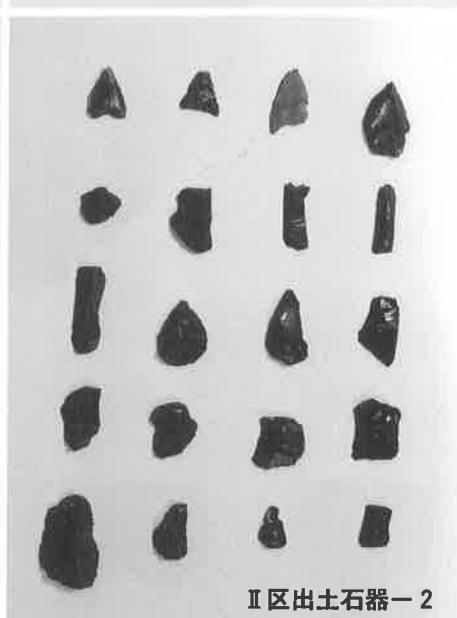
149



II区出土石器-1



その他の遺物



II区出土石器-2



W-1



W-2

W-3



W-4

II区出土遺物-2



III区全景（石崎丘陵を望む）



a 水田検出状況



b 3号溝状遺構と足跡検出状況



a 3号溝状遺構（南側より）



b 同（北側より）



a 三つ又鍬出土状況



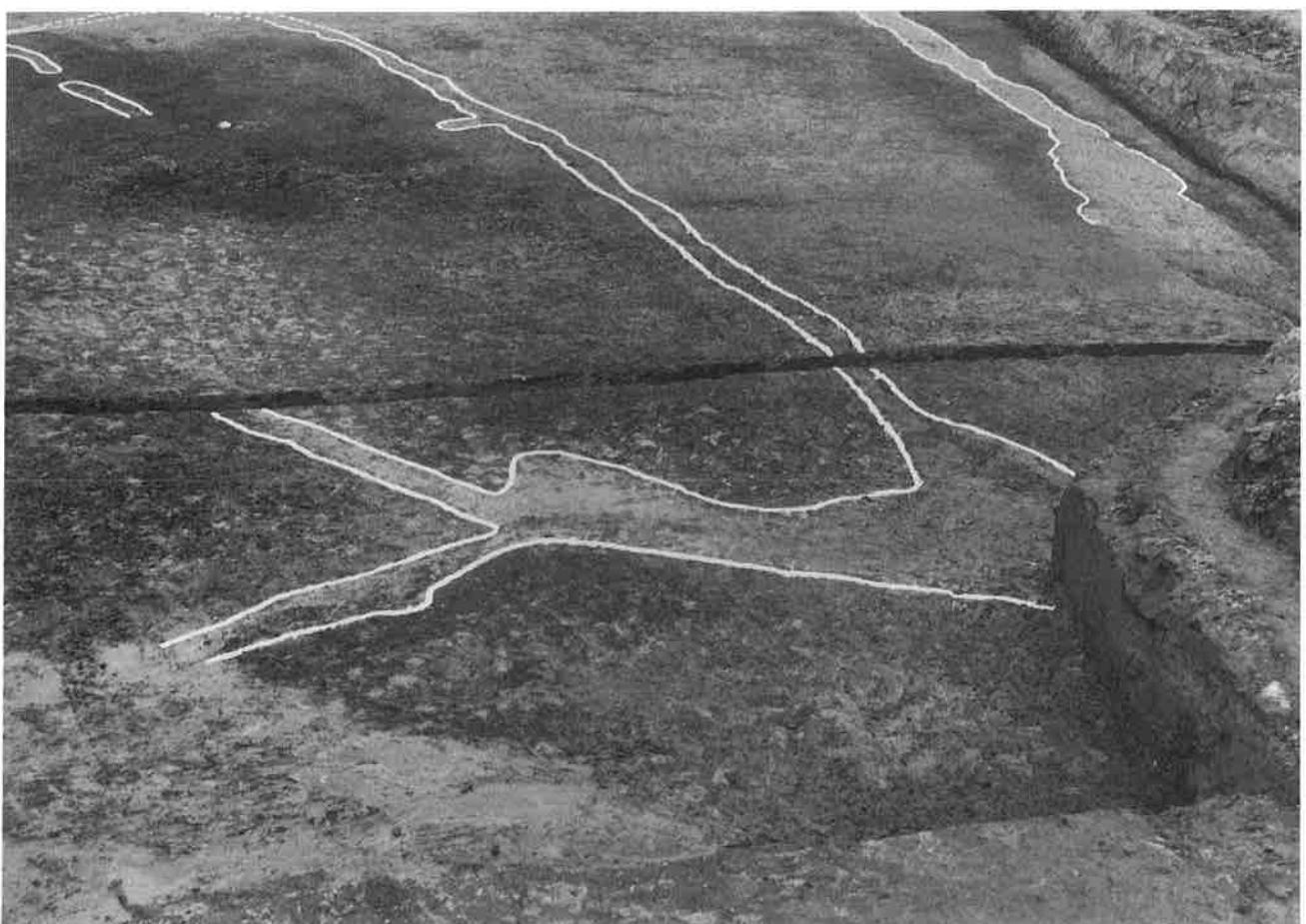
b 用途不明木器出土状況



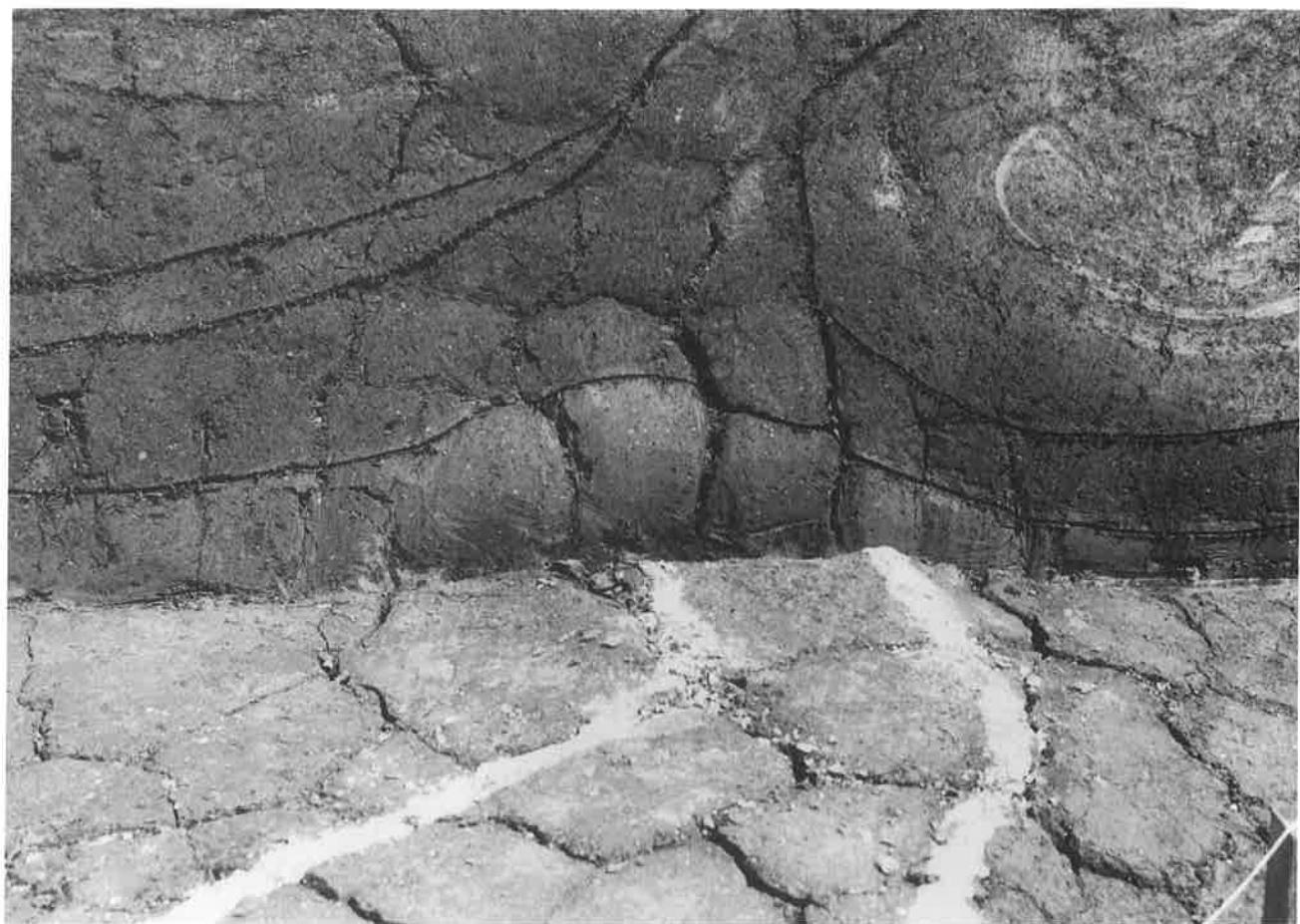
第2 遺構面水田全景



a 水田検出状況



b 水田検出状況



a 畦断面



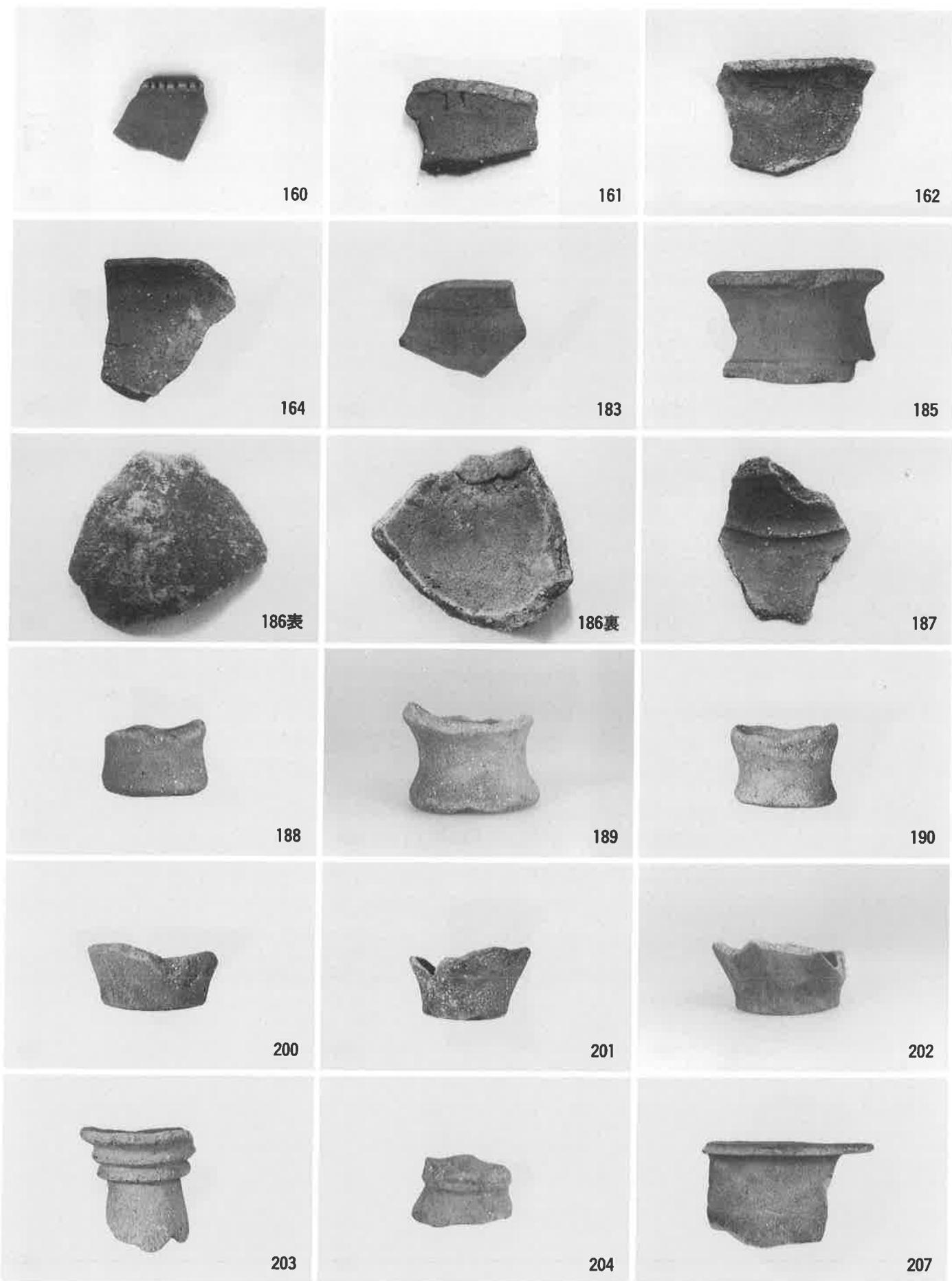
b 畦横板検出状況



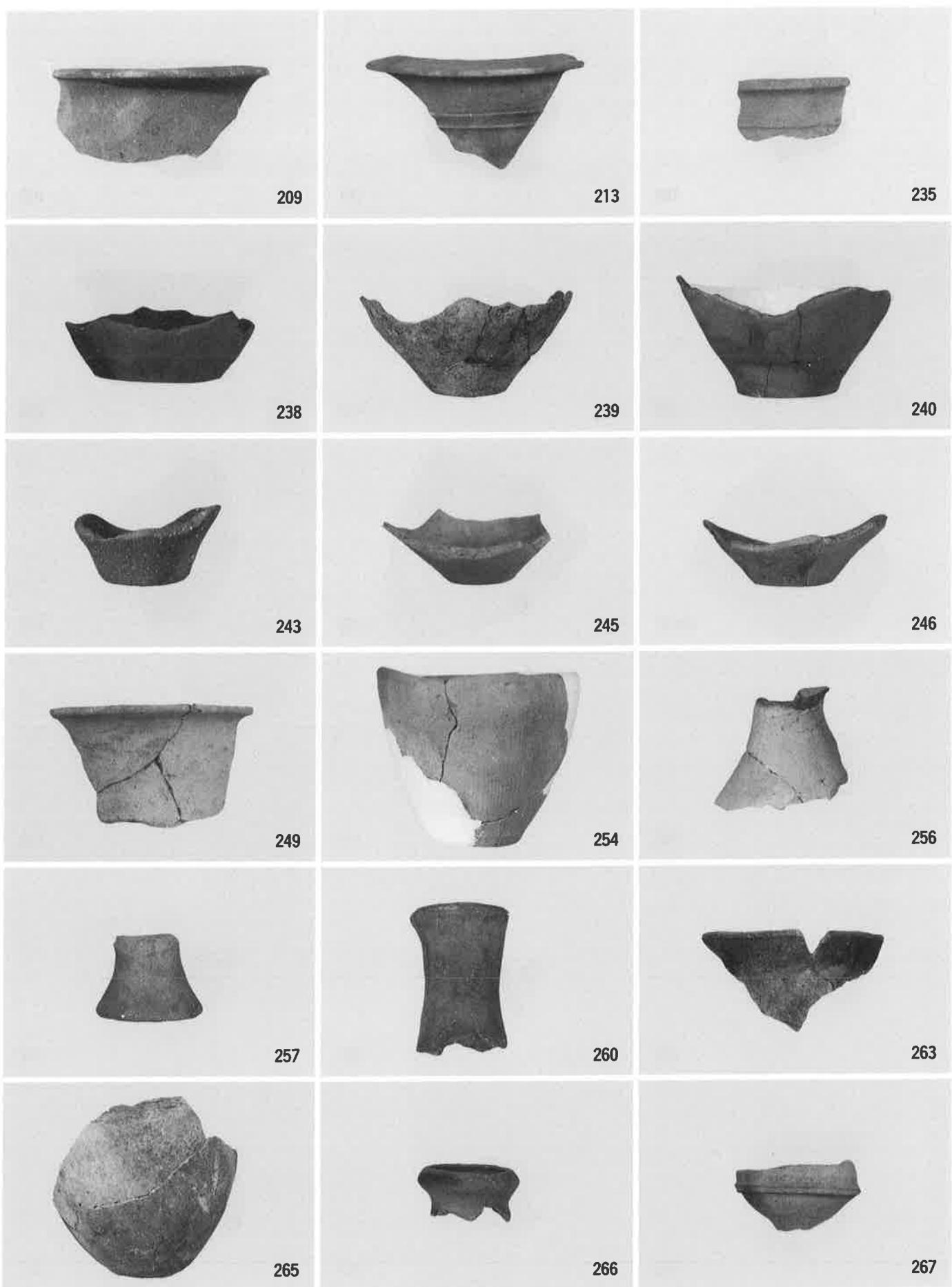
a 杭・矢板による畦補強状況



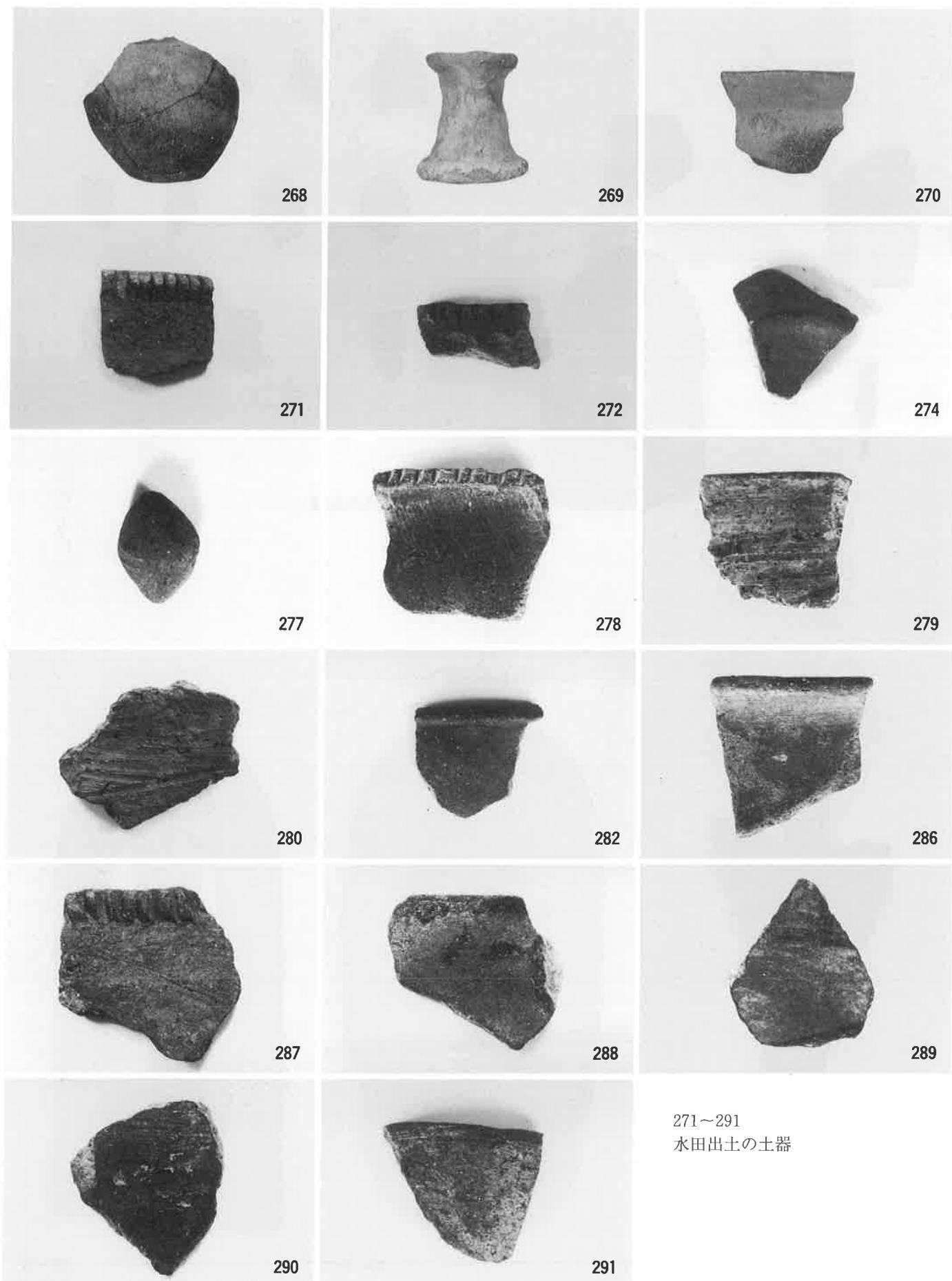
b 同 (畦除却後)



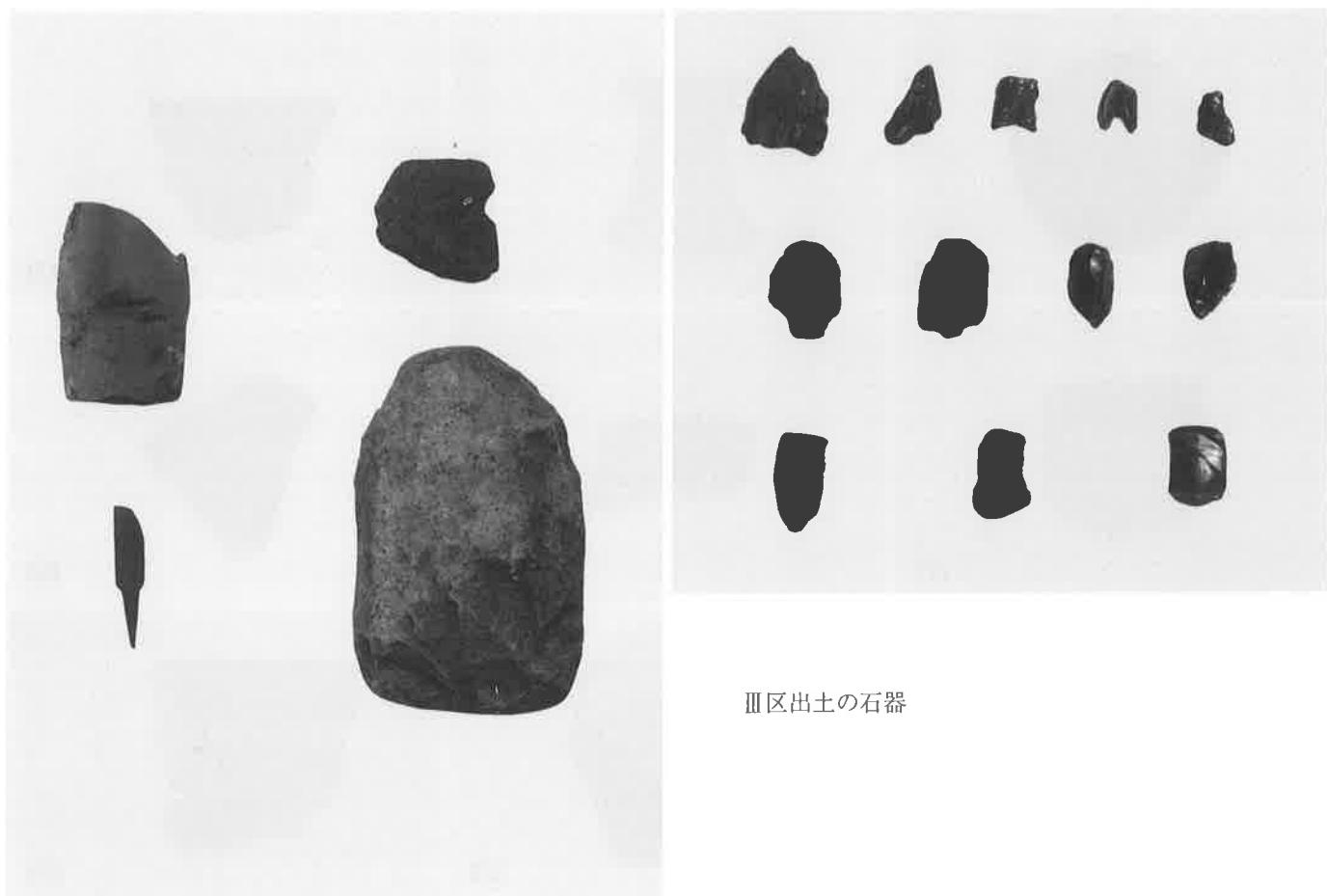
Ⅲ区出土遺物-1



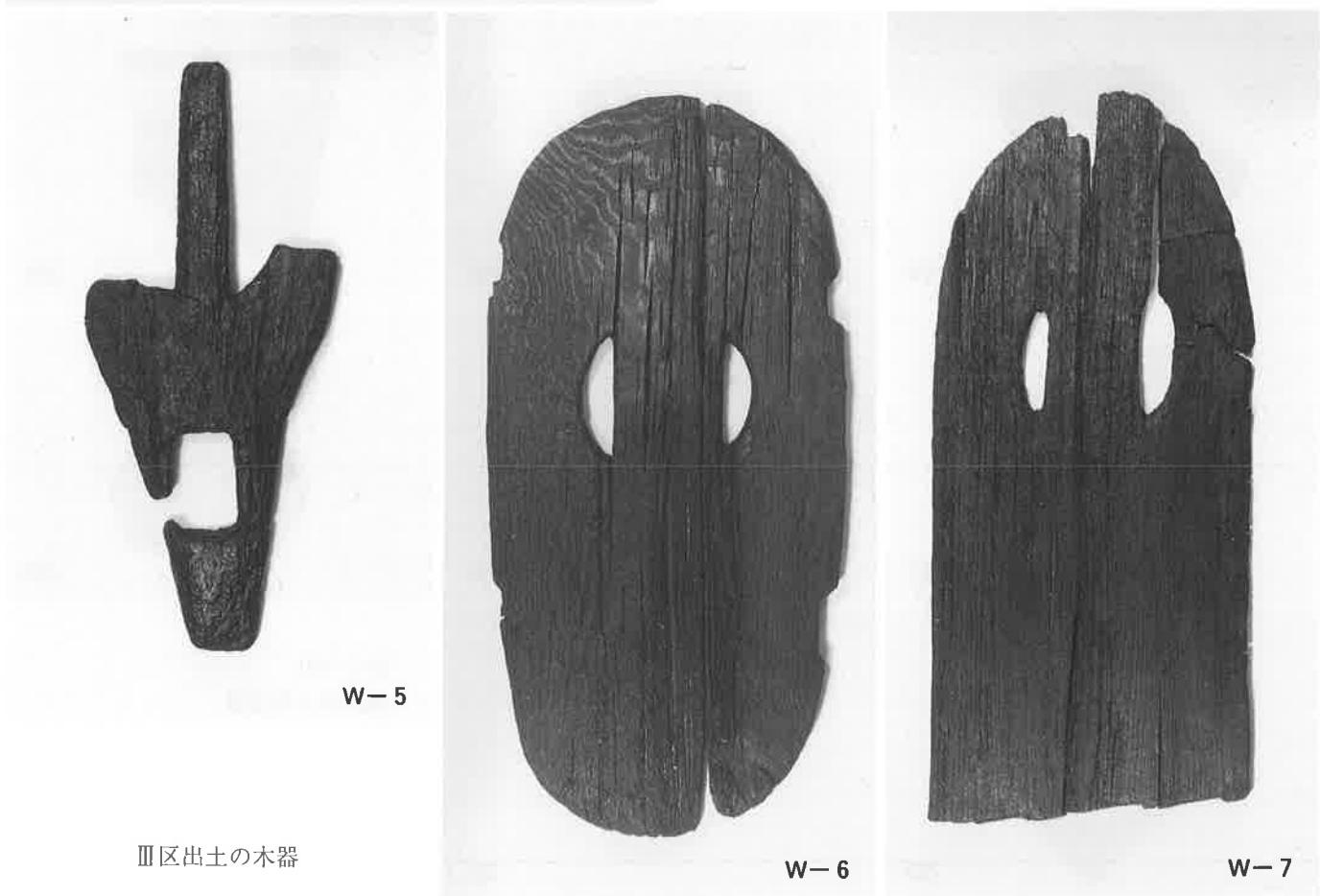
III区出土遺物-2



271～291
水田出土の土器



III区出土の石器



W-5

W-6

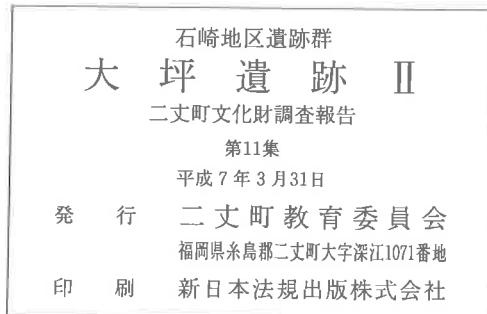
W-7

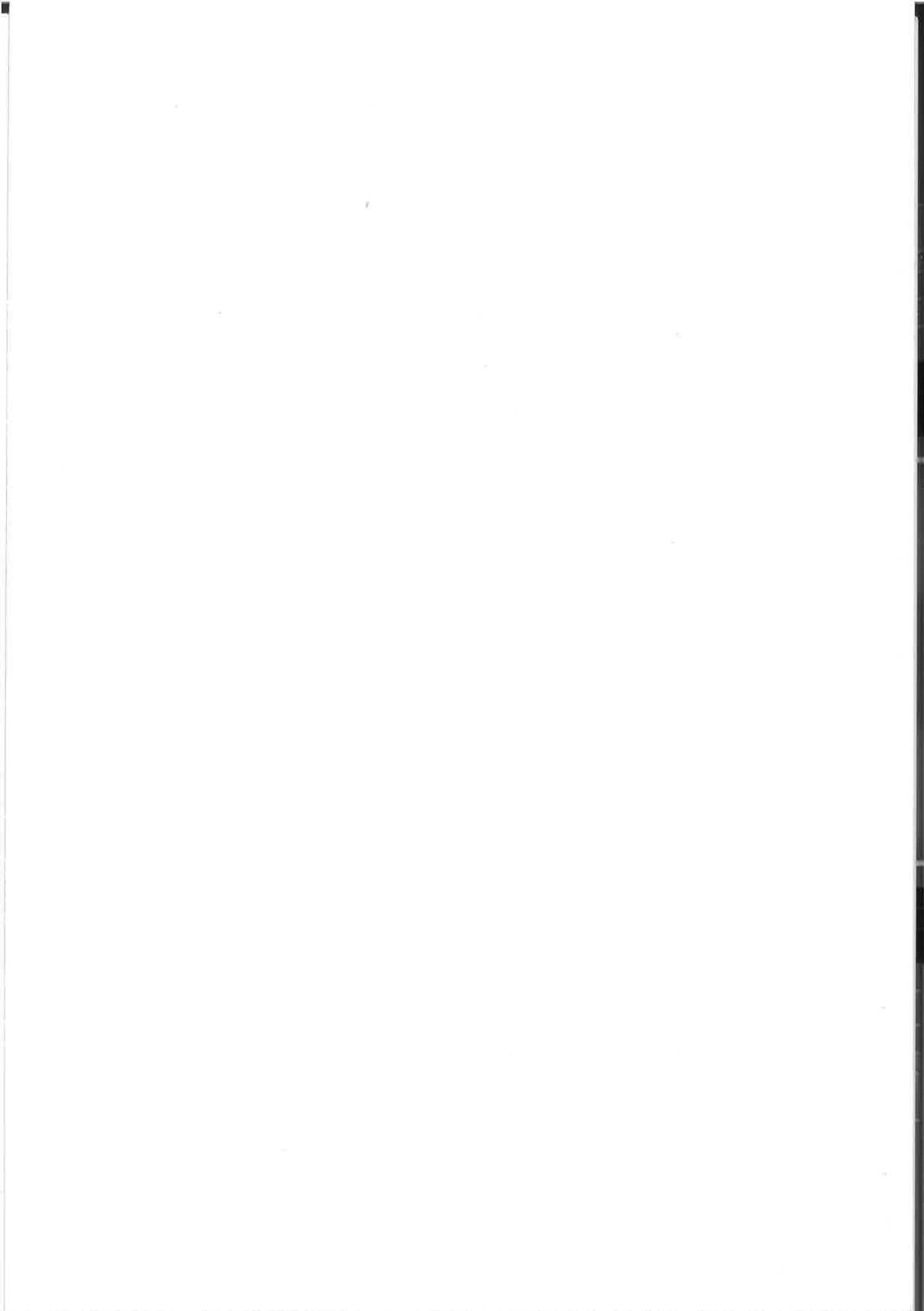
III区出土の木器

III区出土遺物-4

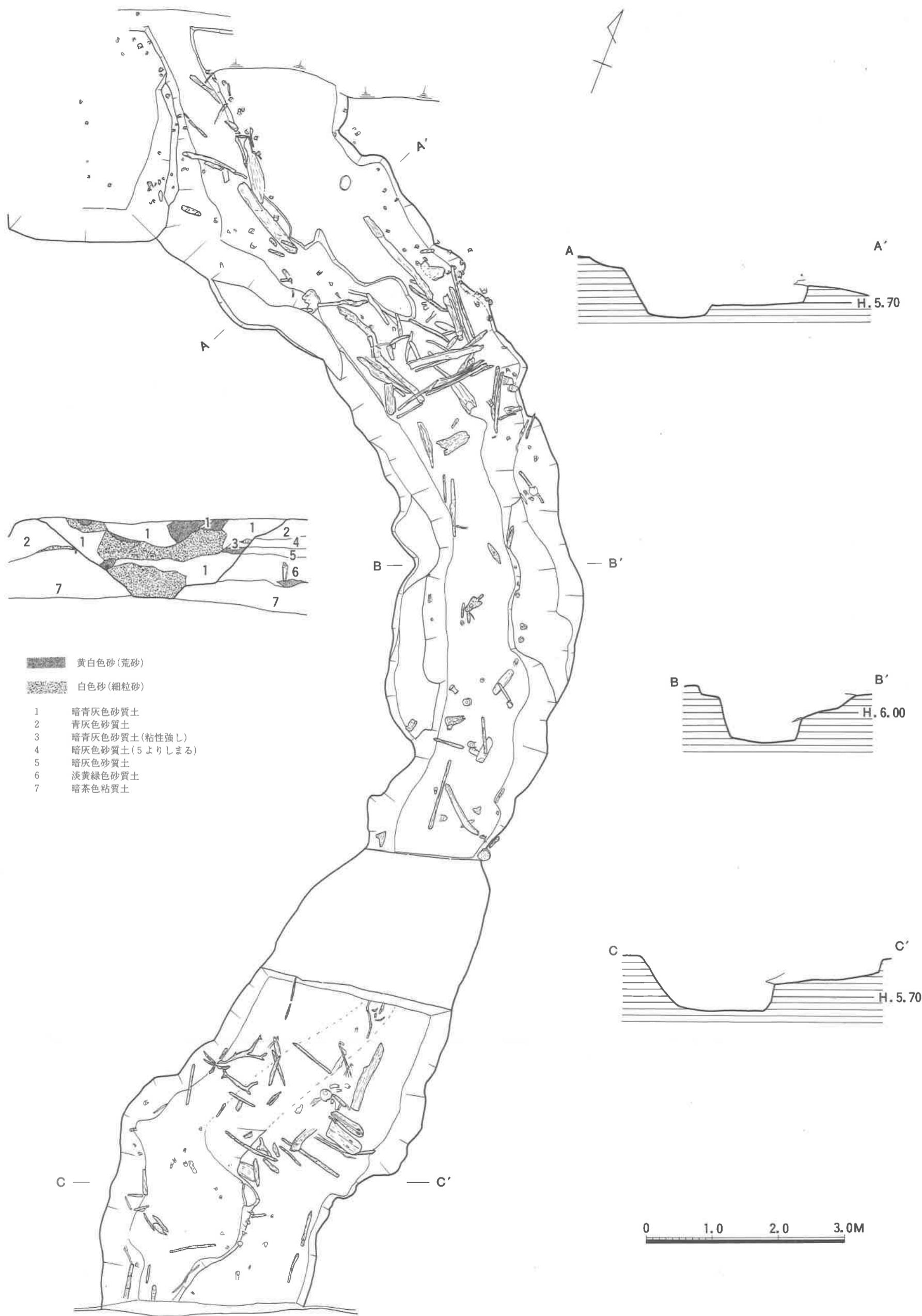
報告書抄録

ふりがな	おおつぼいせき							
書名	大坪遺跡Ⅱ							
副書名	石崎地区遺跡群							
卷次								
シリーズ名	二丈町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第11集							
編集者名	古川秀幸							
編集機関	二丈町教育委員会							
所在地	〒819-16 福岡県糸島郡二丈町大字深江1071 TEL (092)325-1111							
発行年月日	1995年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大坪	福岡県糸島郡二丈町大字石崎字大坪	40462		33° 30' 52"	130° 9' 59"	19921007 ~ 19930331	2,000	農業用貯水池建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大坪	水田	縄文～弥生	臺棺墓 溝状遺構 水田	1 3 9	磨製石器 木製農耕具	稻作開始期の水田遺構		











付図 遺構配置図 (S=1/200)